

# 山形県中世城館遺跡調査報告書

## 第 1 集 (置賜地域)

平成 7 年 3 月  
山形県教育委員会

# **山形県中世城館遺跡調査報告書**

## **第 1 集 (置賜地域)**



鎌山城（米沢市）  
曲輪IIと堀切の間の土壘



長手館（米沢市）  
堀切



宮沢城（南陽市）  
南丸跡の西側水堀



竹森館（高畠町）  
前景は現在製糸工場になっている居館跡



川沼館（高畠町）  
昔から広く深かったと伝えられる堀跡



四ツ谷館（長井市）  
西側土壁の残り高さ 2.5 メートル×下底 5 メートル



平吹館（長井市）  
正面の長屋門



矢須吉（飯豊町）  
尾根の中腹から北方向を望む

## 序

本県には豊かな自然とともに、集落跡、古墳、城館跡、窯跡など多くの遺跡が残っています。これらの遺跡は、かつてわれわれの祖先が創造したものであり、その当時はそれぞれが社会の構成要素として一定の役割を果たしていたわけですが、現在ではその機能が失われ、ほとんどが忘れ去られております。一方、物質的な豊かさの追求から教育・文化等、内面的な充実が求められる成熟社会を迎えるなかで、近年、当時の社会生活や歴史に対する人々の関心はとみに高まりを見せております。

この報告書は、昭和63年度から文化庁の国庫補助を受けて実施してきた中世城館址調査の内、置賜管内分を第1集としてとりまとめたものです。これまで本県の中世城館遺跡については、その形態、遺構の状況等に関する総合的な調査は行われてきませんでした。この報告書が、当時の人々の暮らしや地域の歴史について知る基礎資料や、豊かな地域づくり等のためにご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、略測図の作成等、困難な調査をお引き受けいただいた調査員、御指導を賜りました調査委員及び御協力いただいた各市町村教育委員会各位に厚くお礼を申しあげます。

平成7年3月

山形県教育委員会  
教育長 佐藤 進

例 言

- 1 本書は、昭和63～平成6年度に文化庁の国庫補助金を受けて実施した中世城館址調査の報告書第1集である。

2 この報告書第1集には、山形県置賜地域の次表の市町に分布する中世を主とする城館遺跡の調査成果を掲載した。

地区、市町村名及び 市町村コード		城館遺跡総数	「城館遺跡の概要」 掲載城館遺跡数	備考
東 南 置 賜	米沢市 202	213	111	
	南陽市 213	62	51	
	高畠町 381	36	36	東置賜郡
	川西町 382	109	108	"
	計	420	306	
	長井市 209	54	48	
西 置 賜	小国町 401	23	13	西置賜郡
	白鷹町 402	31	26	"
	飯豊町 403	35	24	"
	計	143	111	
合計		563	417	

- 3 調査対象のすべての城館遺跡を市町村ごとにまとめて「市町村別城館遺跡一覧表」を作成した。この一覧表に掲載されている城館遺跡数は2の表の「城館遺跡総数」と一致する。

4 調査した城館遺跡の位置及び範囲を「城館遺跡分布図」に表示した。この地図は、建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を3万5千分の1に縮小したものである。

5 城館遺跡の遺跡番号は、「202-001」のように三桁の数字二組で表示している。前側の三桁の数字は市町村コード（2の表参照）である。後側三桁は市町ごとに城館遺跡をほぼ北西側から順番に番号を付けていったものであり、その市町内で完結する。

6 調査した城館遺跡のうち、位置、規模、内容を把握できたものについて、解説と略測図を「城館遺跡の概要」として掲載した。「城館遺跡の概要」に掲載された城館遺跡数は2の表に掲げたところである。

## 7 市町村別城館遺跡一覧表の構成

### (1) 表様式

## (2) 各項目についての注記

- ア 城館遺跡の名称は地元で一般的に使われているものを用いた。新たに確認した城館遺跡は地名などから名付けた。正式には「〇〇城（館）跡」という名称にするのが正しいが、「跡」の字句は省略した。
- イ 「所在地」は原則として大字段階まで表記した。町の場合は、郡名を省略した。
- ウ 「占地状況」は山頂、平地、その他（丘陵など）に区分した。
- エ 「種別」は館、橋、城砦などに区分した。橋については、グスク、チャシなどと同様に城館の地域性を表していると考えられるので、特に厳密な定義付けをしないで調査員の記載に従った。
- オ 「残有状況」は次の7区分とした。城館遺跡については、種別、規模、特徴などが多く多様なため、「良」から「不良」までは特に厳密な定義付けをしないで、それぞれの区分の判断は、原則として調査員に委ねた。

区分	摘要
良	
やや良	
やや不良	
不良	
地上遺構消滅	地籍図等で城館遺跡であることは確認できるが、現状の地表面観察では遺構が確認できないもの
消滅	山城などが土砂採取等により完全に遺構がなくなったと思われるもの
不明	伝承等により調査地点に城館遺跡が存在すると考えられるが、現状の地表面観察ではその痕跡を確認できないもの

- カ 「現況」は現在の状況を、山林、水田、畑、寺社境内、宅地等と表記した。
- キ 「遺構の状況」は地表面観察で確認できる城館遺跡の遺構（曲輪、土塁、水堀、空堀、虎口、枡形等）を原則としてすべて記載した。
- ク 「地図番号」は「城館遺跡分布図」の地図番号である。
- ケ 「備考」には次のものを記入した。
- ・指定文化財の場合、国、県、市又は町史跡と表記した。
  - ・別称のある場合、別称を記した。
  - ・発掘調査が行われた城館遺跡の場合、（一部）発掘調査済と記した。
- コ 「掲載ページ」は当該城館遺跡が「城館遺跡の概要」に掲載されているページである。

## 8 城館遺跡分布図の内容

- (1) 遺跡番号は「市町村別城館遺跡一覧表」及び「城館遺跡の概要」の遺跡番号と共通であり、この分布図の見開き右側に遺跡番号及び城館遺跡の名称を列挙した。
- (2) 現存する城館遺跡（地上遺構が消滅したものを含む。）は、その位置に範囲を赤色実線で示した。
- (3) 完全に消滅した城館遺跡は、その位置に範囲を赤色破線で示した。

(4) 伝承等により調査地点に城館遺跡が存在すると考えられるが、現状の地表面観察ではその痕跡を確認できないものは、その位置に赤色で×印を付した。

#### 9 「城館遺跡の概要」の構成

##### (1) 全体の構成

遺跡番号	調査者氏名		
ふりがな			
名称（別称）	所在地	築城者	築城時期
史料			
参考文献			
説明文			
略測図（推測図）			

##### (2) 説明文等についての注記

ア 「調査者氏名」は実際に城館遺跡を調査した者を（ ）内に明記した。

イ 「所在地」は原則として小字段階まで記入した。町の場合は、郡名は省略した。また、いくつかの所在地にまたがる場合は、城館遺跡の中心部だけ記入して字名のあとに「ほか」と記入した。

ウ 「築城者」は史料等により確認できる場合は氏名を記入した。特に伝承のみのため不確かなものは、氏名を（ ）で囲んだ。

エ 「築城時期」は史料等により確認できるときは年号を記入した。特に伝承のみのため不確かなものは、年号をくゝで囲んだ。「築城時期」が確認できないときは、次のとおり形状等から推定した時期区分を記入した。

時期区分	期間（西暦）
平安期	794 ~ 1191
鎌倉期	1192 ~ 1333
南北朝期	1334 ~ 1391
室町期	1392 ~ 1466
戦国期	1467 ~ 1589
近世	1590 ~

オ 「史料」及び「参考文献」は調査者が調査に際して参考にした史料及び参考文献を記入した。  
特に参考文献については巻末に一覧表としてまとめた。

カ 「説明文」には原則として次の事項を記載することとした。  
・城館の位置、地形、標高、規模、比高

- ・城館の造構から見た特徴
- ・隣接する城館遺跡との関係
- ・歴史的な背景
- ・その他

(3) 略測図（推測図）についての注記

- ア 「略測図」は、城館遺跡の地表面観察により作成する「網張り図」と同義である。
- イ 網張り調査は城館研究の基本となる調査であり、「網張り図」は単なる見取り図と異なり、次の3つの条件を満たすものとされている。(千田嘉博ほか著『城館調査ハンドブック』新人往来社発行)
- (ア) 城館造構の現況平面図であること
- (イ) 城館の防御造構が適確に示されていること
- (ウ) 研究の基礎資料となり得るために測量（略測量を含む。）が行われていること。
- ウ 地上造構の残存状況が不良なもの、あるいは消滅したものは地籍図等による復元を行ったものがある。これについては、略測図と区別するため「○○館推測図」等と表記した。
- エ 略測図（推測図）については、規模等を明らかにするため、スケール及び方位を付した。
- オ 略測図（推測図）の右下に調査者が作図した年月を記入した。
- カ 「調査者」と略測図を作成した者が異なる場合は、「作図者：○○○○」と明記した。
- 10 第2~3集は、次のとおり平成7~8年度に刊行する予定である。

	掲載予定地域	刊行年度
第2集	村山地域	平成7年度
第3集	最上・庄内地域	平成8年度

# 目 次

序

例言

I 調査の目的と経緯	3
II 城館遺跡の概要	
1 置賜地域の歴史的景観	13
2 東南置賜地区の中世城館の分布と特徴	17
3 東南置賜地区的城館遺跡の概要	
米沢市	37
南陽市	134
高畠町	190
川西町	226
4 西置賜地区の中世城館の分布と特徴	271
5 西置賜地区的城館遺跡の概要	
長井市	279
小国町	317
白鷹町	326
飯豊町	347
III 市町村別城館遺跡一覧表	
米沢市	367
南陽市	375
高畠町	377
川西町	379
長井市	383
小国町	385
白鷹町	386
飯豊町	387
IV 城館遺跡分布図	392
資料	
調査委員・調査員等名簿	481
参考文献一覧	482
山形県の中世関係年表	485

## I 調査の目的と経緯

# I 調査の目的と経緯

## 1 調査の目的

山形県内に数多く残っている中世城館（平安時代中頃から戦国時代に築かれ使用された城館）については、これまで所在確認、形態等の総合的な調査は行われてこなかったため、各種の開発行為による中世城館遺跡の破壊が懸念されてきたところであった。

このため、本県に残るこれら中世城館遺跡の所在、造構の状況等を確認し、今後の保存計画の一助にするため中世城館址調査（悉皆調査）を実施することにした。

## 2 調査対象

山形県内の平安時代中頃から戦国時代に築かれ使用された城、櫓、館、屋敷、砦、物見台等（近世まで利用された城館を含む。）

## 3 調査体制

（1）調査主体 山形県教育委員会

（2）調査組織

調査委員会を組織し、調査の基本方針等について意見交換を行い、その指導のもとに調査を実施した。

中世城館址調査基本方針（平成元年6月7日調査委員会決定）

### 1 調査委員

調査委員は、各ブロック毎の地区担当委員と地区担当を持たない調査委員を県が委嘱する。

地区担当調査委員は、担当地区における調査の指導、とりまとめ及び担当地区的市町村からの要請に応じて現地調査を実施する。

地区担当を持たない調査委員は、県内全域での調査指導、全体の総括及び市町村からの要請に応じて現地調査を実施する。

### 2 調査員

調査員は、各市町村と地区担当調査委員が協議して推薦した者に県が調査を委嘱し、現地を調査のうえ調査カードを作成し、各教育事務所を経由して地区担当調査委員に提出する。

### 3 調査謝金及び謝礼

（略）

### 4 調査

調査は、城館址の所在の範囲確認及びそれに付随する事項を調査し、調査カードに記入することとする。

### 5 教育事務所の役割

調査員及び地区担当調査委員の謝金及び旅費の支払い事務を行う。

担当地区的調査委員及び調査員の連絡を行う。

なお、担当地区とは各教育事務所の管轄域とする。但し、庄内地区は2担当地区とする。

### 6 この方針に定めのない事項及び疑義事項について、関係者が協議のうえ決定する。

(3) 調査委員、調査員等の名簿については巻末に一覧表で掲載した。

#### 4 調査方法

(1) 中世城館に関し、地名、古文書、市町村史、絵図、空中写真、地籍図、伝承、既存の研究調査等の情報を収集した。

(2) 実地調査は次の2点について行った。

ア 城館遺跡の遺構の確認（略測図の作成）

イ 古老等への聞き取り調査

(3) 調査を実施するために使用した調査カードは次のとおりである。

市町村名			山形県	No.	(その1)
				調査者	平成 年 月 日
2 所在 地 図 相 和 年 頃	1番	名前	別称	4 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	年 月
	現在	市 町 村	( との境界)		文部省
	昭和20年以前	市 町 村	大字		無・有(歴史器・武具・武器・槍矛・火薬) 保管・保管者 古鏡・ナガリ・茶臼・牛糞品 等)
	昭和20年頃	市 町 村	大字 小字		上最初の形 體と地城名 平・盛・南・室・城 ( 年 )
	a 地点状況	山頂・ 平地・その他 ( )			2 行政組織 (地城から現城まで)
	b 離別	離 (地城) , 隣, 城壁 (要害、砦、地盤、隣所)			
	c 形状	平・盛・複			
	d 通路	曲輪 (堀) , 土堀, 水堀, 荒堀, 丸太堀, 塔台, 池戸, 木造, 砖瓦, 土塀, 塔台, 建物跡, 井戸, 井場, 渠路, 石形			1 現城時期 平・盛・南・室・城 ( 年 )
	e 権利状況	主・中主・不主・消滅			4 主要経営者 (城主の変遷) , 主な事件 現城から現城までに城壁に加えられた変化 (拡張・改修部分 等)
	f 所有關係	国有地・公有地・寺社有地・個人所有・他			
g 亂況	山神・水田・庭・寺社境内・電線・その他 ( )				
h 管理状況					
i 諸古物登録	有・無 登録番号 ( ) 年 月 日		研究文献 文書		
j 文跡地點定	国・県・市・町・村・史跡 年 月 日		推定の城跡・臨時城跡 事蹟・文蹟 ( ) 造成 ( ) その他 ( )		
k 成城の場合	時期 年代 理由 ( )		諸の城・並の城 ( ) 道路 駅六台 軍事的にみて 備主支配の視点からみて		
l 国宝子宝登					
m いわゆる開 発計画					
n 先の法律条 例との関係	現城保全条例 (歴史的保全地) 都市計画法 (市街化区域、市街化調整区域) 森林法 (森林林野、森林整備地区、森林法 (MCC))				

市町村名

(その2)

位置図(城壁跡の位置及び周辺の中世遺跡等)  X Y Z  内 外 状 況	1/25,000			
		No.	名称	特徴
説明		<ul style="list-style-type: none"> <li>a 文政橋 (猪崎・古御・のんじ道・軍事道路・その他)</li> <li>b 長者地 (赤崎・古神・その他)</li> <li>c 手工窯跡 (かなくそ・園生・經營・吉田 (大工口)・その他)</li> <li>d 盛業関係 (清水・清水・その他)</li> <li>e 駄舟 (佐賀御用 (北作・建築)・猪崎・猪波造橋・結屋・その他)</li> <li>f 佐原上の関跡 (北作・建築)</li> <li>g 関連する城跡</li> <li>h 吉良城 (吉原・五輪等など)</li> <li>i 猪小屋・城下町 (猪崎) - その他</li> </ul>		
古文獻歴史地図等		基名	年代	所蔵者

市町村名

(その3)

8 実測図・縮図等 (平成 年 月 日作図)  N E S W ±	a 作図者 ( )		
			b 照査書類からの転写図
※特色ある地名・施設名を記入すること。		島根 (文部省)	

市町村名

(4の4)

## 9. 連携の特色

- a. 田舎(原)、猪崎駅、茅森駅、大北寺、福、笠置、笠置、木屋、たて橋、箕面たて橋、陳子坂、二軒坂、猪崎、高麗坂、土畠、笠置(流れひづか、移行)、石畠、馬込し(丸馬出し・内馬出し)、水の手(水戸)、鹿瀬、猪石、土林、木屋、猪谷、馬井(の)丘、のろし台、通路(大字・からめ寺・祇園道・登り道)、宝水、寺社跡、猪塀、枕牌、官隣田土地、生垣地跡(かじ跡)他  
場の標識 藤原・毛比須・高野坂・片瀬野原・葛瀬原野

セ 等 真

No.	名称	説明
-----	----	----

写真説明

(その5)

## 10. 地籍図(公図・図目)等

市町村	大字	字	施	番	用	目

説明 図の名称 年代 所蔵者

年 度	記 号	文 件 名	刊 本	用 意 者	原 著 者 (刊行年代表)	著 者 (刊行年代表)	(その5)		
							姓 名	姓 名	姓 名
大 学 科 系 所	①								
	②								
	③								
	④								
	⑤								
	⑥								
研 究 史	記 号	姓 名	姓 名	姓 名	姓 名	姓 名	姓 名	姓 名	姓 名
	①								
	②								
	③								
	④								
	⑤								
	⑥								
	⑦								

## 5 経費

本調査の事業費及び国庫補助金の額は、次表のとおりである。

(単位：千円)

	事業費	うち国庫補助金の額
昭和 63 年度	4,000	2,000
平成 元 年度	5,052	2,526
平成 2 年度	5,700	2,850
平成 3 年度	4,300	2,150
平成 4 年度	4,746	2,373
平成 5 年度	5,300	2,650
平成 6 年度	8,650	4,325
計	37,748	18,874

## II 城館遺跡の概要

# 1 置賜地域の歴史的景観

## 1 置賜地域の歴史的景観

伊藤 清郎

置賜地域は7世紀末には「うきたみ」(他に、おいたま、おいたみ、おきたま、おいたむ等の読みかたがある)と称して陸奥国の一都として律令制下に組み込まれている(『日本書紀』)。さらに律令政府は和銅5(712)年に庄内の出羽郡と共に内陸にあって陸奥国に属していた最上・置賜2郡を割いて出羽国を建国する(『続日本紀』)。当國には東海、東山、北陸3道から柵戸(柵の周辺に移住させてその地の開拓經營にあてる民戸、屯田移民)を配し、産業等の開発をはかる(同)。また置賜盆地には条里制耕地が造成され、口分田の班給もなされていく。一方、この8世紀には当盆地に終末期古墳にあたる群集墳が多数築造される。群集墳は1つの地級的な村落集団の共同墓地であり、その支群の中の1基の古墳は有力家族の墳墓である。その中には律令制の官位、官職を与えられる者もいて、当該期の在地の状況をよく示している。

さて、置賜郡には置賜、広瀬、屋代、赤井、宮城、長井の6郷があるが(『和名抄』)、11世紀末~12世紀初めごろまでには、当郡から成島、屋代、北条の3庄が分立し、残る部分が公領置賜郡となる。成島庄は撰閑家領(『殿暦』)、屋代庄も高萩、本吉、遊佐、大曾禰各庄と共に藤原朝長領であるが(『台記』)、保元の乱以後は後院領(天皇家領)となる(『兵範記』)。北条庄は不明。現地の管理責任者は平泉の藤原氏と考えられる。庄官等は不明であるが、11世紀末におきた後三年の合戦の際には、置賜から「置賜四郎」なる人物が清原方として参陣しているのは注目される(『後三年合戦之事』)。当郡には奥羽合戦の後、大江長井氏が地頭として入部し、成島庄では各村毎に政所、給主をおいて支配している(『成島八幡宮棟札』)。

その後伊達氏が当地域に勢力をのばし、14世紀末には伊達宗遠が長井道広から当地域を奪取し、家臣に知行地を宛行い(『伊達正統世次考』)、成島八幡宮拝殿を造立している(『同宮棟札』)。以降、政宗、氏宗、持宗、成宗をへて尚宗の代までには、伊達、信夫各地域と並んで長井も伊達氏領国の中枢となって行く。さらに大永2(1522)年植宗は陸奥国守護職に補任され、居城も栗川城から桑折西山城に移すとともに、「棟役日記」「段鉄古帳」を作成し「應芥集」を制定し(『伊達家文書』)、権力基盤を強化した。しかし、上杉氏への入嗣をめぐって植宗、晴宗父子の争いが生じる(天文の乱)。晴宗はこの乱に勝利すると、本拠を米沢に移し、城下町の建設に着手する。さらに晴宗は天文22(1553)年家中の者に対し一斉に知行判物を下付し、反対勢力を一掃する(『采地下賜録』)。この後晴宗は奥州探題に補任され、奥羽ノ群雄の中からぬきん出る存在となる。伊達氏の政治は、中野宗時、牧野宗仲父子(本来伊達郡の住人)の執政体制が晴宗の代から続いているが、輝宗の代に元亀の変によって解体し、遠藤基信、次いで政宗の代に長井出身の片倉景綱、鈴木元信、屋代景頼らの側近による政治が展開し、伊達、信夫の影響は完全に影をひそめていく。伊達領時代には、北条庄城が北条、屋代庄城が屋代、成島庄城が上長井、これらを除いた郡西部を下長井とよんで支配している。しかし、奥羽仕置の後、天正19(1591)年政宗は豊臣秀吉によって陸奥岩手山に転封され、代わって蒲生氏郷、次いで慶長3(1598)年上杉景勝が拝領し、以後上杉領となる。

最後に中世城館にふれると、平安末の在地土豪による方形館、鎌倉期から南北朝期にかけての大江氏の城館、そして室町、戦国期における伊達氏による城館、山城の順に変遷する。以下詳細に検討していく。

## **2 東南置賜地区の中世城館の 分布と特徴**

## 2 東南置賜地区の中世城館の分布と特徴

手塚 孝

### 1. 城館址の分布

東南置賜地区に存在する中世城館址は、山の頂上や尾根、丘陵などに城を構築した所謂「山城」が76箇所、平地に城や館、屋敷などを構築した所謂「平城」が335箇所、発達した河岸段丘や低地丘陵などの所謂「丘城」が9箇所の計420箇所を数える。この中で最も多く遺跡が認められているのが米沢市で、213箇所、次いで川西町の109箇所、南陽市の62箇所、高畠町の36箇所の順となっている。

これらの城館址は、地域によって分布状況や城館址の種別が異なっていることが判る。下記の表は各市町の城館址の種別を山城、平城、丘城に大別し、全体の割合を比較したものである。

第1表 東南置賜の城館址比較表

	市町名	総 数	山 城	平 城	丘 城
実 数	米 沢 市	213 (100)	25 (12)	183 (86)	5 (2)
	南 陽 市	62 (100)	35 (56)	26 (42)	1 (2)
	高 畠 町	36 (100)	7 (19)	29 (81)	0 (0)
	川 西 町	109 (100)	9 (8)	97 (89)	3 (3)
	計	420 (100)	76 (18)	335 (80)	9 (2)
割 合 %	米 沢 市	51	33	54	56
	南 陽 市	15	46	8	11
	高 畠 町	8	9	9	0
	川 西 町	26	12	29	33
	計	100	100	100	100

注) ( ) 内は各市町の城館址総数に占める種別ごとの割合 (%)

これによれば、山城では南陽市が全体の約50%以上を占めるのに対し、高畠町が19%、米沢市が12%、川西町が僅か8%といずれも20%を下回っている。これに対し平城は、川西町の89%を筆頭に米沢市の86%、高畠町の81%となるが、南陽市は42%と極端に少ない特徴がある。

このことは、置賜を拠点としていた伊佐氏が対立する最上氏を牽制する目的で、最上領に通じる最上街道や小瀧街道を軍事街道の主要幹線として位置付け、山城を数多く配置したことの表われと推測される。同様な傾向は、同じ最上領との国境に隣接している長井市伊佐沢越、白鷹町の孤越街道や白石に通じる二井宿大塚街道、米沢から会津への幹線道路となる会津街道の沿線にも顕著に表われている。

次に注目されるのが在宅及び屋敷の存在である。在宅は、中世社会の莊園制度に確立した制度であり、住居と付属の園地・宅地を含めた在宅役賦課の単位である。在宅の住民は、はじめ領主・名主に対する隸属性が強かったが、やがて私有制の影響とともに階層分化も進行し、有力な在宅農民は、脇在宅と呼ぶ分家・別家のものを分出し、それらの頃在宅の一部をやがて「屋敷」と称したものと推測される。その後、莊園制度が衰退した以降は、所謂「屋敷」の名称が定着したものとみられる。

その在宅と屋敷を顕著に代表するものとして三月在宅館と上郷東屋敷がある。前者の三月在宅館

は、南北 65m、東西 50m の土塁と水堀で不整方形プラン（台形）を構成するもので、上郷東屋敷も土塁と堀で台形状に区画するものあり、南北 70m、東西 80m とほぼ一町四方を示している。

現在、在家の地名を残す個所は、米沢市の 49 箇所を始め、川西町の 37 箇所、高畠町 4 箇所、南陽市 2 箇所の東南置賜地区で計 92 箇所を数えるが、中世城館の痕跡を示す遺情としては、米沢市の 23 箇所を筆頭に川西町 4 箇所、南陽市と高畠町が各 1 箇所の計 29 箇所が認められている。

屋敷に関しては、在家地名の約倍数を廻し、川西町の 76 箇所を筆頭に南陽市の 53 箇所、米沢市の 45 箇所、高畠町の 32 箇所の計 206 箇所を数える。館址の痕跡を有する遺跡は、米沢市の 52 箇所を筆頭に川西町 40 箇所、南陽市と高畠町が各 1 箇所の計 94 箇所となる。

## 2. 城館址と街道

前述した様に国境に接する峠及び主要幹線道路沿には、山城が数多く分布している。東南置賜地域の中世から近世の主要道路は 10 道が知られるが、城館址の分布状況を考慮すれば、次の 17 路線が重要な役割を示したものと想定される。

### ①米沢板谷街道

米沢城を起点とし、関根→大沢→板谷→庭坂に延び、米沢藩の参勤交代道路として、羽州街道に接続する脇道として、物資の運搬や軍事的にも重要な路線であった。ただし、関根板谷間の整備は、米沢藩によるもので、伊達以前の街道としては、後述する板谷から明神峠を越え花沢に通じる路線が古代から中世の主要道路であったものと考えられる。

### ②会津街道

会津街道は、若松街道、檜原街道ともよばれ、米沢地方と会津地方とを連絡する唯一の街道で、米沢からは笛野、李山、舟坂峠を越えて関、松根坂峠、樽坂峠を登ると宿場町として栄えた綱木地区に入る。さらに綱木川に沿って山道を登れば、県境の檜原峠に到達する。これ以降は、長井川に沿って山道を下れば檜原に達し、会津各地に通じる。

さて、会津街道沿いの城館址としては、72 の米沢城から斜平丘陵沿に 73 の米沢志田館（赤板館・遠藤丹後）、74 の笛野山館（兵庫館・遠藤兵庫）、76 の綿返館（高橋館・高橋筑前）、75 の薬師山館が存在しているが、舟坂峠以降の檜原峠までは城館址の存在は認められない。ただし、地名から推測すれば、関地区と綱木地区に山城が存在した可能性が示唆される。会津街道に係るものとして、笛野の黄塙原古戦場は、天文 16 年（1547）8 月、会津の芦名盛氏が伊達晴宗を授け、伊達政宗と戦火を交えたとされ、永禄 7 年（1564）に伊達輝宗が芦名盛氏の檜原城攻や永禄 9 年（1566）綱木の地頭遠藤雅楽丞、関村の地頭遠藤佐馬助が檜原を襲い討死したのも、この街道での攻防であった。

### ③大峰喜多方街道 ④八谷峠道

喜多方を結ぶこの街道は、米沢より小樽川に沿って、入田沢八谷の県境大峠を越えて喜多方若松に至る峠道で、旧国道 121 号線にあたる。天正 13 年に伊達政宗が開いた峠道といわれ、政宗は檜原の陣からすると、この大峠を越え、喜多方の北方と会津街道の両方側から会津芦名勢を攻めたと伝えている。一方、現在の八谷駒山から八谷沢沿に沿った形で、県境まで続く古道が残存しており、峠付近には土塁の一部が確認されることから、この道から政宗が侵攻した可能性も指摘される。

この街道沿には 52 の館山城を発端に、51 の矢子山城、49 の戸長里館、53 の大師山館の 4 山城が確認されている。中でも館山城は伊達晴宗が築城したと伝えられ、以後、輝宗、政宗の三代に亘って機

1 小白府物見	40 大舟館
2 小滝館	41 原田城
3 男・女館	42 北沢館
4 高倉山物見	43 松ノ木館
5 熊野館	44 京ヶ森館
6 経塙山物見	45 新藏館
7 小屋館	46 神明館
8 薩師山物見	47 薩ノ山館
9 下荻館	48 大越小館
10 菊物見	49 戸長山山館
11 御嶽山物見	50 成島館
12 金座館	51 矢子山城
13 天狗山館	52 鮎山城
14 地蔵岩物見	53 大師山館
15 丸山館	54 赤芝館
16 南陽北館	55 戸倉山館
17 慶海山館	56 横木館
18 宮沢城	57 五代館
19 宮内南館	58 志田館
20 別所館	59 高烟城
21 漆山館	60 塩森館
22 赤松山館	61 亀岡館
23 雑樹山館	62 萩ヶ崎館
24 製糸上館	63 戸塚山館
25 若部山館	64 中川原館
26 日影館	65 長手館
27 虚空藏山館	66 川井館
28 中野森館	67 羽黒神社館
29 大洞山館	68 木和田館
30 中野山館	69 堂義山館
31 上野山館	70 原田館
32 二色根館	71 金谷館
33 竹森館	72 米沢城
34 大槻城	73 米沢主田館
35 洲島館	74 菅野山館
36 陣ヶ峰館	75 薩師山館
37 小松城	76 繩返館
38 川西羽山館	77 前ノ在家・中ノ在家館
39 朴之沢館	78 赤崩山館

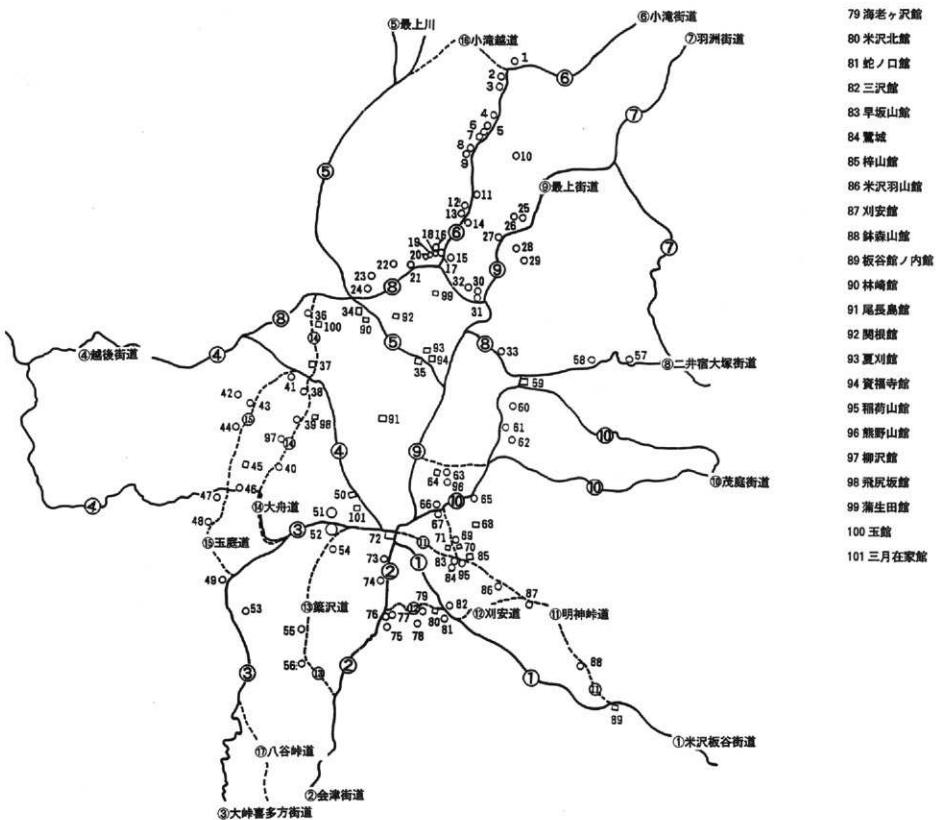


図1 東南蘆原地区の主要城館址と街道

能したといわれる。さらに、戸長里館の山麓には東日本最古の陶磁器窯である戸長里窯跡が存在し、昭和 60 年にまんぎり会が発掘調査を実施、伊達政宗が開窯したと結論付けている。

#### ④越後街道

米沢から小国をへて越後に通じる主要幹線道路である。米沢藩の時代には各所の街道に沿って、20 節所の高札場が設けられていたが、中でも高札場が多くたったのが越後街道で、小松、松原など 8 節所が知られている。越後街道沿に存在する城館址は、72 の米沢城、50 の成島館、41 の原田城の 3 節所で、主要街道の中では最も少ないものである。また、越後街道の支道として入田沢から大舟→玉庭→管沼峠→九才峠→大平峠→桜峠を越えて市の野で越後街道と合流する脇街道も存在した。中世期の越後街道はむしろ後者を利用したものと考えられる。

#### ⑤最上川

最上川は、水運として、また自然防御施設として利用されたものといえる。米沢藩は、物資運搬の主要な手段として川舟運搬を重視し、元禄以降にその盛衰をむかえている。中世以前に関しては、明確な記録は存在していないが、その上限は古代に遡ると考えられる。奈良時代の置賜郡衙と推測される米沢の大浦遺跡、広瀬郷の笠原遺跡、南陽市の郡山遺跡らは、最上川沿いに面して官衙を構築していた。城館址に關しても同様であり、代表的な城館址を列挙すれば、64 の中川原館、94 の資福寺館、35 の洲島館、93 の夏刈館、90 の林崎館、92 の閑根館、84 の大塚城など、明らかに河川防衛を前提とした構造となっている。

#### ⑥小滝街道

山形と米沢を横断する最上街道と平行する形の脇街道として重要な役割をしてきた。慶長 5 年(1600) 上杉軍の主力 2 万が直江兼続に率いられて最上を撃つべく孤絶街道を前進する一方、直江軍の支隊は小滝街道から小白越を経て進み、狸森の眉山を抜き、内山から大森山に出て直江兼続の本隊と合流し、最上の長谷堂城攻めを行ったが、長谷堂城主志村伊豆守の激しい抵抗に合い攻略することができなかった。9 月 29 日、関ヶ原戦の敗報を受けた直江軍は、米沢に撤退する際にも小滝街道を通ったとされている。明確な記録はないにしても上杉、伊達にとっては最上に対する軍事戦略の重要な街道であったことは、残された城館址の分布状況や物見台の痕跡を多く残すことからも窺われる。

小滝街道沿いに現在確認、残存する城館址は、山城を中心とした、北より 1 の小城府物見、2 の小滝館、3 の男館・女館、4 の高倉山物見、5 の熊野館、6 の経塊山物見、7 の小屋館、8 の薬師山物見、9 の下荻館、10 の筋物見、11 の御嶽山物見、12 の金座館、13 の天狗山館、14 の地蔵岩物見、15 の丸山館、16 の北館、17 の慶海山館、18 の宮沢城、19 の宮内南館、20 の別所山館、21 の漆山館、22 の赤松山館、23 の龍樹山館、24 の梨郷上館の 24 節所がある。

#### ⑦二井宿大坂街道

二井宿街道は、高畠城を起点に二井宿峠を越えて羽州街道に接している。羽州街道は、秋田・庄内・新庄・山形・上山・天童・長瀬等各藩の 13 藩の参勤交代の道路として、物資運搬の道として、多くの人物の往来する大動脈でもある。二井宿街道は、高畠城から西に進むと⑨の最上街道に合流し、鳥上坂の手前で左折すると⑩の小滝街道の分岐点に進み、やがて越後街道に合流する。この路線には、33 の竹森館、59 の高畠城、58 の高畠志田館、57 の屋代館が存在する。

#### ⑧最上街道

別名、米沢街道とも称し、最上藩に通じる最短距離の街道として、羽州街道に合流する支道として

も重要な意味をもち、⑥の小滝街道を除く全ての街道がなんらかの形で合流する主要幹線道路でもある。

特に、最上街道が主幹道路として確立するのは上杉氏以降のことであるが、南陽市島上坂付近から中山地区の街道両側に沿って、25 の岩部山館、26 の日影館、27 の虚空藏山館、28 の中野森館、29 の大洞山館、30 の中野山館、31 の上野山館、32 の二色根館の 8 箇所の城館址が分布している。

#### ⑩茂庭街道

米沢城を起点にして花沢→川井→長手→左沢→馬頭→折石より右折し、中和田→前田→上和田を経由して豪士峠越と馬頭から直進し、亀岡→安久津→湯在家より有無川に沿って鳩峰峠越の二通りが基本的な幹線道路であるが、他に支道として長手から下海上を経由して産のコース。北左沢から舟坂峠を越しての大石田のコース。馬頭から前田・金谷のコース。折石から中和田をへて本宮口のコースがある。

城館址をみると 66 の川井館、67 の羽黒神社館、65 の長手館、62 の館ヶ崎館、61 の亀岡館、59 の高畠城がある。この中で注目されるのが川井館と羽黒神社館の存在である。川井館は、伊達の家臣である茂庭良直の山城で、山城の東側に居館が存在したといわれている。また隣接して存在する羽黒神社館は、館の構造より物見台、もしくは烽台の可能性が高い。茂庭は良直・綱元とともに伊達輝宗・政宗の重臣として仕えていた武将であり、川井村と茂庭村（5 千石）を所領としていた。このこともあって、豪士峠や鳩峰峠にいたる沿道には城館址を示す痕跡は残されていない。

#### ⑪明神峠道

米沢城を起点に片子→梓山→綱木→刈安→川越石→赤浜→明神峠をへて板谷に通じる道路で、この街道沿いには、繩文時代の遺跡や奈良・平安時代の遺跡が數多くみられる。城館址は 83 の早坂山館、84 の鶴城、85 の梓山館、95 の稻荷山館、86 の米沢羽山館、87 の刈安館、88 の鉢森山館、89 の板谷館ノ内館等の 8 箇所の他に、稻荷山館から川井山館に通じる支道にも 70 の原田館、71 の金谷館、69 の堂森山館を含め 7 箇所の城館址が存在している。この中で特に注目されるのが明神峠に構える 88 の鉢森山館であり、大規模な掘切や軍道が確認され、近辺には奈良・平安の遺跡と中世の墳墓等が確認されている。また、綱木地区に存在する 88 の羽山館は、標高差が約 200m を有する山城で、街道警備の要所となっていた。さらに、95 の稻荷山館、71 の金谷館らは土壘を「L」字状に配した 13 世紀前後に位置する初期の平城で、中世以前の遺跡の分布状況も考慮すれば、現在確認されている街道としては最も古くから機能していたものと推測され、伊達以前の旧米沢板谷街道ともいえる。

#### ⑫刈安道

記録にはない重要道路で、旧米沢板谷街道から刈安館より分岐し、中荒→水窪→関根をへて李山で会津街道に合流する。この路線には、82 の三沢館、81 の蛇ノ口館、80 の北館、79 の海老ヶ沢館、78 の赤崩山館、77 の前ノ在家・中ノ在家館、76 の綿返館ら 12 箇所の城館址が分布している。

#### ⑬栗沢道

館山城を起点に会津街道の綱木で合流するものであり、路線には 52 の館山城、54 の赤芝館、55 の戸倉山館、56 の綱木館の 4 箇所が認められる。

#### ⑭大舟道

館山城を起点にして、口田沢より分岐し、大舟→小松をつなぐ路線であり、越後街道、大塚街道に合流している。この道路沿いには 36 の陣ヶ峰館、37 の小松城、38 の川西羽山館、39 の朴之沢館、40

の大舟館等 5 箇所の城館址が分布している。

#### ◎玉庭道

原田氏の居館である原田城を起点に、玉庭から入田沢の戸長里で大峰喜多方街道に合流するものである。この路線には 41 の原田城、42 の北沢館、43 の松之木館、44 の京ヶ森館、45 の新蔵館、46 の明神館、47 の館ノ山館、48 の大館小館、49 の戸長里山館の 9 箇所の城館跡が分布していることから、先の大舟道と同様に、大峰喜多方街道の防御を前提としていたことが窺われる。この中で 47 の館ノ山館は横状曲輪を主体として三沢型山城に分類され、伊達輝宗期に相当するものと考えられる。

### 3. 城館跡の分類

東南置賜地区に分布する城館址は、城館址全体の形態や立地、細部造構の特色等を吟味すると幾つかの類似した共通性が指摘される。この共通した特色は、1 に年代的な相違、2 に地域的な相違、3 に築城者（藩主）の意図、4 に有事想定を考慮した防御施設の相違などが想定されるが、東南置賜地区的城等の多くは、造構の存在が残存しているにもかかわらず、築城者すら明確にできないものが大半である。従って、次に分類を試みる分類基準はかならずしも妥当なものではないかもしれない。城館址はいうまでもなく、初期の築城から開始し、拡張、修復、城主の交代、廃城、城割などを繰返して今日に至ったもので、現在残る城は、最終形態を意味している。むろん、初期形態が最終形態を示す場合もある。ここでは前述した経緯も踏まえ、あえて、城館址の特徴を形態的に分類し、形式的な分類を試みるものである。

#### 1) 山城の分類

南陽、米沢市を中心に 76 箇所が確認されている。造構の配置や全体的な形態から、次の 13 形態に分類される。

##### ◎万世館山型

95 の種荷山館に伴う山城と考えている。種荷山館は山麓の自然尾根を利用し、尾根に面した空間を土塁と堀で「L」字状に区画して構築したもので、出土した多量の宗銭などを考慮すれば、14 世紀後半の年代が与えられる。山城は、階円形の主郭を頂上に置き、中腹に帯曲輪を部分的に配するのを特徴とするもので、防御的には粗末な印象を与える。

##### ◎早坂山型

山の頂上や単独丘陵を利用して構築するもので、3 箇所が確認されている。尾根に沿って小規模な階段状テラスを直線状に連続配列するのが特徴であり、最頂部に主郭を置く。周囲 3m 前後の帯曲輪を多様し、部分的に短い帯曲輪を有するものもある。堀切は 2m～3m、深さも 2m 前後と小規模なもので城郭の末端に一条の浅い堀切を配置する場合が多い。この種の山城は、初期の山城に顕著にみられるものであり、83 の早坂山館、33 の竹森館、69 の堂森山館がある。この中で、竹森館は明応 3 年（1494）伊達尚宗・穂宗親子が骨肉の戦火を交えた地にあたり、帯曲輪群を多様した山城の年代根拠を具体的に示すものとして注目される。

##### ◎屋代型

宮城県と県境が接する標高 607m に存在する。不整の方形もしくは円形のテラスを主要曲輪とするもので、周囲を帯曲輪と腰曲輪を多様して重餅型に I～V の 5 箇所の曲輪群で構成している。曲輪群は、交互に腰曲輪を配し、北側端に二条の堀切を有する曲輪 I が物見台、「L」字状の

堀で区画した曲輪IIが主郭と考えられ、曲輪II・IIIは腰曲輪を巴状に施した副郭で、曲輪Vも曲輪Iと同様に南側を前提とした物見と推測される。注目されるのが曲輪II・III・IVを結ぶ空間地帯であり、一段と低く、広面のテラスを有するのが特徴で、国境警備といった特殊な機能を考慮すれば、有事の際に密かに軍隊を集結させる施設としては理想的である。屋代館は、別名「新宿櫓」とも呼ばれ、天授6年（1380）の伊達宗遠が置賜地方侵略の折、長井氏の要害として存在したといわれているが、明確ではない。

#### ◎中ノ在家型・前の在家型

複数の尾根を利用して山城を構築するもので、主郭となる尾根及び頂上付近に階段状のテラスを連続させ、周囲の帶曲輪を主体にした腰曲輪等を加えて構成している。造構の構成は基本的に早坂山型に類似しているが、早坂山型のように単一ではなく、中心に主郭となる曲輪群、左右に副郭及び物見台を配置するのが特徴である。中ノ在家・前の在家型を有する山城は、81の蛇ノ口館を始め、77の前の在家・中ノ在家館の3箇所が認められている。何れも米沢市の刈安道沿に分布していることで、地域的な特色と推定することも可能である。年代的には早坂山型に後続する形態と推測することができる。ただし、中ノ在家館は直線的な特徴と帶曲輪を多様することを考慮すれば、早坂山型に近く、さらに発達したのが前の在家館と理解される。よって、前者の中ノ在家館は中ノ在家型、後者の前の在家館を前ノ在家型として細分することも可能である。

#### ◎女館型

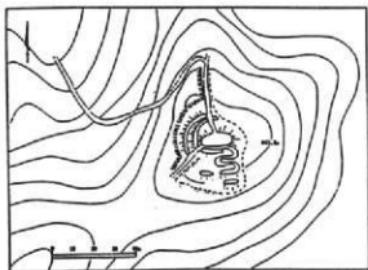
山頂にテラス状の小規模な主郭を置き、山頂から中腹にかけての後線に沿って連続腰曲輪を多様するのが特徴となる。この種の山城は、上杉（長尾）氏の支配拠点となる越後周辺に多く認められる形態である。東南置賜地方には3の女館が唯一の事例となり、他に長井市の愛宕山城が存在する。女館で注目されるのは、東側の尾根に腰曲輪を切った複数の堀切が認められるもので、後に修復を加えたことが判る。

#### ◎米沢羽山型

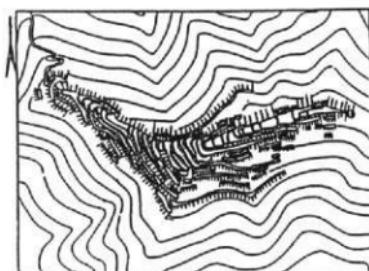
標高差のある単独丘陵を利用して構築するものが多い。造構は、主郭付近を不整形や舌状のテラスで形成し、周囲を幅広の帶曲輪、階段状テラスや畝状横堀を重餅に配しながら全体を帶曲輪で区画するのを特徴としている。重餅型を示す形態や帶曲輪で曲輪群を区画する例は、中ノ在家型の一部に既に出現していることから、年代的には中ノ在家型に後続する山城とみられる。笛野山型を有する山城は、74の笛野山館、86の羽山館、28の中野森館の3箇所が認められるが、羽山館の様に堀切が全く存在しないものや笛野山館の様に防御を前提とした一条の堀切を示す二通りが共存するようで、これまでの簡単な堀切から、堀切の機能としての存在の重要性を検索する過程段階の山城と理解される。

#### ◎二色根型

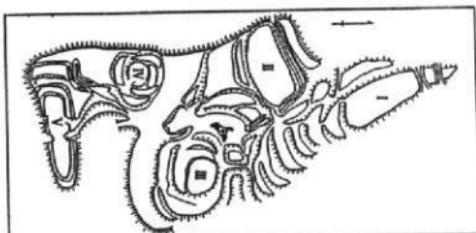
空堀と土塁で山城を構築するもので、10m前後の明確な堀切と2~3単位を基本とした横状の空堀を緩斜面の主要防衛施設として構成している。横状の空堀は、時に3条~5条を連絡させる場合も珍しくなく、こういった複数に及ぶ空堀群を形状より「横状空堀」と表現することにしたい。さて、本館型に属する主郭を構成する造構の大半は、方形プランを基本としたテラス状の曲輪を緩やかな段階状に配するのが特徴で、中心となる主郭には方形もしくは「コ」の字状に土塁を配置するものが多くみられる。区画した主要曲輪群は、主郭を構成する单一のものと副郭、物



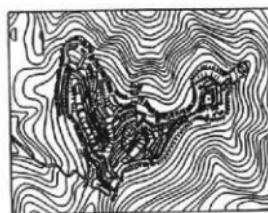
万世館山型



早坂山型



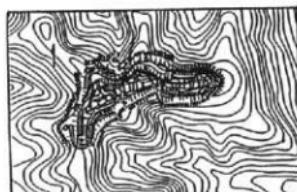
層代型



前の在家型



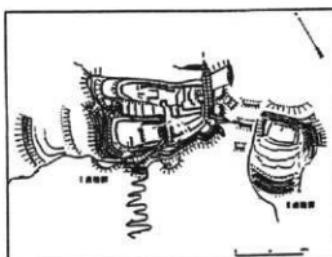
米沢羽山型



中ノ在家型

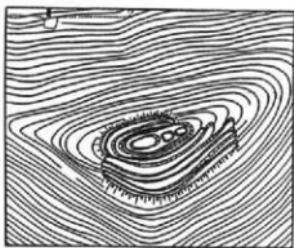


女館型

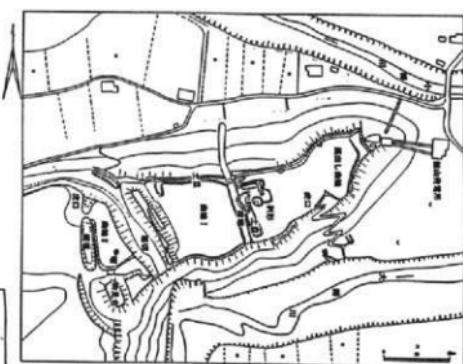


二色模型

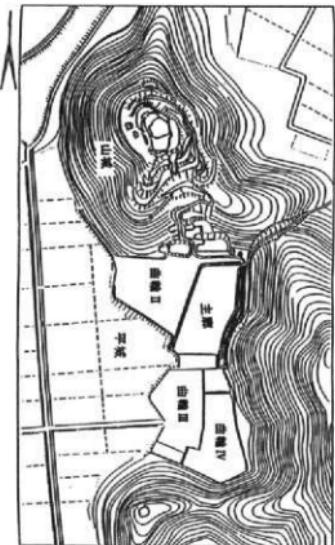
図2 東南置賜地区山城形態分類図(1)



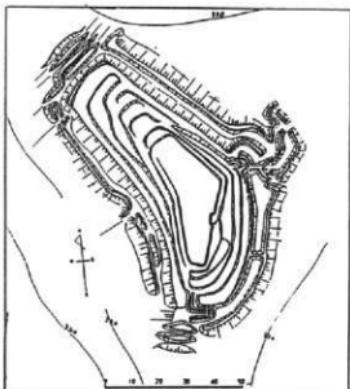
熊野型



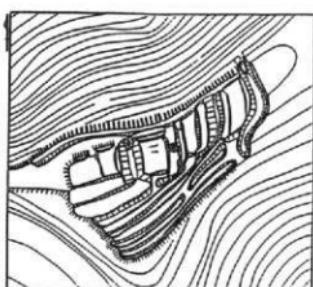
館山型



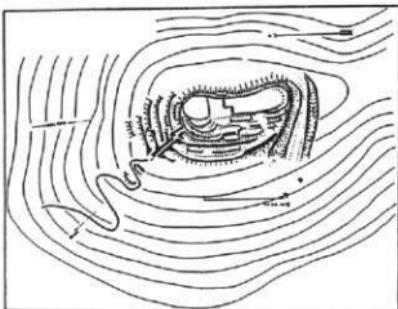
龜岡型



柳沢型



三沢型



大洞山型

図3 東南丘陵地区山城形態分類図（2）

見を含む数単位に及ぶものもみられる。ただし、この場合は後世に拡張した可能性も考慮しなければならない。本形態を示す山城は全て最上街道沿いに集中しており、25 の岩部山館を始め、27 の空虚藏山館、32 の二色根館の 3 箇所がみられる。

#### ◎館山型

伊達の主城とされる館山城を典型とした山城で、52 の館山城と 73 の米沢志田館、平地の大浦館の 3 遺跡がある。前者の館山城は、南側を大樽川、北側を小樽川に挟まれた舌状丘陵を利用した自然要害を背景に構築したものである。遺構は全体を土塁と堀切、縦掘で 3 箇所の曲輪を区画し、東は南山麓に大手口を持つ曲輪 I、樹形、縦掘をへて曲輪 II がある。曲輪 II は、西側に 10m ~20m、高さ 6m の大規模な土塁と北側に 3m 前後の小土塁と帯曲輪、南縁にも帯曲輪で区画した南北 70m、東西 60m の範囲で主郭と考えられる。さらに、最大幅 28m の堀切をへて西に物見台と曲輪 III で構成している。他に曲輪 III には塹、曲輪 I に井戸跡 3 基を確認することができる。後者の志田館は、斜平丘陵の山麓を利用して構築した所謂「山寄式」の平城で、大浦館も堀立川と旧河川の自然堤防を縦状に掘出切断した平城である。大浦館跡からは多量の内耳取手を有する土鍋が出土していることから概ね 15 世紀前半まで遡ることが判っている。

#### ◎熊野山型

低い小規模な単独丘陵に構築する山城で、畝状横堀や階段状の帯曲輪によって区画された内部に精円形状の小テラスを主郭としている。この種の山城は、県内各地に普遍的にみられるものであり、東南置賜地区に 96 の熊野山館、67 の羽黒神社館、3 の男館を含め 7 箇所がある。年代的には戦国末期の 16 世紀と考えられ、物見台もしくは烽台の役割を示すものであろう。

#### ◎大洞山型

比較的低い単独丘陵や舌状丘陵の先端部に山城を構築するもので、不整の精円形テラスを主郭として緩斜面に階段状テラスや畝状横堀を配置、尾根の一端に堀切を配するのが特徴となる。畝状横堀や明確な堀切を示すことから前述の二色根型と類似しており、年代的には、やや先行するか、ほぼ同期に位置するものとみている。この形態の仲間には 29 の大洞山館、20 の別所館、9 の下荻館と南陽市の小滝街道、最上街道沿いに集中している。

#### ◎三沢型

尾根を利用して直線上に山城を構築するもので、尾根の測線に沿って緩斜面を連続した畝状横堀を多様し、反対側に削平を加えて急勾配の人口斜面を整形する。さらに、縦堀や堀切で尾根を切断し、幾つかの小規模な曲輪群を配置するものが基本形態である。この仲間には、横状横堀に土塁を有するものや樹形、複数の堀切で構成するものも含まれ、82 の三沢館、63 の戸塚山館、43 の松ノ木館を始め東南置賜地区に 7 箇所が確認されている。

#### ◎柳沢型

土塁と空堀を駆使した防衛構造を有する山城で、複数の樹形を持つのが特徴となる。左右の堀切に土塁と空堀で主郭を囲み、土塁を「L」字や「コ」字状に複数に折を設けることで複雑な虎口や樹形を形成している。主郭は幅広の帯曲輪と尾根に沿った腰曲輪を連続多様し、頂上に主郭となる平坦部を配している。この形態を示す山城は、有事の際の籠城を想定した山城と推測され、街道の要となる 87 の柳沢館、47 の館ノ山館、62 の館ヶ崎館の 3 箇所が確認されている。

#### ◎亀岡型

帯曲輪で区画した範囲に重郭型にテラスを多様して主郭を構築するもので、基本的には笹野山型と共通しているが、山麓に方形にテラスを階段状に構成することからあえて区分した。年代的には並行するものとみられる。61の亀岡館と65の長手館が存在する。

#### ◎北沢型

平坦な山頂を利用して構築したもので、一条の帯曲輪を鉢巻状に区画するのが特徴である。こういった帯曲輪を用いるのは先の笹野山型と極めて類似しているが、帯曲輪内部に笹野山型の特徴でもある階段式のテラスや小規模の曲輪群が認められないことから、あえて区分した。本類は、東側に主郭に通じる虎口、南側に搦手、西の帯曲輪を挟んで二条の土塁が配置されている。主郭となる帯曲輪の内部には僅かながらにも段差を有するテラスが4程度存在するが、明確に曲輪を構成するものではない。この種の山城は、東南置賜地区において北沢館が唯一となるが、最上地区には数箇所存在している。また、約200基の前方後方塙が集中する鮎川村の山崩の一部にも同様に形態が存在している。

性格については推測の域を出ないが、農民集団による有事（決起）に備えた山城か山岳信仰の拠点とした修業道場の可能性も示唆される。さらに、北沢館には虎口や搦手、帯曲輪の形態が笹野山型に共通していることを重視すれば、笹野山型の山城として完成されなかった所謂「未完成城」の可能性も指摘される。

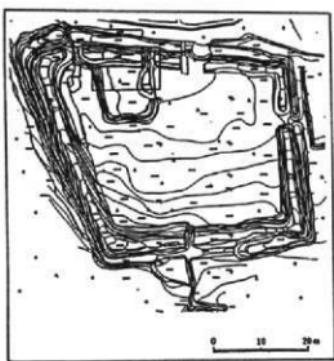
#### 2) 平城の分類

米沢市、川西町を中心にして335箇所の平城が確認されている。平城は、米沢城のような三ノ丸を含む総曲輪を構成したものから半町四方の屋敷までと様々で、年代幅も大きい。特に平城の場合、城の所在する立地が、市内地や水田地帯に集中していることもあって、後世の開発で破壊や消滅した城跡も少なくない。よって、明確に城全体の痕跡を示すものは極端に少なく、全体の約1割弱である。従ってこれから述べる平城についても、限られた資料の中で分析を試みるものであり、年代や形態の吟味については多くの課題を包含していることを強調しておきたい。さて、現存する平城の規模や形態を分類すると次の11形態に分けられる。

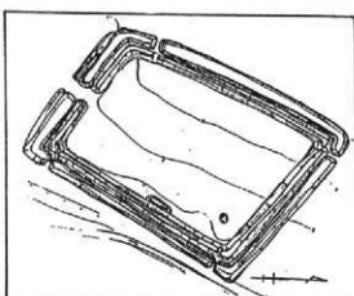
#### ◎木和田型

尾根の一端を利用して、山麓に半町前後の単郭式の平城を構築するもので、平面形状は、台形もしくは平行四辺形を有するものが多い。小規模な土塁と水堀で区画し、一方に虎口を有するのが特徴であり、山麓に沿って構築することから所謂「山寄式」とも称され、その代表となるのが木和田館である。木和田館は、昭和61年に発掘調査を実施し、洗い場を有する小規模な池と排水溝、珠洲系土器や須恵器片が検出している。この木和田地区には、南側の木和田館を始め、東側に「L」字状の土塁を配した「馬ノ越道館」、北に平行四辺形の土塁と堀で区画した「月ノ原館」、同じく長方形プランを有する「木和田中屋敷」の4箇所が山廻りに存在している。年代は、木和田館が発掘調査の遺物から想定し、11世紀後半～12世紀前半頃。月ノ原館が12世紀後半から13世紀初頭頃、木和田中屋敷が13世紀前半頃。馬ノ越道館が14世紀前半頃と推測され、限られた範囲に初期の平城から平城が定着する14世紀代にかけての変容を示す貴重な館跡群といえる。木和田型は、年代幅を考慮して台形状で山寄を有する形態を木和田1型、平行四辺形を有する山寄式の形態を木和田2型と分類しておきたい。

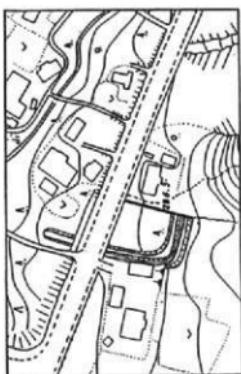
従って、前者の木和田1型に属するものとしては、木和田館、木和田中屋敷。後者の木和田2型には月ノ原館と98の飛尻坂館が含まれる。



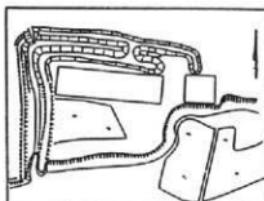
木和田 1型



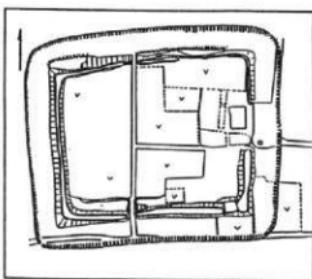
木和田 2型



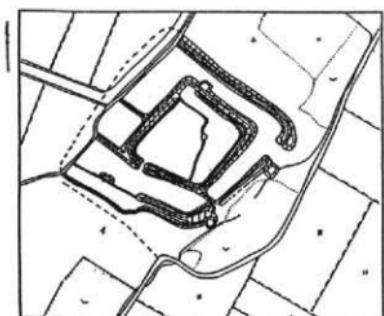
福荷山 2型



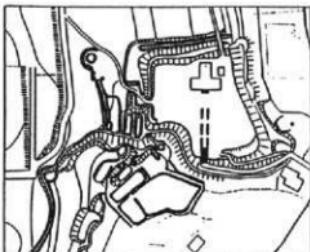
福荷山 1型



梓山型



原田型

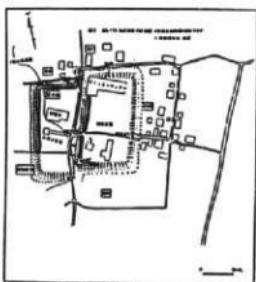


成島型

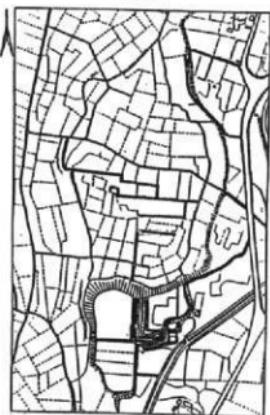
图 4 東南置賜地区平城形態分類図 (1)



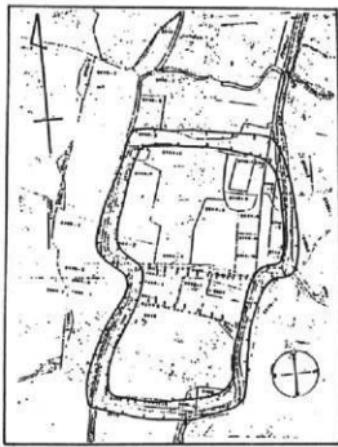
我妻型



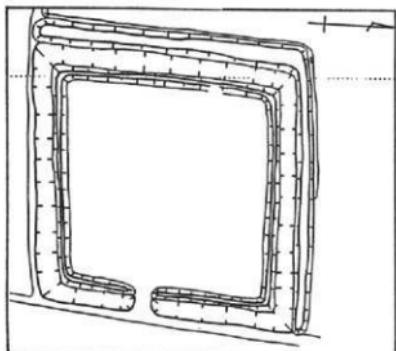
荻生型



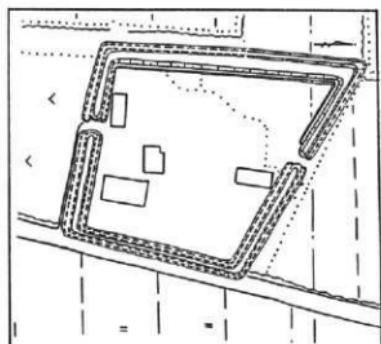
中川原型



蒲生田型



玉館型



三月在家型

図5 東南麗陽地区平城形態分類図（2）

#### ◎稻荷山型

木和田型と同様に山麓を利用した山寄式の形態を有するもので、山を背景に「L」字状に土塁と堀で区画するのを特徴としている。規模は一町四方に近い70m前後を示すのが多く、木和田2型に継続する形態と考えられる。この形態には、95の稻荷山館、米沢の森合館、馬ノ越道館が代表となるが川西町の玉庭地区、南陽市の宮内地区に類似した小規模な館跡が残存している。一方、この形態は土塁だけで構成する馬ノ越道館と堀を伴う稻荷山館の二通りが存在し、出土遺物の吟味より、前者を稻荷山1型、後者を稻荷山2型としておく。

#### ◎桝山型

一町四方の単郭式の平城で、大規模な水掘と土塁で構成される。これまででは、13世紀頃の初期武士団の居館とされてきたものであるが、当地内では成立しないようである。水田地帯の中心部を利用して構築される場合が多く、字切図等で確認されるものも含め東南置賜管内で12個所を数え、85の桝山館、80の米沢北館、91の尾長島館らが本形態を代表するものである。時代的な方向としては、木和田1型から稻荷山1型に発展した形態とは別に、支配層の拡大した在地豪族の拠点として、優位性を誇るために中心部に進出した居館形態と推測することも可能である。

#### ◎成島型

ここでは、あえて平城の仲間に加えたが、立地からすれば山城に分類すべきと考えられる。先の稻荷山1型と並行して発達したものと推測されるが、舌状の一端を利用して「L」字状に土塁と空堀で一町四方の主郭を構成していることから稻荷山1型に後続する可能性もある。年代は成島神社に保存されている棟札を考慮すれば、14世紀前半の時期が想定され、概ね桝山型と一致、もしくは先行するものと予想される。

#### ◎中川原型

発達した最上川の河岸段丘を整形し、土塁と空堀で十字状に曲輪群を配置したもので、河岸段丘の直下には旧河川を利用した堀と直線的な土塁で屋敷割を形成した二重構造となっている。主郭は「L」字状に配した大規模な土塁と空堀で区画した主郭に、左右に配した3個所の副郭で構成しているものであり、成島型に後続する形態と考えられる。この種の平城は他に例がなく、近いものとしては最終的な拡張で総曲輪を形成した白鷹町の鶴見城がある。

#### ◎原田型

土塁と水掘で方形に区画した主郭となる本丸にさらに、外部施設として二の丸を加えた二重構造の平城で、70の原田館の他に高畠町の相森館と飯塚館、川西町の35の洲島館が知られる。基本的には近世に属する三の丸を配した米沢城も含まれているが、割愛する。この仲間には、主郭を半町四方を有する原田館や一町四方を遙かに越える飯塚館なども含まれている。

#### ◎我妻型

中央に主郭を置き、左右に副郭を配するもので、土塁と水掘で区画した二重構造の特異な形態である。この形態を示す館跡は我妻館以外ではなく、所謂二の丸を有する平城が定着する仮定段階の館跡とも考えることも可能であるが明確には出来ない。年代は、発掘調査で検出された内耳取手土鍋の形態から想定し、概ね15世紀前半が与えられる。

#### ◎荻生型

方形もしくは不整形方の区画した中央部に対し、縦位に土塁等で間仕切りを有するものであ

り、我妻館の変形とみることもできる。区分根拠はかならずしも適切とは限らないが、川西町を中心に 34 の大塙城、林崎館がこれらに該当する。

#### ◎蒲生田型

平面形態が不整の前方後形を呈しているもので、99 の蒲生田館と川西町の田中在家がある。前者の蒲生田館は、吉野川に沿って形成された自然堤防上に立地しているので、主郭から東側に面した吉野川との空間地帯に南館を含む副郭と方形に水堀で区画された屋敷割が存在している。自然の河川を利用して総曲輪を構えた典型的な平城として注目される。

#### ◎三月在家型

土塁と水堀で方形もしくは平行四辺形（台形を含む）を有するもので、前述した木和田 2 型と形態的には類似しているが、立地する地形が水田等の中心部にあたり、しかも一边が 70m～100m 前後と一町四方を示すなどの違いがある。米沢市、川西町を中心に 101 の三月在家館を始め、米沢の東屋敷館など約 10 箇所が知られ、字切図等で存在を確認できるものも含め、在家地名を有するものが多い特色がある。年代的には、概ね 15 世紀前半ころから出現し、以後、中世終焉にいたっても存在したものといえる。

#### ◎玉館型

消滅した平城の仲間としては、最も多く存在している館跡で、半町四方（50m）前後を主体にして米沢市と川西町を中心に玉館、寺島館、牛谷館等の約 20 箇所が存在する。これらの大半は、屋敷地名を残す特徴がある。年代的には、三月在家型に後続するものと推測され、同様に近世に入っても宅地とともに残り、川西町大字吉田の三十郎屋敷を含め、現在も機能した形で 5 箇所が確認される。

### 4) 城館址の年代

これまで、東南置賜管内に分布する山城と平城の形態を分類してきた。城館址の大半は、文献や伝承も含め、ほとんど記録が存在しないものであり、僅かな発掘資料や記録として明確な位置付けが可能な城館址を基本にして、分類を試みたものである。従って、他の地域の比較や将来の発掘調査によっては、検討を余儀なくせざるを得ないものを含んでいることを強調しておく。また、城館址の形態が時代背景の中での変容が異なっており、山城の三沢型・猿野山型・平城の三月在家型・玉館型等は継続するものといえる。さらに、同じ時代でも山城の様に地域的な特色を有する二色根型や大洞山型・蛇ノ口型とは別に全体的に分布している三沢型も含んでいる。

平城に関しては、今後十分な検討が必要であるが、山城の特色としては、初期の 15 世紀段階には総曲輪を多様し、僅かな堀切を伴った過ぎなかった傾向から、16 世紀中葉以降には堀切・土塁を主要防衛施設として確立。やがて大規模な堀切と土塁を共存した構造に発展することが判明している。

しかも、堀切の発展と平行して出現したのが畝状横堀の出現であり、置賜型の特色として捉えることが可能である。堀切や畝状横堀の出現の背景には、武器の発達、言い換えれば鉄砲の出現とその戦略的な応用が重要な意味をなし、また、防衛形態の発達とも理解できる。鉄砲を具体的に戦術として用いたのは伊達輝宗であり、概ね三沢型の出現と符号するものである。

今回は、あえて東南置賜管内に存在する城館址の分類形態を現段階ではあるが、編年表を付け加えておく。この不十分な編年表が何らかの役に立ち、今後の調査や研究に寄与し、より詳しい編年

が確立する方向に躍進することを念願するものである。

最後に、この報告に関する多くの成果は、全て米沢市・南陽市・川西町の各中世城館址調査員の成果であり、その功績と努力に心から感謝申し上げる次第である。

東南置賜地区の城館編年表

年代	12世紀	13世紀	14世紀前半	14世紀後半	15世紀前半	15世紀後半	16世紀前半	16世紀中	16世紀後半
山城				万世館山型	平板山型	屋代型 中ノ在家型 女越型	笛野山型 網ノ在家型	龟岡型 三沢型 熊野山型	大洞山型 馆山型 二色板型
平城	木和田型 (木和田館)	木和田型2 (月ノ原館)	成島型 (稻荷山型1 (馬ノ越通館))	柿山型	中川原型 三月在家型	我妻型 玉越型	蓬生田型	原田館	萩生型



### 3 東南置賜地区の城館遺跡の概要



ひがしどうたて  
**東堂館** 202-003

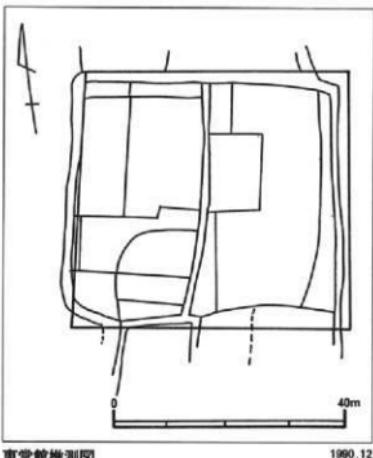
所在地 米沢市六郷町長橋字東堂

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の北西 6km にあり、鬼面川に隣接して広がる水田地帯に存在した平城跡と推測される。西 200m には米坂線の路線が南北に走っており成島丘陵が広がっている。この館跡は字切図より推測したもので東西 50m、南北 45m に及ぶ。この館跡の周辺には、南東側 300m に隣接して戸舎跡、南西側 500m には、土性在家館跡、南側 1km には小菅館ノ内 C 館跡等が位置している。現況は圃場整備等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



東堂館推測図

1990.12

どしょうざいきて  
**土性在家館** 202-011

所在地 米沢市下小菅字土性在家

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の北西約 7km JR 米坂線中郡駅南側 1.4km に位置し、成島丘陵直下国道 287 号線と米坂線の中間水田地帯に存在する。この館跡は、字切図より推測したもので東西約 70m、南北約 80m に及ぶ平城跡と推測される。この館跡の周辺には、北側 600m に窪田屋敷跡、同じく、300m に唐屋敷館跡、西側 1.3km に田中屋敷跡、2km に天神前中館跡、南側 1km には外ノ内館跡が存在している。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



土性在家館推測図

1992

おちあいやしき  
落合屋敷

202-016

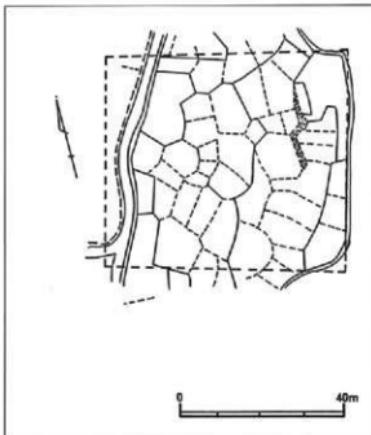
所在地 米沢市広幡町上小菅字落合屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地のJR米坂線成島駅南西側約2.5kmに位置し、石切山丘陵から北側斜面の沢合い、標高285mに存在する。誕生川の上流に当たり、すぐ北西側には山の神神社が祀られている。当館跡は、字切図より推測すると東西約60m、南北約55mに及ぶ平城跡と推測される。現況は宅地になっており、破壊されている部分が殆どであるが一部礎痕跡が残存している。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



落合屋敷推測図

1992

戸館

202-017

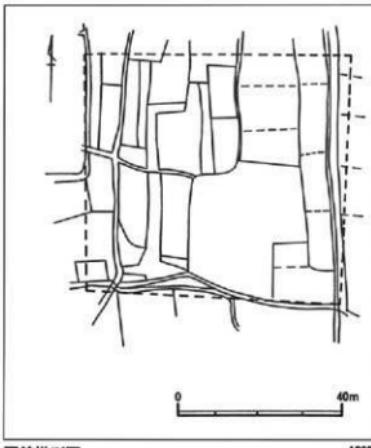
所在地 米沢市下小菅戸館

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の北西約7km、第六小学校北西1kmに位置し、鬼面川と誕生川に挟まれた水田地帯に存在する。現況は耕地整理等によって破壊されており確認はできない。この館跡は、字切図より推測すると東西約65m、南北約60mのはば半丁四方の平城跡と推測される。当館跡の周辺の、北東側1.2kmには館ノ在家跡、北西側0.6から1.3kmにはそれぞれ東堂館跡、土性在家館跡、南側1kmには小菅館ノ内館跡等が位置している。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



戸館推測図

1992

## 矢子山城

202-018

所在地 米沢市広幡町字中丸山三他

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『米沢市埋蔵文化財調査報告書第41集』『矢子山城跡第1集』

### 概要

本山城は、本市西部成島丘陵、JR 米坂線西米沢駅の北西約 2.5km に位置する。標高 430m～457m を測り、頂上からは米沢盆地が一望でき、南方約 1km には館山城がみわたせる。

現況は、山林になっているが、付近はリゾート計画や山林の伐採、土取り等が行われており、除々にではあるが開発が進みつつある所である。また、通称「石切山」とも呼ばれ、昭和 30 年頃まで石を採掘されていた。従って、石切山の印象が強く、城跡として認識されずに至ったようである。石切場としても歴史は深く、上杉家墓所の基壇を含め、中世までさかのぼる可能性がある。城跡はその石切山を中心南北 500m、東南 150m の範囲に沿って認められる。

本城付近一帯は凝灰岩の石材が豊富であり、石の加工場として長年利用されてきたことから、城跡としての遺構は変容した箇所もあるが、築城時の遺構と推測される箇所も残存している。当市において、切り石を施している城館跡は他に類を見ない。

中世関係の資料を見る限りでは、矢子山城に係る伝承や文献等は一切認められない。ただし、小幡忠明による「米沢地名選」文化元年（1804）によれば、第 12 代伊達宗成が芦名勢の侵入を防ぐため築城したもので、矢子山城を別名「霞ヶ城」と記されている。しかし、その記述は上杉時代のものであり疑問視するむきもある。また、矢子山城を館山城と解釈する人もいるが、現在のところは明らかではない。

山城の主な遺構は、堀切、曲輪群、土橋、虎口、樹形、櫓手、大手、井戸等で構成している。これらの遺構は、各曲輪群を帶曲輪によって接続し全体を構成しており、これらの遺構群は、A～G 曲輪群の 7 曲輪群に分けることができる。

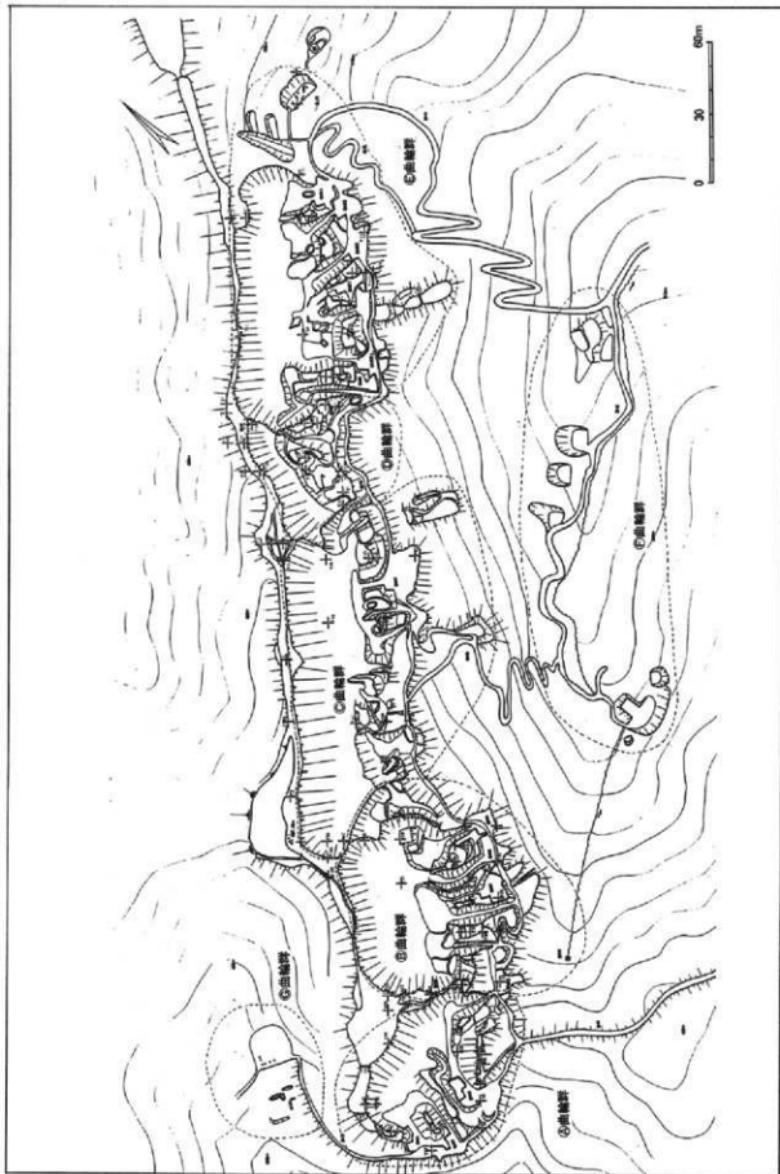
石垣の遺構は、平面形状から長方形の曲輪の前面に石垣を配置し、ある程度の間隔に凸状を有する石垣の部分を、3 から 5 単位で配置しているのが基本的な形態と推測される。平坦面の遺構は凸状の前面に、長方形の切石の中間に円形のくり抜きをもつ切石や、円形状にくり抜いた遺構が確認されている。これらの切石は、柱を固定するために使用した施設と推定される。

構築状況は、石の角を槌で整形し平に組み合わせる方法で、土壠前方に見られる石積は、慶長年間頃に流行した工法で、基本的に機位に積まれた打込はぎ工法に近いものである。

切石の配置状況は三種類に分類される。第一は、長方形の切石を用いたもの、第二は、長方形の切石を配したもの、第三には、長方形の切石を交互に積んだもので、2 ないし 3 曲輪群ごとにその変化がうかがわれる。これは年代的な特徴を示すもののかは今後の課題である。

石垣を有する曲輪群の調査によれば、堀切と認識していた遺構のほとんどは、後世の石切用の運搬道路として曲輪を破壊して掘込んだものであり、山城に直接関連するものではないことが石垣を構築する段階の整地層で明らかとなっている。

（月山隆弘）



矢子山城略測図

1994.12

たてのざいけたて  
館之在家館

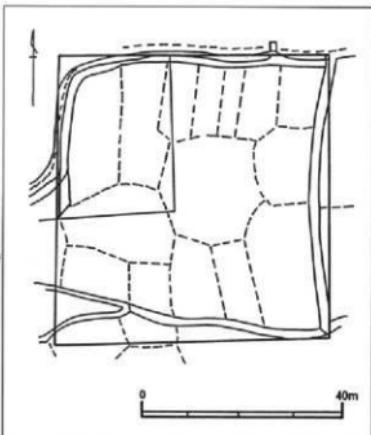
202-020

所在地 米沢市六郷町原字館之在家

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の北西 6km にあり、鬼面川に隣接して広がる水田地帯に存在する平城跡と推測される。東側に鬼面川と誕生川に挟まれた水田地帯に存在した。米坂線の線路が南北に走っており成島丘陵が広がっている。南西側 500m、700m にはそれぞれ戸館跡、東堂館跡が存在する。この館跡は字切図より推測したもので東西 55m、南北 60m に及ぶ。現況は圃場整備等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。



館之在家館推測図

1990.12

(月山隆弘)

いちうるしだて

一漆館

202-022

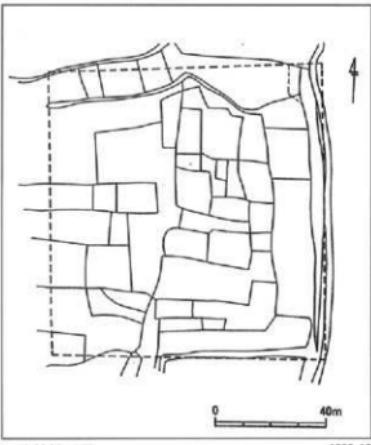
所在地 米沢市六郷町大字一漆館

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

米沢市の北北西、鬼面川と成島丘陵の間に拓けた水田地帯に存在した平城跡と推測される。東方には県道大塚、米沢線が、西方には米坂線の線路と国道 287 号線がそれぞれ南北に走っている。この館跡は字切図より推測したもので、東西 100m、南北 100m に及ぶ。この館跡の周辺には南西側 400m に小菅館ノ内 C 跡、南東側 600m に一ノ坪館跡、東側 600m に六郷西館跡があり、北東側 800m に馬場館跡がある。また、年代を示す伝承や文献等は認められない。



一漆館推測図

1990.12

(橋爪 健)

あくごうにじかで

## 六郷西館

202-023

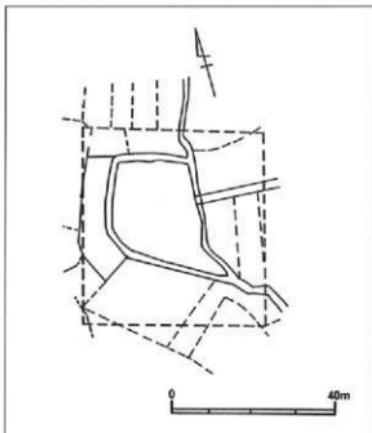
所在地 米沢市六郷町一漆字西館

築城時期 不明

### 概要

鬼面川と誕生川のほぼ中間の水田地帯に位置する。個人の宅地を囲むように土塁と堀跡が存在したといわれているが、現在は消滅し確認できない。字切図で判断すれば、一辺50mの半町四方の単郭式の平城であったものと推測される。

(手塚 荘)



六郷西館推測図

1980.12

こすげたてのうちなで

## 小菅館ノ内館C

202-024

所在地 米沢市広幡町上小菅館ノ内

築城時期 不明

### 概要

米沢市街地の西方約7kmJR米坂線成島駅北東側約1.8kmに位置し、成島丘陵直下国道287号線と米坂線の中間にあり、東側には米坂線の線路が走っている。水田地帯に存在する平城と推測される、この館跡は字切図より推測したもので東西75m、南北90mに及ぶ、この館跡の2km周辺には、数多くの平城とが存在している。現況は圃場整備等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



小菅館ノ内館推測図

1992

やしきだて  
**屋敷田館B**

202-027

所在地 米沢市六郷町大字西江股字屋敷田

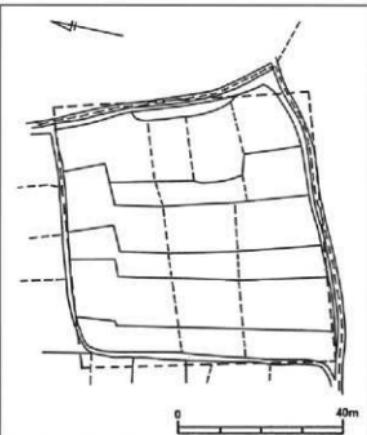
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

米沢市の北、鬼面川の西岸に広がる水田地帯に存在した平城跡と推測される。西方に県道大塚、米沢線が南北に走る。この平城跡は、字切図より推定したもので、東西 66m、南北 62m に及ぶ。この館跡の周辺には北西側 1km に館之家館跡、南側 700m 馬場館跡、南西側 1km に六郷西館跡があり、東側 1.4km には大垣垣館跡及び早稻田掘合館がある。また、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(橋爪 健)



1989.9

たんごだて  
**丹後館**

202-030

所在地 米沢市庄内町大字矢野目字丹後館

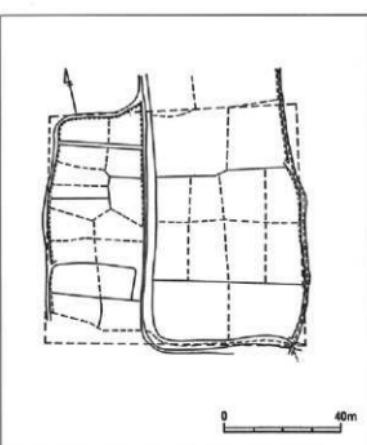
築城者 不明

築城時期 不明

概 要

米沢市の北北東、高畠町との境界に近く、松川と鬼面川の間に拓けた水田地帯に存在した平城跡と推測される。近くに国道13号線が南北に走っている。この平城跡は、字切図より推定したもので、東西 80m、南北 80m に及ぶ。この館跡に隣接して北側に西屋敷館、東側に外屋敷館、北東に次兵衛屋敷館が位置する。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(橋爪 健)



1989.10

丹後館推測図

いのつばたて

一ノ坪館 202-034

所在地 米沢市広幡町小山田字一ノ坪

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の北西 6km にあり、鬼面川に隣接して広がる、水田地帯に存在した平城跡と推測される。東側に鬼面川と誕生川に挟まれた水田地帯に存在する。米板線の線路が南北に走っており成島丘陵が広がっている。500m から 2km 付近には戸館跡、東堂館跡等が存在する。この館跡は字切図の地形より推測したもので東西 70m、南北 75m に及ぶ。現況は圃場整備等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘) 一ノ坪館推測図



ろくごうもとたて

六郷元館 202-035

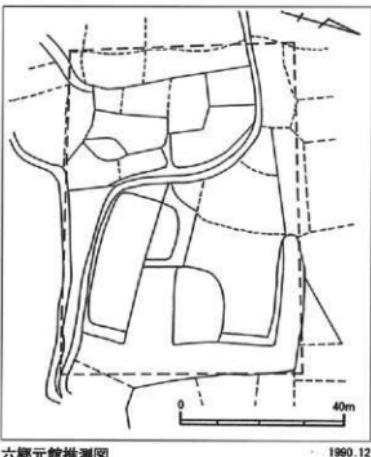
所在地 米沢市六郷町一漆字元館

築城時期 不明

概 要

六郷西館の東方向約 2km に位置する。かつて東側と北側の一部に土壁らしい高まりと凹地が存在したといわれている。現在は、水田によって破壊され明確でないが、南北 60m、80m の範囲が平城の範囲として、字切図で館跡の痕跡を把握することができる。伝承等はない。

(手塚 孝)



六郷元館推測図

こすげにしたて

### 小菅西館

202-037

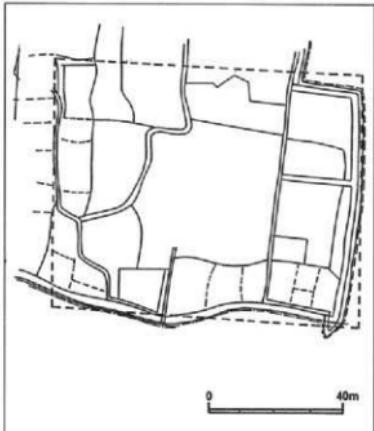
所在地 米沢市広幡町上小菅字小菅西館

築城時期 不明

#### 概要

米沢市街地の北西約5.6kmJR米坂線成島駅北側300mに位置し、県道京塚・置賜停車場線直ぐ北側の水田地帯に存在する。現況は、住宅地によって破壊されている。この館跡は、字切図より推測すると東西約100m、南北約80mに及ぶ平城跡と推測される。当館跡の周辺には、東側1kmに上小菅館ノ在家跡、南側1kmには三月在家跡、西側2.5kmの山合いには落合屋敷跡、北側1.5kmには小菅館ノ内館C跡が位置している。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



1992

小菅西館推測図

わせだほりあいだて

### 早稲田掘合館

202-047

所在地 米沢市産田町大字矢野目字早稲田掘合

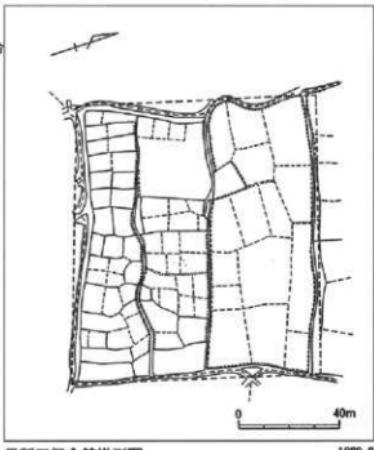
築城者 不明

築城時期 不明

#### 概要

米沢市の北北東、高畠町との境界に近く、松川と鬼面川との間に沿った水田地帯に存在した平城跡と推測される。この平城跡は、字切図から推測したもので、東西70m、南北110mに及ぶ。東方に国道13号線が南北に走る。この遺跡の周辺には、北側に高野屋敷跡と大塙廻り館、南東に井戸尻館、桐井館が位置し、それぞれ隣接している。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(橋爪 健)



1989.8

早稲田掘合館推測図

あらい うしろ

桐井屋敷 202-049

所在地 米沢市産田町矢野目字桐井屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地5km北側の鬼面川と最上川に挟まれた水田地帯に存在した平城跡と推測される。この館跡は、字切図より推測すると東西80m、南北90mに及ぶ。この館跡の周辺には、北側900mに半在家館跡、北西側700mに四郎右エ門櫓館跡、同じく台之南館跡、南東側1kmには産田新館跡が位置する。現況は圃場整備等によって破壊されており確認は出来ない。また、年代を示す伝承や文献等は認められない。(佐藤弘則)



桐井屋敷推測図

くぼたにいだて

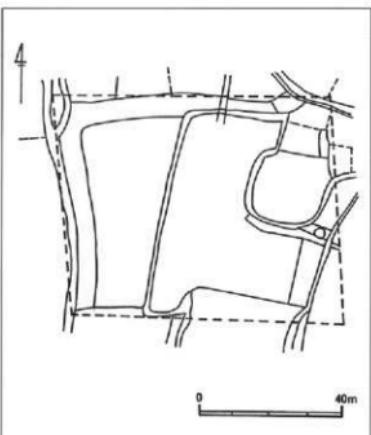
産田新館 202-051

所在地 米沢市産田町産田字新館

築城時期 不明

概 要

米沢市街地4km北側の鬼面川と最上川に挟まれた水田地帯に存在した平城跡と推測される。また、東に国道13号線、東に奥羽本線が南北に通なっている。この館跡は、字切図より推測すると東西80m、南北60mに及ぶ。この館跡の周辺には、北側600mに産田館跡、北東側1kmに産田荒館跡、西側1kmに田中屋敷館跡、南東側400mには唐屋敷館跡が位置している。現況は圃場整備等によって破壊されており確認は出来ない。また、年代を示す伝承や文献等は認められない。(佐藤弘則)



産田新館推測図

こすげたてのざいけだて  
**小菅館ノ在家館** 202-056

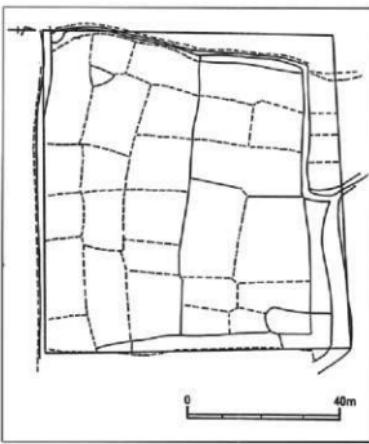
所在地 米沢市広幡町上小菅字館ノ在家

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の北西約4km、第六中学校西側500mに位置し、鬼面川左岸の水田地帯に存在する。この館跡は、字切図より推測すると東西約100m、南北約90mに及ぶ平城跡と推測されるが、現況は圃場整備等によって破壊されており確認はできない。当館跡の周辺には、南西、西方1kmにはそれぞれ三月在家、小菅西館跡が、また北西、北側1.5から3kmには小菅館ノ内C館跡、土性在家館、東堂館、戸館、及び館ノ在家等が位置している。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



小菅館ノ内館 C 推測図

1991

てらやしき  
**寺屋敷** 202-057

所在地 米沢市広幡町小山田字寺屋敷

築城者 不明

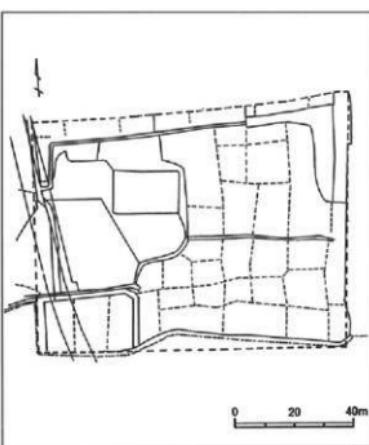
築城時期 戦国期

概 要

本市街地の北西部広幡町に位置し、周辺は水田で占められる。東西75m、南北60mの館と推測される。本館がある地区には方形形状を呈する館が点在する箇所であり、西方には鬼面川が北流している。当地区には成島八幡神社があり、「在家」の地名が多く認められる。城主や築城時期が不明なものが大半である。また山城との関連もわかっていない。

これらの館は圃場整備等で現状が著しく失われており、遺構が残存するものは少ない。

(菊地政信)



寺屋敷推測図

1993.11

きんがつぎいきて  
**三月在家館**

202-060

所在地 米沢市広幡町成島字三月在家

築城時期 室町期

概 要

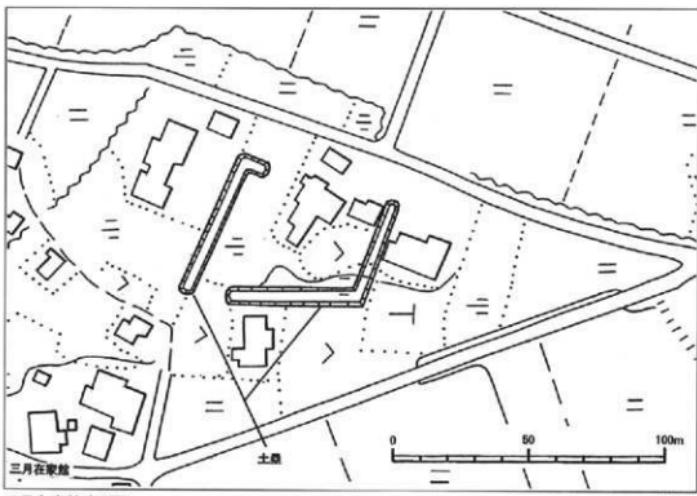
米沢市街地の3.5km西側にあって標高457mの石切山東側山麓付近に位置し、東に鬼面川が流れ、米板線の線路が走っている。成島神社の北側に存在するもので、平城跡と推測される。成島地区には「何々在家」などの地名が多く残っており成島神社近辺には、正月在家から十二月在家までの、暦を表す地名が存在している。三月在家はその中の一つである。

館跡は現存する土塁から想定すると、東西50m、南北65mのほぼ半町四方を有している。土塁の形状は折れを有する二箇の土塁で構成し、平面形状は台形状を示しており、長さ約60m、幅が最大で5mと長さ約90m、幅7mの土塁で構成している。北側に面した土塁は全体の中央部で折れ曲がっており、南に面した土塁は端部で直角に曲がった形状で、土塁の内側は住居と畠になっている。

この館跡の周辺には、西側1.4kmにある石切山の山頂に矢子山城跡、南側800mに成島館跡、東側1kmには蕨之館跡、塙野西上屋敷館跡、馬館跡などが位置している。

館跡に関する年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



三月在家館略測図

からべたて  
**川辺館** 202-063

所在地 米沢市塩井町塩野字川辺

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

本市街地の北方部に位置し、西方を鬼面川が北流する。館は東西 60m、南北 70m と推測され、現況は畠及び宅地となっており、土塁や堀は残存していないが、東西南北に走る道路が館の痕跡をとどめている。

本館の西南部地区には、現在の宅地と重複して、「館」の字名がこる地名があり、現在まで 3箇所確認しているが、城主については不明なのが大半である。 (菊地政信)



川辺館推測図

1993.12

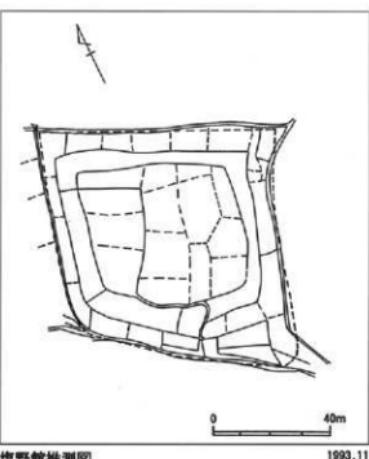
しおのたて  
**塩野館** 202-068

所在地 米沢市塩井町字塩野字館

築城時期 不明

概 要

鬼面川によって形成された河岸段丘に位置するもので、南北 80m、東西 75m の単郭式の平城である。現況はすべて水田により削平されているが、字切図には土塁と水堀が明確に確認され、南側に大手と推測される痕跡と土橋の様子がみうけられる。地元では伊達氏家臣の館が存在したと伝えられているが、詳細は不明である。 (手塚 孝)



塩野館推測図

1993.11

くらのたて  
蔵之館 202-069

所在地 米沢市塩井町塩野字蔵之館

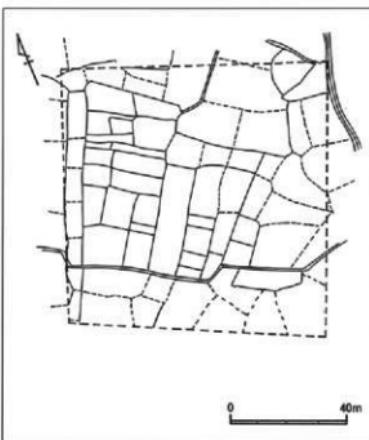
築城時期 不明

概 要

米沢市街地 2.5km北西側の鬼面川に隣接し、水田地帯に存在した平城跡と推測される。また、西方に米坂線の線路が南北に走る。この館跡は、字切図より推測したもので東西 90m、南北 90m に及ぶ。この館跡の周辺には、北東側 700m に川辺館跡、鬼面川を挟んで西側 1km に三月在家館跡、成島館跡、そして南側に隣接する塩野西上屋敷館跡、馬館跡が位置する。現況は圃場整備等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則) 蔵之館推測図

1993.11



しおのにしきみやしき  
塩野西上屋敷 202-070

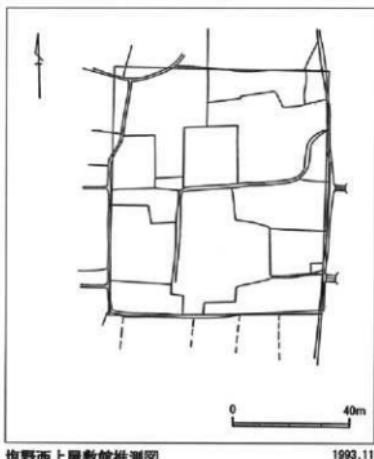
所在地 米沢市塩井町塩野字西上屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の北西 4km にあり、鬼面川右岸に隣接する平城跡と推測される。付近一帯は水田地帯になっているが当館跡は果樹園・墓地に存在する。この館跡は字切図により推測したもので東西 75m、南北 90m に及ぶ。現況は圃場整備等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



塩野西上屋敷館推測図

1993.11

なるしまたて  
**成島館** 202-071

所在地 米沢市成島町

築城時期 不明

参考文献 『米沢盆地における中世考古学の諸問題』『横風 17号』

概 要

米沢市の西部、広幡町成島の成島八幡神社境内一帯を含む丘陵と山麓に立地している。館跡は標高277mの舌状丘陵の先端部を利用して主郭を配し、南側の山麓に根小屋を伴っている。主郭は、南と東側の急勾配を人工斜面に整形し、緩斜面の西側と丘陵部に面した北側に関しては、堀と土塁で区画している。虎口は、西側の中央部に樹形とともに存在し、大手口は西側丘陵に延びて入る。搦手は根小屋上部から主郭の南側中腹を横断するように東側に進み、平地に達したところで西に折れ、南側の主郭中央の虎口に通じている。土塁は、北側が発達し、幅13m、高さ4mをなすが、西側は幅7m、高さ2m弱である。堀は8m~15mを測り、虎口、樹形で止まっている。注目されるのは北側の堀内部に小規模な土塁を設置し、二重堀を形成したものであり、当地方では例がないものである。同じく、西側の南虎口寄りにも土塁を2条を配し、樹形から搦手に通ずる堀底道を有している。

根小屋は、西山麓から大胆に掘り下げた緩堀を加えることで主郭との境をなし、山腹に腰曲輪、平地に小規模な土塁と堀、溝などを多用して方形系の曲輪群を構成している。

主郭の規模は、約80m四方で、東南部が南北にせり出しているが、堀を加えればほぼ一町四方を前提とした単郭式の丘城に分類される。城館跡の性格であるが、歴史的な成島神社の存在を考慮すれば、神社とは密接に係りを有するものと考えられる。神社は、古来より長井、伊達、上杉氏などの地頭、領主、藩主によって守護されてきた神社でもあり、成島神社の本殿、拝殿の造立・修理・寄進を示す棟札が43枚、46面が現存している。この中で最も古い棟札は、正安2年(1300)6月6日と17日の2枚で、時の地頭長井捕部守大江朝臣宗秀が本殿と長居の修理を行った旨の記録がある。その他の主な棟札としては次の様なものがある。

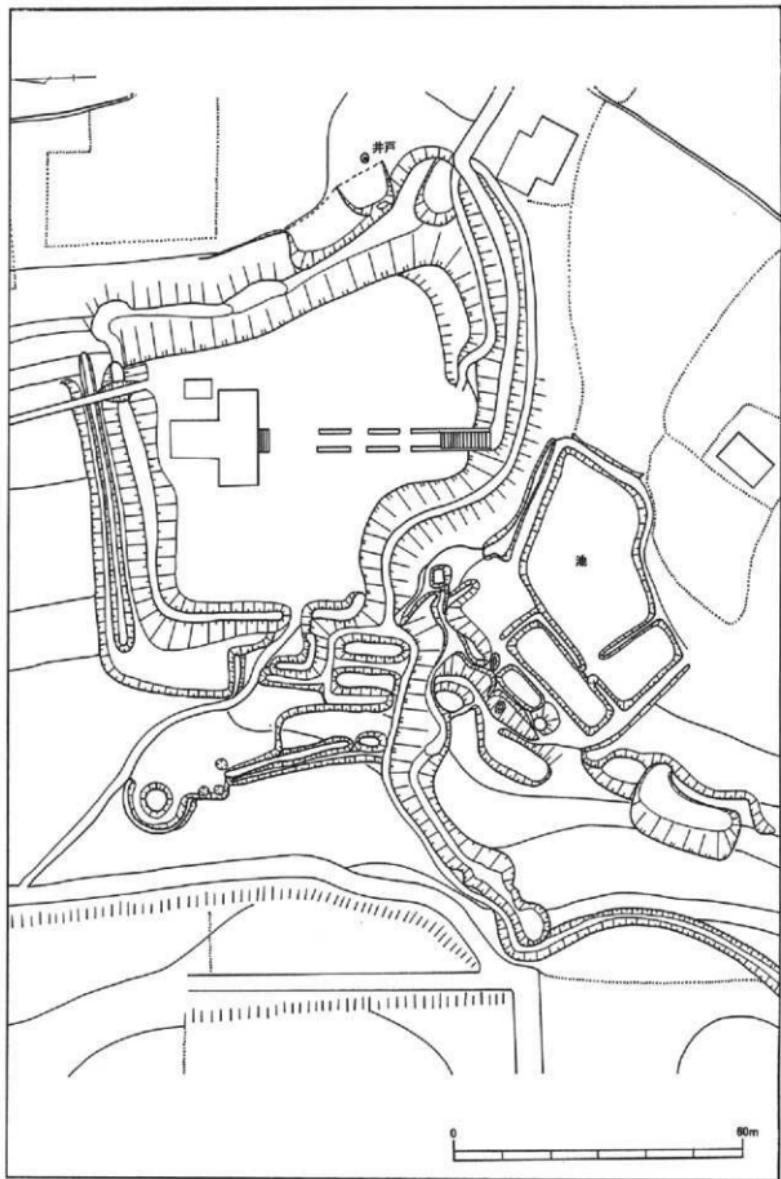
- 正安2年(1300) 長井宗秀 本殿・長居修理 ○貞和4年(1348) 長井時春 本殿修理
- 永徳3年(1383) 伊達宗遠 拝殿造立 ○明徳元年(1390) 伊達政宗 門殿造立
- 文明10年(1478) 伊達成宗 社殿造立 ○明応2年(1493) 伊達尚宗
- 天文22年(1553) 伊達晴宗 宮上葺修理 ○元亀4年(1573) 伊達輝宗 宮上葺修理
- 天正16年(1588) 伊達政宗 宮上葺修理 ○元和7年(1621) 上杉景勝 宮上葺修理

これ以後、昭和4年の棟札まで残されている。

館跡は方形単郭式で自然丘陵の一端を利用して、「L」字状の土塁と堀をもつ。堀を含めれば100m前後を示し、一町規模の館跡と分類される。この種の城館は、初期武士団の居館形態に類似しており、鎌倉期~室町前半の年代が予想され、正安2年の棟札とも一致している。ただし、館跡の形態が最後まで継続していたものではなく、時代背景の中で修復、増改築が行われた可能性が指摘される。

とりわけ根小屋は15世紀の特徴を示し、主郭の西側土塁や空堀、東側の腰曲輪も後の桃山期前後に構築されたものと考えられる。従って、この成島館は神社の建立後に神社を守護するために構築された防御施設であり、やがて根小屋や腰曲輪を追造することによって、臨時的な城郭機能を持つようになってしまったものと推測される。

(手塚 孝)



成島駅略測図

1990.9

きょうづかやまたて  
経塚山館

202-072

所在地 米沢市広幡町成島字経塚山 2153 番地他

築城者 不明

築城時期 戦国期

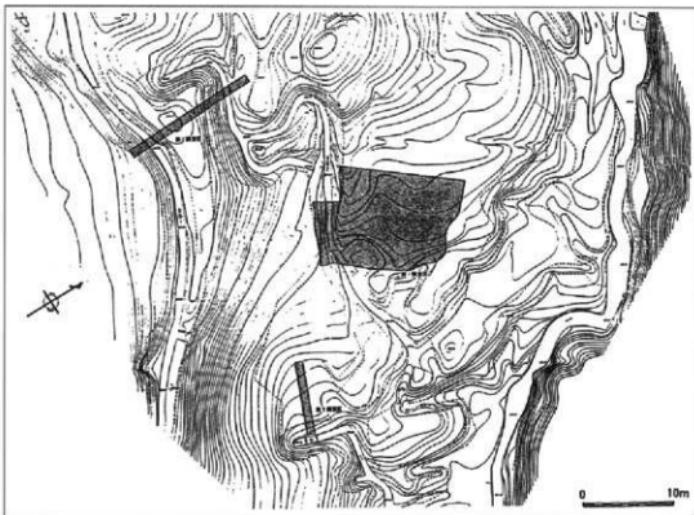
参考文献 『山形県埋蔵文化財報告書第 113 集（経塚山遺跡）』

概要

本館は市街地の西南部に位置し、石切山の東側にのびる谷合に存在する。本遺跡は県営農免道整備事業にともない、平成 2 年に県文化課の手によって発掘調査が実施されている。発掘調査は全体の約 3 分の 1 についてであった。その結果、次ぎ事項からこの箇所は館跡ではないと述べているが、周囲に分布する遺跡群から判断して重要な地点と認識している。

①谷間に立地すること②平場と認定できるところに遺構は認められなかった。③土壘状の高まりも意図的に構築されたとは考えにくいこと、④多数の溝状遺構は地山に含まれる物質を採集した跡と考えられること、以上の理由を上げている。

調査区からは、縄文、平安の遺物と鉱滓が出土している。立地条件からみても、本遺跡は縄文、平安時代の氏集落ではなく、いわゆるキャンプサイトとしての性格をもつものである。本遺跡発見の端緒となつた多数の溝状遺跡は、何かを採集した結果の溝跡と考えるのが妥当としている。しかしながら本遺跡が所在する箇所は、矢子山城に通づる谷であり、要害の地となり得る。矢子山城を含めた調査が、今後に残された課題である。  
(菊地政信)



経塚山館略測図

1994.12

(山形県埋蔵文化財調査報告書第 113 集経塚山遺跡調査報告書付図から引用)

うまたて  
馬館 202-073

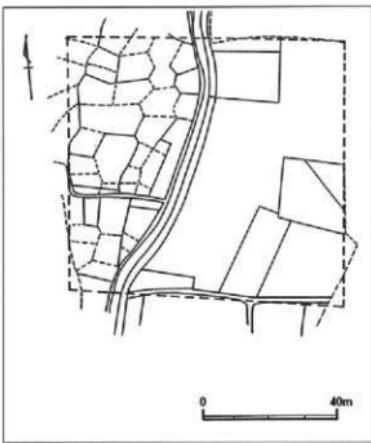
所在地 米沢市塙井町字馬館

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の2.5km側にあり鬼面川に隣接して広がる水田地帯に存在した平城跡と推測される。西に米坂線の路線が南北に走っており成島丘陵が広がっている。この館跡は字切図より推測したもので東西115m、南北105mに及ぶ、この館跡の周辺には、北側に隣接して塙野西上屋敷館跡及び、藏之館跡、北西側1kmに三月在家館跡、西側1kmに成島館跡、などが位置している。現況は圃場整備等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



1992.9

おきのたて  
沖ノ館 202-078

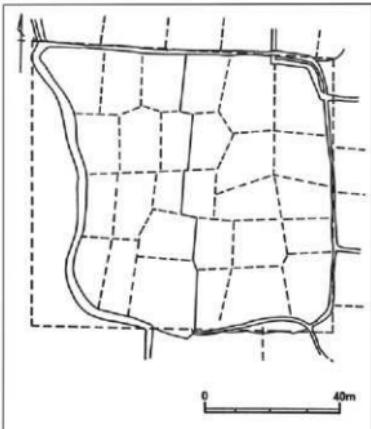
所在地 米沢市雍田町矢野目字沖ノ館

築城時期 不明

概 要

米沢市街地7km北側の鬼面川と最上川に挟まれた水田地帯に存在した平城跡と推測される。このあたりは高畠町との境界にあり、西に国道13号線、東に奥羽本線が南北に通なっている。この館跡は、字切図により推測すると東西90m、南北83mに及ぶ、この館跡の周辺には、北に隣接する大下西屋敷館跡、大下北屋敷館跡、南東側1kmに田中屋敷館跡及び南西側500mには矢野目西屋敷館跡が位置する。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



1989.11

沖ノ館推測図

やのめにしやしき  
**矢野目西屋敷**

202-080

所在地 米沢市産田町大字矢野目字西屋敷

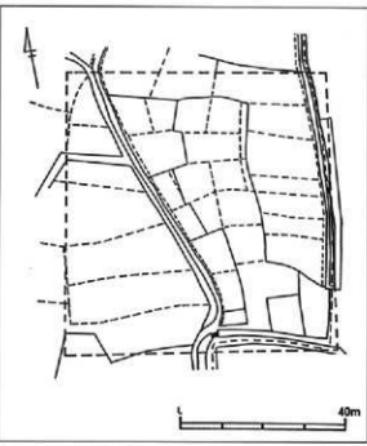
築城者期 不明

築城時期 不明

概 要

米沢市の北北東、高畠町との境界に近く、松川と鬼面川との間に拓けた水田地帯に存在する平城跡と推測される。近くに国道13号線が南北に走っている。この平城跡は、字切図より推測したもので、東西65m、南北70mに及ぶ。この館跡に隣接して、東側に次兵屋敷、南側に丹後館、その東側に外屋敷が位置する。年代を示す文献や伝承等は認められない。

(横爪 健)



矢野目西屋敷推測図

1989.10

たかのやしきまわりだて  
**高野屋敷廻館**

202-082

所在地 米沢市産田町矢野目字高野屋敷廻

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

米沢市の北北東、高畠町との境界に近く、松川と鬼面川との間に拓けた水田地帯に存在する平城と推測される。この平城跡は、字切図から推測したもので、東西68m、南北68mの内郭を囲んで東西112m、南北126mの外郭が存在する。この館跡の周辺には、西側に外屋敷館、東側に早稻田堀合館、南側に大堀廻館がそれぞれ隣接する。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(横爪 健)



高野屋敷廻館推測図

1989.8

じへえやしき  
**次兵衛屋敷**

202-083

所在地 米沢市産田町大字矢野目字次兵衛屋敷

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

米沢市の北北東、高畠町との境界に近く、松川と鬼面川との間に拓けた水田地帯に存在する平城と推測される。東方に国道18号線が南北に走る。この平城跡は、字切図より推測したものであるが、東西60m、南北80mに及ぶ。この館跡の周辺には、西側に西屋敷館、南側に外屋敷館、南西部に丹後館が隣接する。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(橋爪 健)



次兵衛屋敷館推測図

1989.10

やのめよもやしき  
**矢野目古屋敷**

202-084

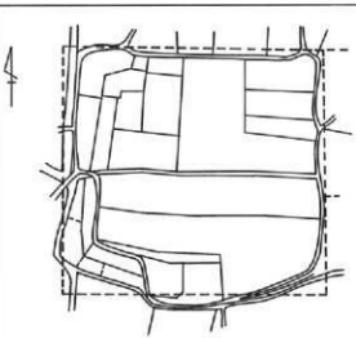
所在地 米沢市産田町矢野目字古屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地6km北側の鬼面川と最上川に挟まれた水田地帯に存在した平城跡と推測される。このあたりは高畠町との境界にあり、西に国道13号線、東に奥羽本線が南北に通なっている。この館跡は、字切図より推測すれば東西78m、南北74mに及ぶ。この周辺には、南側400mに半在家館跡、東側1.2kmに田中屋敷館跡、西側1kmには台之南館跡が位置している。現況は、圃場整備によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



矢野目古屋敷館推測図

1989.12

たなかやしき  
**田中屋敷** 202-090

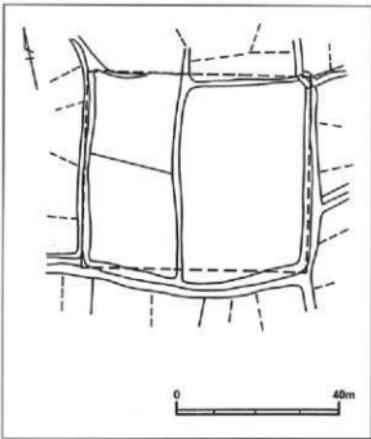
所在地 米沢市窪田町窪田字田中屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地 6km 北側の最上川西部に広がる水田地帯に存在した館跡と推測される。このあたりは高畠町との境界にあり、西に国道 13 号線、東に奥羽本線が南北に通なっている。この平城跡は、字切図より推測すると東西 60m、南北 55m に及ぶ。この周辺には西側 1.5 km に半在家館跡、北側 1km に大下屋敷北館跡、南側 1.6km に窪田荒館跡が位置している。現況は、圃場整備によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



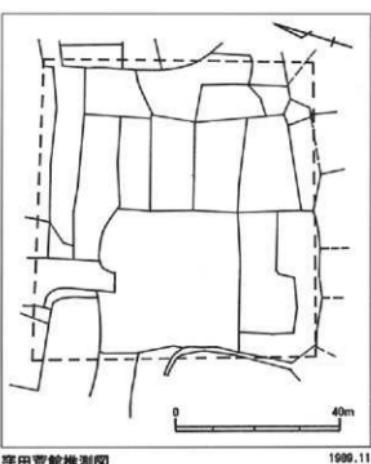
くぼたあらだて  
**窪田荒館** 202-093

所在地 米沢市窪田町窪田字荒館

築城時期 不明

概 要

最上川の左岸 50m に位置している。現在は、窪田南海工業団地によって破壊され、現況は失っているが、字切図によると南北約 70m、東西 70m の範囲を有する方形単館の可能性が高い。伝承等はない。 (手塚 孝)



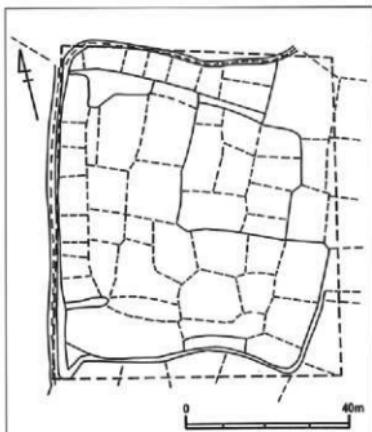
からやし  
唐屋敷 202-099

所在地 米沢市産田町産田字唐屋敷

築城時期 不明

概 要

最上川の左岸、現国道13号線に接した水田に存在する。かつて、土塁と堀が方形に配置されていたといわれている。現在は、圃場整備によって消滅しているが、字切図には南北約80m、東西70mの範囲として捉えることが可能である。(手塚考)



唐屋敷推測図

くぼたもとやしき  
産田元屋敷 202-105

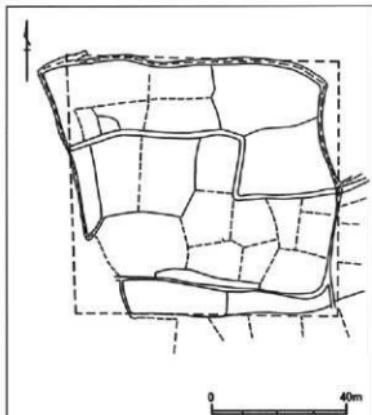
所在地 米沢市産田町産田字元屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地3.5km北側の鬼面川と最上川に挟まれた水田地帯に存在した平城跡と推測される。また国道13号線に隣接し、東に奥羽本線が南北に通なっている。この館跡は、字切図より推測したもので東西80m、南北80mに及ぶ。この館跡の周辺には、北側600mに産田屋敷跡、同じく、300mに唐屋敷館跡、西側1.3kmに田中屋敷跡、2kmに天神前中館跡、南側1kmには外ノ内館跡が位置している。また年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



産田元屋敷推測図

所在地 米沢市大字上新田字中川原

築城時期 室町期

参考文献 「米沢盆地における中世考古学の諸問題」『懐風 17号』

#### 概 要

米沢市街地 3.5km 北東側の最上川と、標高 356m の戸塚山に挟まれ発達した川岸段丘に位置し、東側に奥羽本線の線路が南北に走っており、近くに置賜駅がある。

城館規模としては、川岸段丘上部の主郭群と段丘下の根小屋も含めると全体で、南北 560m、東西 270m に及んでいる。

主郭群は河川の侵食作用で舌状に張り出した段丘を直角に削り出して、堀と土塁で四箇所の曲輪を「田」字状に配して構成している。

主郭は 10m 前後の土塁と堀を「コ」の字状に配しており、北面は川岸段丘の比高差 5m 程度ある急な自然斜面を利用している、広さは 50m 四方を有しており、南面の土塁が近世の水路開発で一部破壊されている、東面の土塁は畠の開墾等で消滅され存在しないが、0.5m 程度の段差が残り畠の境となっている。

曲輪 II は、主郭の西に隣接し曲輪の中では一番広く 80m × 60m になり、北及び西側は主郭と同様に川岸段丘の急斜面を利用している。主郭との境は二条の土塁と空堀を有し、強固な形態を示している。曲輪 III は、曲輪 II の南に隣接しており、広さは 75m × 60m になり、二番目の大きさにあたる、境付近は現在破壊されて見当らないが、二塁や空堀を有していたと想定出来る。

また、西から南側にかけて川岸段丘の急斜面を利用し、東から南側にかけては深さ 0.5m、幅 1m の空堀となっている。

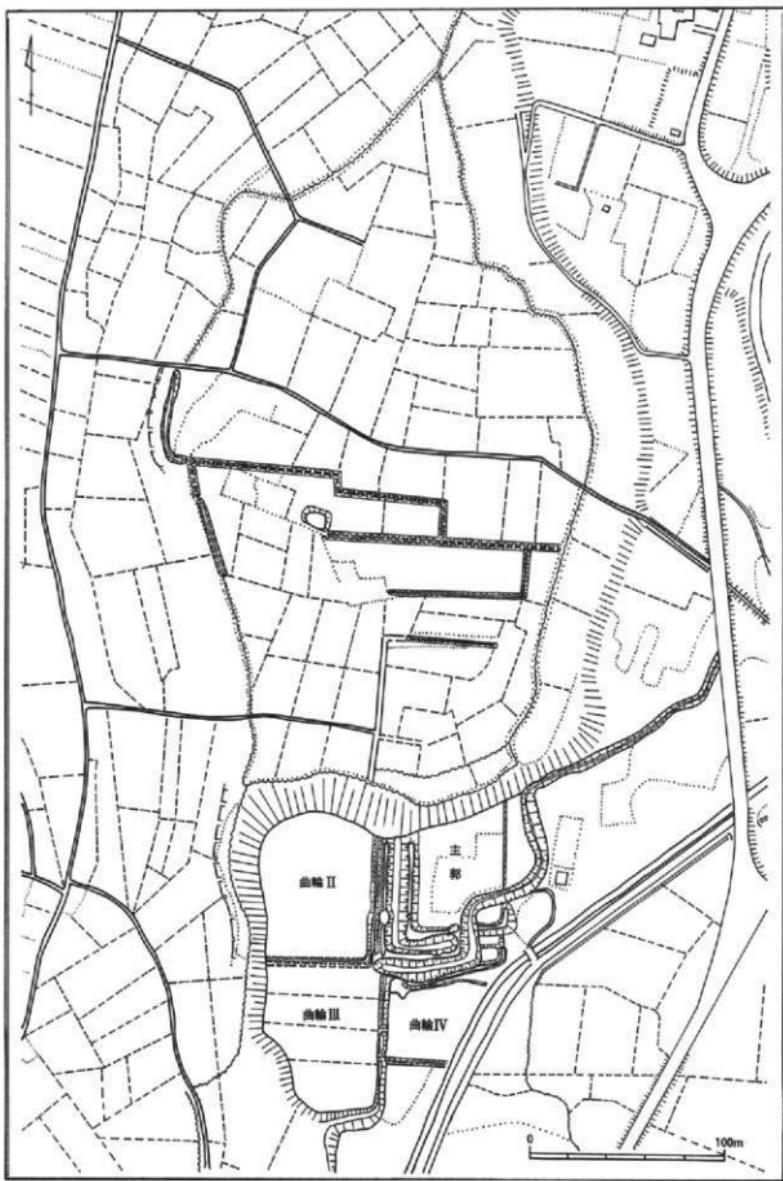
曲輪 IV は、主郭のすぐ両側に隣接して広さ 40m 四方で水路によって破壊されている。曲輪 III との境にある空堀には二箇所に土橋が見られる。

このように段丘上の主郭群は南北に 160m、東西に 150m の複郭式の平城跡である。根小屋は主郭北側の川岸段丘斜面直下から北に 400m、東西 270m の範囲で広がっており、東西長を軸とした長方形の曲輪群が、3~4m の土塁によって区画されている。

館跡の北側土塁端に平場を有していることや、周辺の状況から武家屋敷、もしくは町並的な性格のものが存在したと考えられる。

年代的には、市の西に位置している成島館跡と同様に自然台地の一角を利用した館跡であることや、複郭式を有することから考えれば成島館跡よりも年代が下がるものと見られ、室町時代頃と考えたい。

(佐藤弘則)



中川原館略測図

1988.10

もりあいだて (いいづかはいじあと)  
森合館 (飯塚廃寺跡) 202-108

所在地 米沢市大字上新田字森合

築城者 不明

築城時期 錆倉期

参考文献 『米沢市埋蔵文化財報告書第10集』「戸塚山古墳群詳細分調査」

概 要

米沢盆地の東部に位置する標高 356.6m の戸塚山の西南部山麓にある。土塁及び堀が開田によって一部破壊されている。館の西南部直下には馬橋川が北流する。この小河川によって、戸塚山西南部には河川段丘が形成されている。

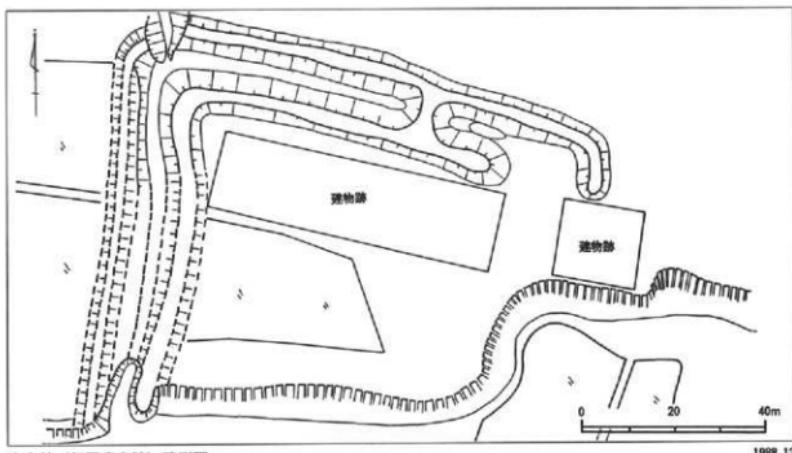
館の規模は東西 80m、南北 70m の方形状を呈する形態であり、東側及び南側は自然地形をそのまま利用した、片直角形の館跡である。

遺構は土塁、堀（水堀か）、建物跡が現存する。土塁は外回りと内回りに構築し、その空間を堀とした形態である。土塁は上場で 2m、高さは 1m、堀は上場で 6m を測る。

堀には北西部に水の取り入れ口が認められ、山麓の湧水を利用した水堀の可能性が強い。深さは約 1.5m を有する。北東部には堀が意図的に途切れた箇所があり、虎口と考えられる。

建物跡の基壇は 2 箇所認められ、東西方向に長軸を有する長方形状と正方形状があり、約 30cm の高さで前者は 60m × 30m、後者は一辺 15m を測る。伝承としては、寺院跡と伝えられている。

(菊地政信)



森合館 (飯塚廃寺跡) 略測図

よのうちたて  
**外ノ内館** 202-109

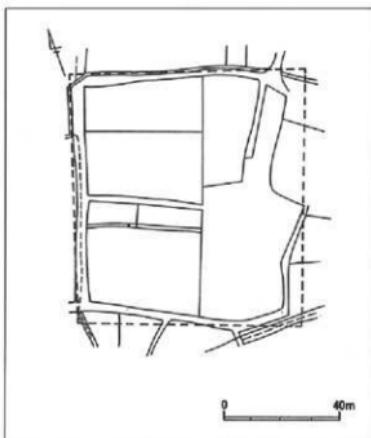
所在地 米沢市中田町字外ノ内

築城時期 不明

概 要

米沢市街地 2.5km 北側の国道 13 号線沿いにあり、南方に松川と羽黒川が合流して最上川が流れ、東方には奥羽本線が南北に通なっている。この館跡は、字切図より推測すると東西 80m、南北 90m に及ぶ。この館跡の周辺には、北東側 1.5km に中川原館跡、東側 1.7km には森合館跡が位置している。現況は、国道 13 号線バイパスが隣接して商店や住宅地によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



外ノ内館推測図

1989.11

やぎはしたて  
**八木橋館** 202-116

所在地 米沢市花沢町八木橋

築城時期 不明

概 要

米沢市役所より、北東側へ 400m の所に位置し、松川と羽黒川の合流点にあたり河岸段丘が非常に発達した所で、それを横位に分断して構築した館と推測する。年代を示す伝承としては、佐氏泉館同様に、奥州藤原の軍勢として源頼朝の率いる鎌倉勢と戦った佐藤元治の弟、佐藤政信が米沢の八木橋に館を構えたとされる。現状は畠地のため現況は失われているが、塀の痕跡と土塁の一部が確認される。

館跡の周辺には、北側 1km に大浦館跡、大浦館ノ内館跡が位置している。

(佐藤弘則)



八木橋館推測図

1994.12

戸塚山館 202-110

所在地 米沢市大字浅川字堤入

築城者 浅川菜女（伝承）

築城時期 戦国期

参考文献 「米沢盆地における中世考古学の諸問題」『陸風17号』

概要

本市の東方上郷地区に位置する戸塚山の北東に所在する。山城は戸塚山から北東に延びる尾根の中央部、山頂に構築している。標高 305.80m を有し、以前（昭和 30 年頃）は戸塚山観音堂があったところである。ちなみに戸塚山観音堂は置賜 33 観音の最終札所であり、山頂にあった時期は多くの参拝者でぎわったと言う。

山城は東西 90m、南北 47m の範囲に遺構が集中するが、尾根を利用した道路は戸塚山の山頂を通じており、この地点に物見台が構築されていたと推測される。この山頂には全長 54m の前方後円墳があり、5 世紀末頃の首長墓である。

山城を構成する遺構群は曲輪、堀切、虎口、帯曲輪、空堀、敵状横堀等がある。全体的に見てみると、主曲輪群は、東方部から堀切を主郭に至るまでに三箇所に構築し、堀切に囲まれた空間に方形状の曲輪を配している。主曲輪の西方部にも落差を有する堀切を配しておりこの主曲輪の南側には、樹形が認められる。戸塚山観音堂は主曲輪の西方部平坦面にあった。この箇所は戸塚山館で最も高いところである。

南斜面に配した 2 条の敵状横堀と 3 条の帯曲輪は、戸塚山観音堂の参道（南東の登り口）によって一部が削平されている。2 条の敵状横堀は均一な幅で構築されている。この遺構には逆木が配置されていたものと推測される。

虎口は、南斜面の東側にあり貧弱な樹形を形成している。虎口の位置から判断して山城に通じる道路は沢合いにあったものと考えられる。北側斜面は、急勾配である。現在は松林で覆われているが山城が機能していた時期には、松林はなかったものと思われる。

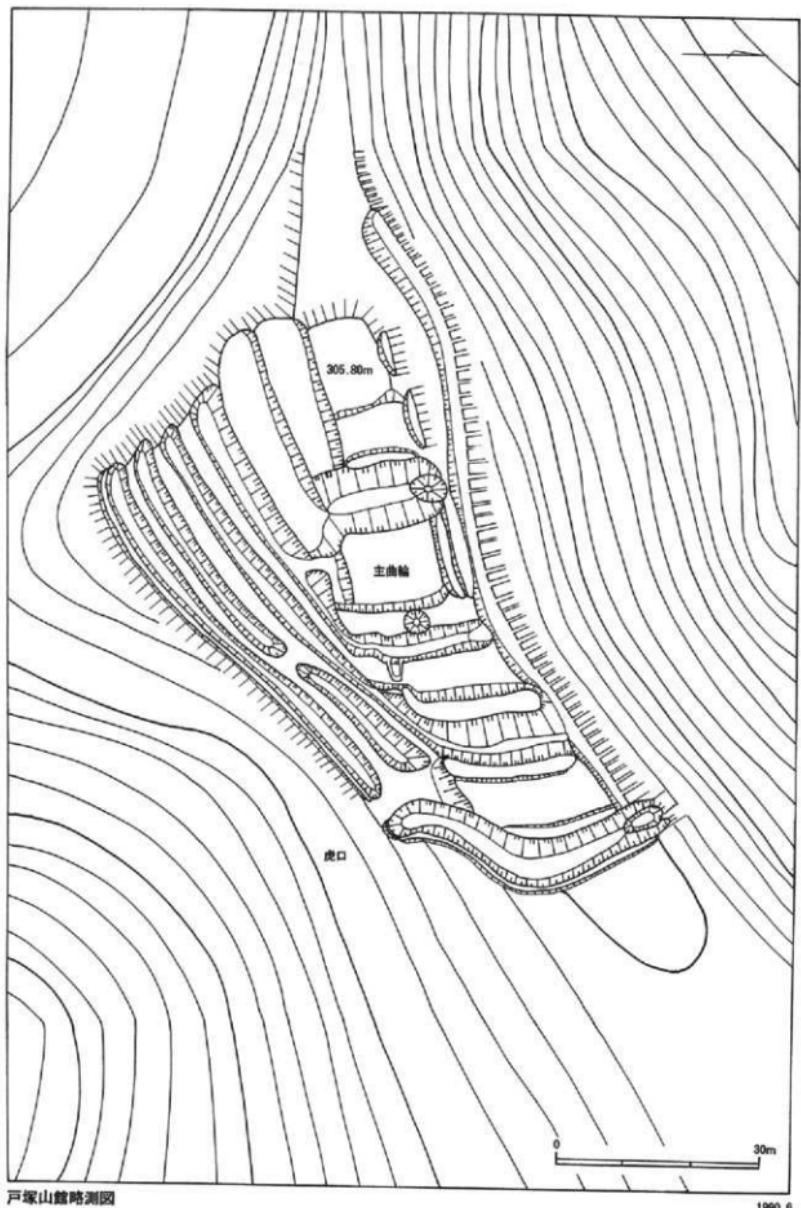
戸塚山館を、浅川地区の在地豪族、浅川菜女の館とする伝承が残っており、長手館ノ山城主綱代伯耆守と載ったとされる。争いの際に戦死した者を浅川方は戸塚山の麓に葬り供養塔を建てた。一方の綱代方は、長手館ノ山の東麓に葬ったと言う。浅川方が供養塔を建てた場所は、戸塚山館の東方に位置する「平塙」であると言うが、この場所に供養塔は現存しない。

浅川菜女は長井時代から伊達時代にかけての有力在地豪族で歴代襲名していた。戸塚山館の東南山麓の曹洞宗、瑞雲院を建立したと伝えられている。瑞雲院は平成 5 年に（1993）建立 700 年祭を向かえた。

沢合には「万年寺跡」と、呼ばれる遺構群が点在している。さらに万年寺跡をとりまく斜面には中世の塹群が分布している。

昭和 59 年（1984）に浅川地区で発掘調査が実施され、中世の館跡が発見された。「浅川館」と命名されたこの館は、堀で方形に区画した平城であり、無数の柱穴が確認され、堀からは鳥帽子をかぶった木偶人形が出土している。この館が戸塚山館とセットになる可能性もあると考えられる。

戸塚山館の形態は、本市東南部三沢館、川西町大字玉庭の松の木館等に類似する。（菊地政信）



戸塚山麓略測図

1990.6

所在地 米沢市大字長手

築城者 不明

築城時期 鎌倉～戦国期

参考文献 『米沢市埋蔵文化財調査報告書第14集 上浅川』(1次、2次調査報告書)

#### 概 要

本遺跡は米沢市街地の北東約4kmの水田地帯に位置する。東方標高356.6mの戸塚山があり、その北斜面にかけては多数の中世期の塚群や廃寺跡等の遺構が確認されている。

圃場整備に係わる発掘調査の際に、偶然発見された城館跡であり、全体の約3分の1が調査の対象として実施したものである。調査によって、掘立建物跡3棟を含む1,282基の遺構を確認した。遺構は、柱穴跡1,170基、礎石、もしくは集石をもつ柱穴39基、溝状遺構48基、不明ピット17基であった。

柱穴の多くは20cmと不規則であり、すべて円形や梢円形を示す。また柱穴の約半数以上には、柱痕跡が認められた。遺構別に若干の説明を加えたい。

#### BY1 [図参照]

ほぼ真北を基準線にして、南北5間、東西3間を呈し東西面に廂を有する建物である。間尺は南北より、3尺×7尺×7尺×7尺×3尺、東西で4尺×3尺×4尺と北端と南端の間尺が狭く廂的要素を有す。

#### BY2 [図参照]

全般的な間取り、方向は先のBY1同様である。BY1を切って構築していることから、BY1の後にBY2を建て替えたと考えられる。南北5間×東西3間で西と東に廂をもつ。間尺は南北が3尺×7尺×7尺×7尺×3尺、東西が西から3尺×3尺×4尺とBY1に比べ東端の1間を1尺広くしている。

#### BY3 [図参照]

北側が未調査範囲内に加わっているために、全体の規模は不明であるが、ほぼ真北を主軸長とする東西3間、南北6間以上で東西と南に廂を有する掘立建物跡である。

#### ZY1 [図参照]

円礎や割石を設置するもので掘り方内部に柱痕跡が認められことから、礎石を有する建物跡と考えられる。間尺は南北15尺、東西7尺の等間隔を有する。

#### 溝状遺構 [図参照]

館の周囲を区画した大形の溝状遺構と建物を区画した小形の溝状遺構の両者がある。

#### 遺物

溝状遺構を中心に151点出土した。大別すると土器、木器である。土器は越前系の甕片、土師質土器に細別される。木器としては、木偶状人形、繪馬、木柵、木鉢、曲物がある。

上浅川に関しての伝承や文献史料は一切ないが、出土した遺物から中世期における政治的色彩の強い館跡と考えられ、前述した戸塚山塚群との関連も注目されよう。ちなみに、館跡の発掘調査としては、本市において最初であった。

(菊地政信)



上浅川館跡平面図

1994.12

ながてたて  
**長手館** 202-112

所在地 米沢市大字長手字城山

築城時期 戦国期

史 料 置賜文化（第二十八号）発行？

参考文献 『上郷郷土史（上）』

概 要

米沢市街地の4km北西側にあって標高370m古館山山頂から北に延びる尾根の先端が小山になっており、その頂上一帯と西側山麓に位置している。館跡付近は、隣接して天王川（梓川）が南北に流れ、川下300mに長手天満神社が立っている。城館規模は山城と根小屋も含めると全体で南北500m東西160mに及んでいる。山城は頂上に主郭を置いてそれを巻く様に帯曲輪と腰曲輪、テラスを多様している。

山城の構造は北に張り出した小山の頂を中心テラスを多様した主郭と曲輪群、帯曲輪群、腰曲輪群で構成された重餅型山城といえる。主郭のすぐ北側には虎口があり、一条の長い帯曲輪と短い帯曲輪を有している。

西側は小規模なテラス群と急な自然斜面を利用し、南から東にかけては二条の帯曲輪、二つの尾根沿いに腰曲輪を多様しており、曲輪の幅が広く、人工斜面は急壁になっており外敵への防衛は強固である。また山城の東側尾根の下がった所に一条の深い堀切が見られる。

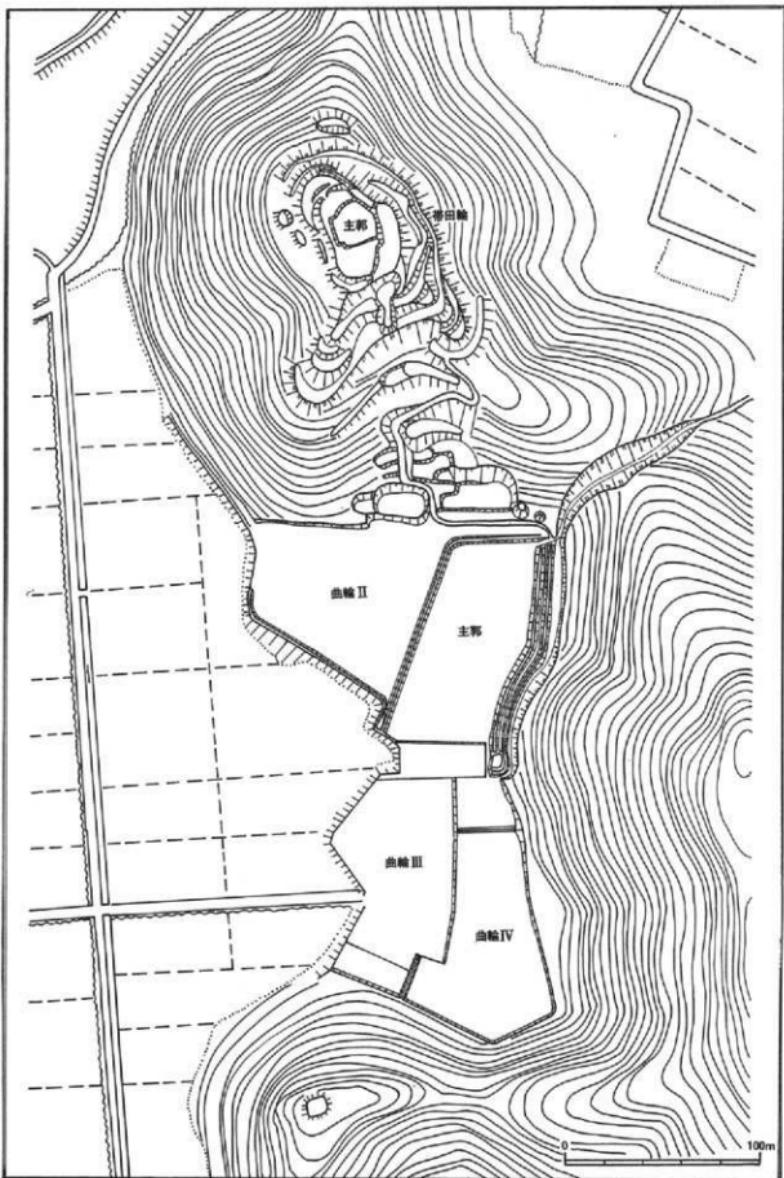
平城（根小屋）規格としては山麓の入り江を利用し、西側が川岸段丘となり四区画の曲輪群から構成されている。主郭は山城の南部直下の山沿いにあって南北100m、東西50mに及ぶ、また南側山沿いには井戸が見られ、その廻りを土塁で囲まれていることにより水の手曲輪と推測される。主郭と曲輪Ⅲの境界西側は川岸段丘上にコの字状部分が大手と考えられる。

曲輪Ⅱは主郭の西側に隣接して南北80m、東西90m、西側を川岸段丘斜面と土塁で構成している、曲輪Ⅲは主郭の南側に隣接し南北110m、東西60mで西側を川岸段丘斜面を使用し廻りを段状にして境界としている。曲輪Ⅳは曲輪Ⅲの東側の山岸にあって南北110m、東西50mとなっている。平城の南側小山には物見台若しくは烽台が有ったと思われる平場がある。

館跡の位置関係としては、北西側2.2kmに戸塚山館跡、西側1.5kmに川井館跡、南側700mには小峯神社館跡がある。

館跡に關係する伝承としては、地元の上郷郷土史によると、長手館は、伊達四十八館のひとつで館主は伊達氏の家臣、綱代伯耆守であり、天正19年（1591）伊達氏と共に仙台に移り、伯耆を伊予と改め、添川の地を賜り某所に居住したとある。置賜には俗に伊達の四十八館といわれるそれら家臣の居館があったと云うが、この数は必ずしも限定された極数ではなく、仏の四十八体仏などと同じように数多くの代称であるとの考えもある。

（佐藤弘則）



長手館

1988.10

所在地 米沢市中田町大浦

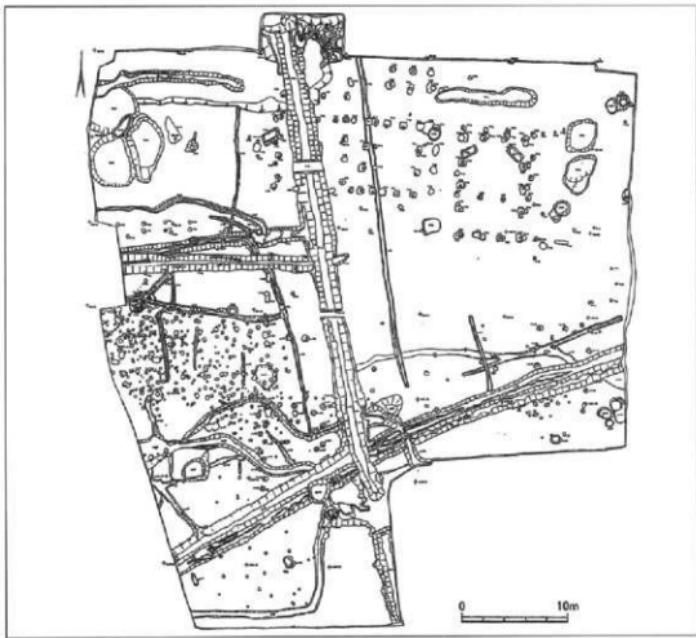
築城時期 室町～桃山期

参考文献 『米沢市埋蔵文化財調査報告書 第33集』「大浦C遺跡」

#### 概 要

以前から館地区と称されている地域で、平成元年～平成3年にかけて宅地や圃場整備事業の開発に伴った発掘調査が実施されている。検出された遺構の主体は、奈良時代の官衙に係るものであるが、中世の遺構も數多く確認されている。調査によれば、南の掘立川と北の旧掘立川の中間に発達した東西に延びる自然堤防状の台地を南北に切断して館跡を構築したものであり、調査では東端の水堀を確認している。堀跡は幅1.5m～2m、確認面からの深さ1.2m前後を有し、ほぼ中央部に当る部分に虎口が付随している。確認された堀の現長は33mで未調査ではあるが、現況の地形から判断すれば約70m前後を有しているものと推測される。建物跡は柵跡の西側、つまり館内部にのみ15cm～30cmの柱穴が多数検出されている。柱穴は複数の切り合関係を示しており、建物跡を具体的に確認することは不可能であったが、堀内部から出土した内耳取手鏡の存在から15世紀後半～16世紀前半に位置するものとみられる。さらに、戸長里製品、志乃焼、美濃系陶器、古伊万里等の陶磁器類も柵上層から検出されていることから柵跡が機能を失った後も大浦館を利用していたものと推測される。館に関する伝承等はない。

(手塚 孝)



大浦C遺跡平面図 (大浦館)

1994.12

くまのやまたて  
熊野山館 202-114

所在地 米沢市大字川井字上谷地

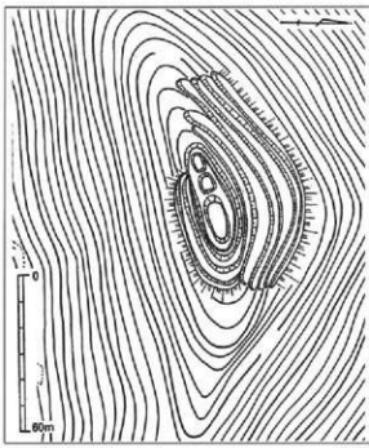
築城時期 戦国期

参考文献 『上郷郷土史』

概 要

戸塚山の南西 300m の単独丘陵に位置するもので、通称「熊野山」と称されている。城館跡は標高 290m の山頂を中心に構築され、20m~10m の楕円形テラスを主郭とするもので、南斜面に 6 条の敵柵横堀を配しているのが特徴であり、全体の形状が楕円形を有した長軸 90m、単軸 50m の小規模な山城である。小規模な主郭から想定すれば、物見台もしくは烽火台的な性格を示すものとみられる。

(佐藤弘則)



1989.6

おおららたて うちたて  
大浦館ノ内館 202-115

所在地 米沢市中田町大字大浦字館ノ内

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

米沢市の北東、松川と羽黒川の合流点に近い水田地帯に存在した平城跡と推測される。南北に走る国道 13 号線（バイパス）と新、旧両国道を結ぶ市道並びに県道米沢高畠線との交差する北西角に位置する。この平城跡は、字切図より推測したもので、南北 42m、東西 39m の方郭、その南側に南北 80m、東西 80m の不整郭が推測される。この館跡の北方 480m に外ノ内館、北西 600m に塙野中里敷が位置している。年代を示す文献や伝承等は認められない。

(橋爪 健)



大浦館ノ内館推測図

1989.6

202-115

かわいだて  
川井館 202-117

所在地 米沢市大字川井字道下

築城者 茂庭行朝（鬼庭行朝）？

築城時期 戦国期

史料 貞山公治家記録

参考文献 『上郷郷土史』

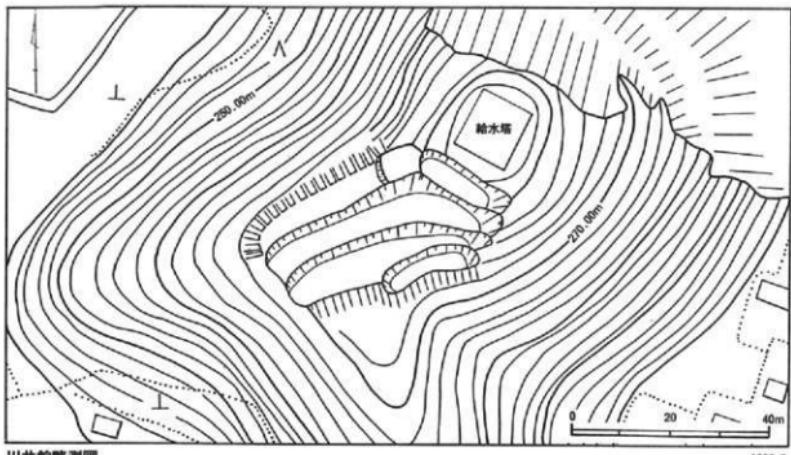
概要

本市街地の東方川井地区に位置し、館は標高 280m の通称「館の山」に所在する。「館の山」は独立丘陵であり、前方後円墳に似た形状を呈していたが、北東部が土砂採集によって削平され、現在は全体の約 3 分の 2 が残っている。また山頂には注水塔が設置され、本来の館の姿は約半分消滅したものと現況から推測される。

現存する遺構としては、帯曲輪群が認められ、山頂の平坦面を利用して階段状に構築している。山頂に至る道路等は確認することはできなかった。

歴史的には、伊達氏が置賜侵攻の際に先鋒した部将、茂庭行朝が本館の館主となったと言うが、居住年代は、はっきりしない。また本館の西南部直下には、桃源院があり、茂庭氏の創建と伝えられている。天正 18 年（1585）11 月、鬼庭（茂庭を改名）良直は 17 代政宗に従い、福島県青田原（現在の本宮町西南）觀音堂人取橋の戦いで討ち死にした。その時期にも鬼庭氏の本拠地が川井地区であったのかは明確でないし、平地の居館についてはまだ発見されていない。

（菊地政信）



川井館略測図

所在地 米沢市大字竹井字東屋敷

築城時期 不明

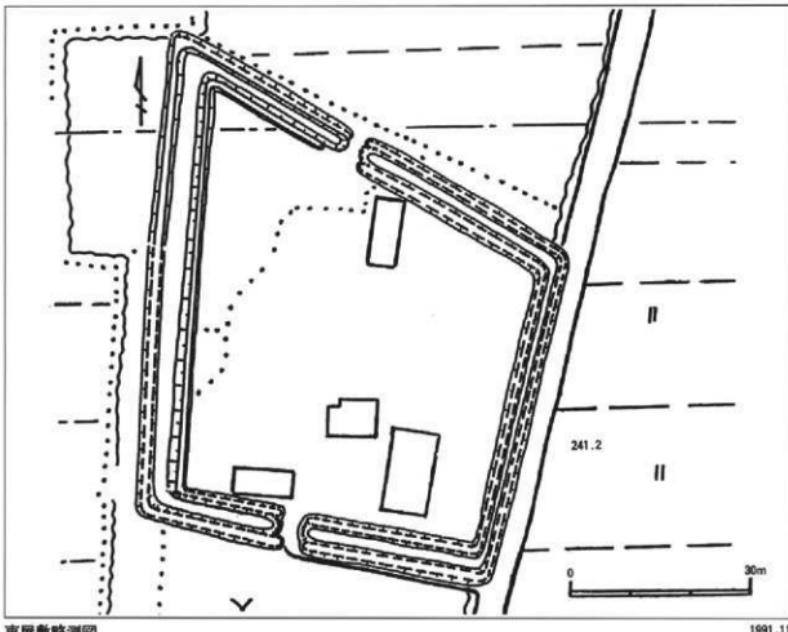
#### 概要

米沢市の東方 2.8km の平地に位置し、以前は住宅地として利用していた。北西側 500m には標高 282m の川井館ノ山、西側 1.6km に羽黒川と、東側 700m に梓川（天王川）が流れしており、羽黒川と梓川に挟まれた所に存在する館といえる。

館の構造としては、一部の土塁と水堀が現存するだけで、他は破壊されている。土塁は北面と西面に残っており最大幅 3m、高さ 2m、長さが 90m あり、水堀は同じく北面と西面に残り最大幅 3m、深さ 1m、長さが 60m 存在する。館全体の推測規模としては、約東西 70m、南北 80m に及ぶと考えられる。南面に用水路があり現在も使用されているが、当時の水堀の一部を利用したものとうかがえる。また、東面に関しては道路及び、圃場整備によって破壊された可能性が強い。館の周りは二条の土塁と一条の水堀で強固な守りとなっている事から、有力な在地豪族が住んでいたと思われる。また、館の形が菱形で珍しい点があげられる。

館の周辺には、西側 500m に川井館及び羽黒神社館、南側 700m に上谷地館、東側 700m に小峯神社館が位置している。

（手塚 孝）



東屋敷略図

1991.11

所在地 米沢市大字川井字上谷地

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『上郷郷土史』

## 概 要

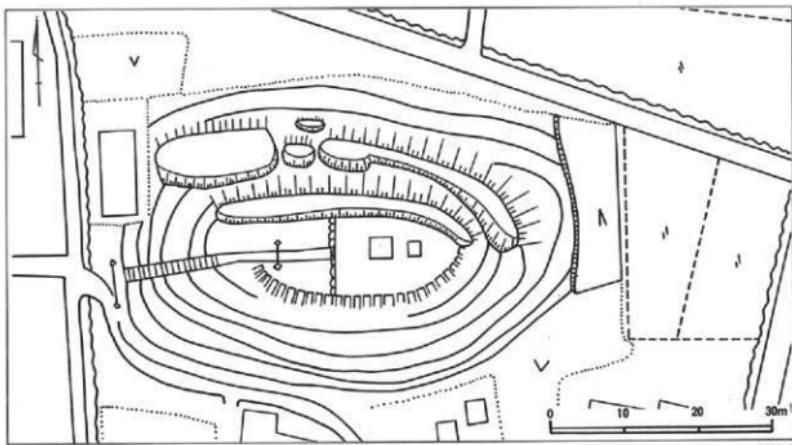
本市街地の東方に位置し上郷地区の川井地区に所在する。丘陵は東西 60m、南北 40m の椭円形状を呈し、平地との比高差は 16m を有する。遺構は北側斜面に集中して構築してある。

遺構は塔曲輪が主体である。頂上の平坦面には村社として厚く信仰を受けている羽黒神社が建立されている。また、伝承によると天正年中、伊達政宗の家臣、茂庭周防守厚く崇拝する所であったと言う。茂庭は本館の北方約 100m の地点にある川井館の城主であり、位置関係や構造の類似等から本館は川井館と密接な関係を有するものと考えられる。

また、本館の東方 200m 地点には通称「安部館」と呼ばれる所があり、土塁と掘跡が現存している。この安部館は現在、畠になってしまっており、畠を開墾する際に土塁を壊したと言う。土塁は「コ」の字形に造っていたらしく、約 100m 四方の規模であったことが現地の地形から想定される。

この様に、本館の周辺には複数の館があり、これらが同時に存在したのか、あるいは時間的な差をもって存在したのか今後の課題となろう。

(菊地政信)



羽黒神社館略測図

1988.7

所在地 米沢市大字竹井字古峰部

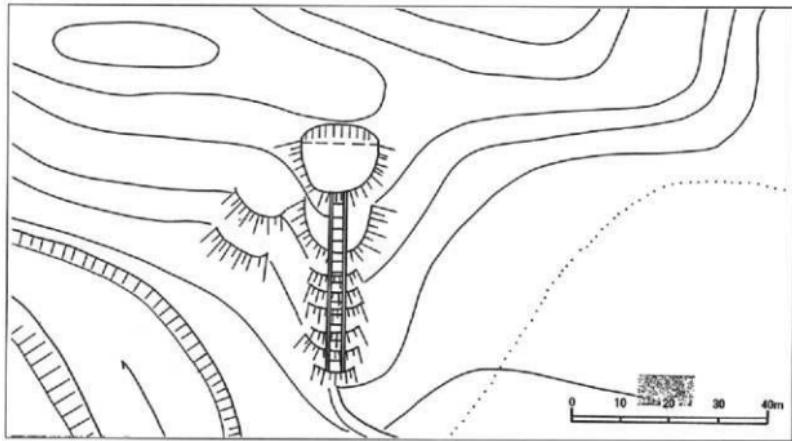
築城時期 戦国期

## 概 要

標高 265m の通称「古峰部山」の南東部に存在するもので、地元の鎮守である古峰神社を中心にテラスと連続した腰曲輪群で構成している。城館規模としては、南北 50m、東西 40m と小規模であり、古峰神社の参道よって若干破壊を受けているが、階段に沿って 6 段の腰曲輪群を山麓に多用し、その平均的な曲輪の大きさは、長さ約 10m、幅 2m 程度をなし、上部は二段のテラスを配し、長さ 15m、幅 10m を測る。さらに、西側斜面には長さ 10m、幅 3m の腰曲輪状のテラスが二段認められている。主郭は上部舌状テラスに当り、現在、古峰神社の社殿となっている。

本館跡の周辺には、北側 1km に長手城館跡が位置しており、同館跡の位置関係と小規模な古峰神社館の構造から推測すれば、物見台もしくは烽火台的な性格を有する可能性が高いものと考えられる。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



古峰神社館略測図

かまがしまたて  
**釜ヶ島館** 202-121

所在地 米沢市大字木和田字釜ヶ島

築城時期 不明

概 要

米沢市の東方 3.5km に位置する釜ヶ島館は、古館山の西山麓にあって近くに柿川(天王川)が南北に流れている、また、北部には県道(米沢・高畠線)が東西に走る。

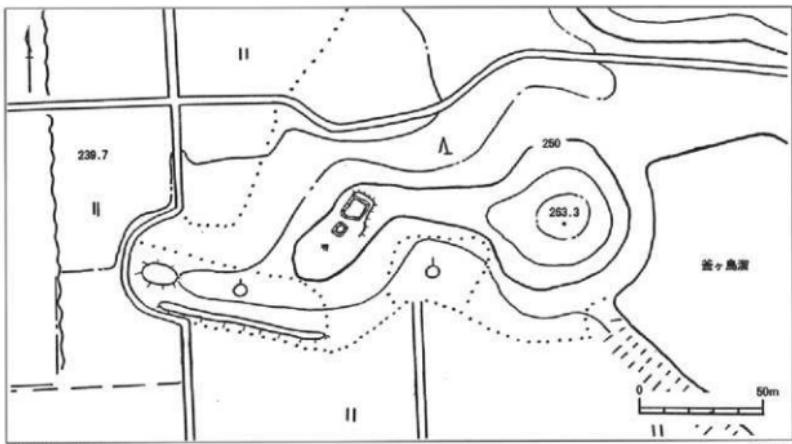
本館は、小規模な標高 263.3m の独立した山で東部が円形になっており西部は方形となっているので、方形部の曲がりがなければ大型の前方後円墳の形に似ている。山頂付近に遺構は発見されず西側中腹に 5m 四方の方形墳、及び 8m 四方の土壇があり方形墳の付近には石製の祠が建っている。方形の土壇は西部の両辺が内側に少し産んでいるため、帆立貝式古墳の形に似ている。

また、小山の西側突端には、平坦なテラスと等高線に沿うように帶曲輪が横走している。

館の周辺には、北西側 600m に長手館、西側 600m に古峯神社館、南側 500m には木和田中屋敷館、及び月原館が位置する。館の位置関係と小規模な構造から推測すれば物見台や、烽火台もしくは、なんらかの山岳信仰の関係があるものと思われる。

また、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



釜ヶ島館略測図

木和田中屋敷館 202-122

所在地 米沢市大字木和田字中屋敷

築城時期 不明

概 要

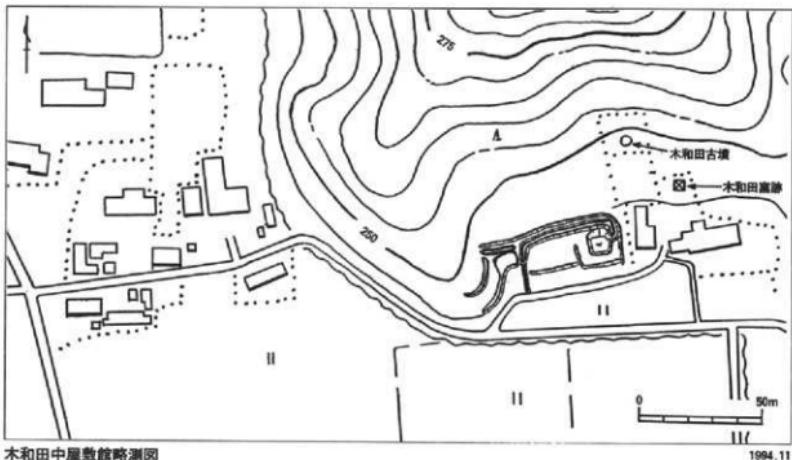
本館は、米沢市の東方 3.8km に位置し、古館山から南西側に張り出す標高 290.7m の小規模な独立丘陵の南斜面の山裾にあって、西方に梓川（天王川）が流れている。

館の構造は、東西 60m、南北 20m の範囲に広がっている。南北の長さが 20m と短いのは、道路の拡張や、圓場整備等によって破壊されたと考えられ、本来は 50m 前後を有していたとみられる。館は、土塁と水掘に囲まれた単郭式の平城を基本とするが、西側にはテラス状の遺構が存在し副郭的な施設を有していたものと考えられる。主郭の北東側角には、3m 四方の池があって曲輪の外堀へ延びており、木和田館同様の洗い場を伴った遺構の可能性がある。

また、館の近くに山斜面右側 30m に、木和田古墳及び、並んで東北地方で初めて発見された 8 世紀初頭（1200 年前）の木和田窯跡が発見されている。

館の位置関係としては、東側 100m に月ノ原館、北側 1.2km に長手館、北西側 750m に古峰神社館、南東側 400m に馬之越遺館、が位置する。また、館に関する年代を示す伝承や文献等は認められない。

（佐藤弘則）



木和田月ノ原館 202-123

所在地 米沢市大字木和田字月ノ原

築城時期 不明

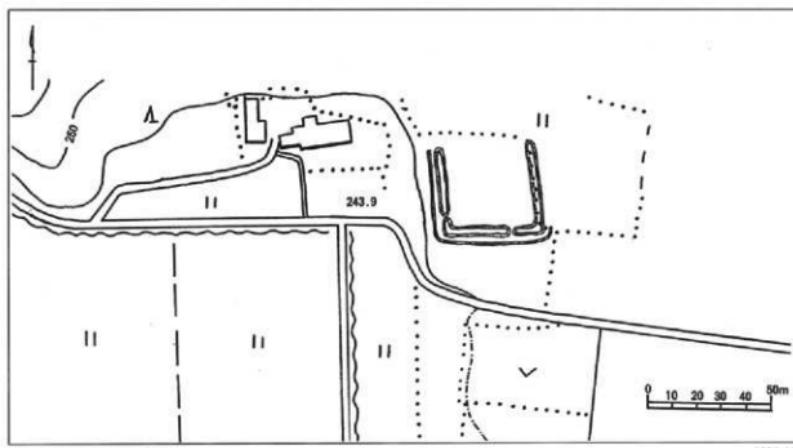
概 要

本館は、米沢市の東方3.8kmの古館山南側に広がる田園地帯に存在する平城で、近くには、梓川(天王川)が南北に流れている。また、北側には県道(米沢・高畠線)が東西に走っている。

館の構造は、幅3m程の土塁と水堀で構成され、東西45m、南北40mに及び、館の北側は開田によって破壊され、土塁や堀は確認できない。以前にあった土塁等が闘場整備によって破壊されたと考えられる。また、館内の南東部に墓地が現存し近世期の墓石が数基残っている。

館の近くには、北側の山斜面には木和田古墳及び、東北地方で初めて発見された8世紀初頭(1200年前)の地下式無段須恵器登窯「木和田窯跡」が発見されている。

館の位置関係としては、西側100mに木和田中屋敷館、北西側800mに古峯神社館、北側1.2kmに長手館、南側400mに馬之越道館が位置する。また、館に関する年代を示す伝承や文献等は認められないうが単郭式を有することから、12世紀前後に位置するものと推測される。  
(佐藤弘則)



木和田月ノ原館略測図

戸長里館

202-124

所在地 米沢市大字入田沢字戸長里

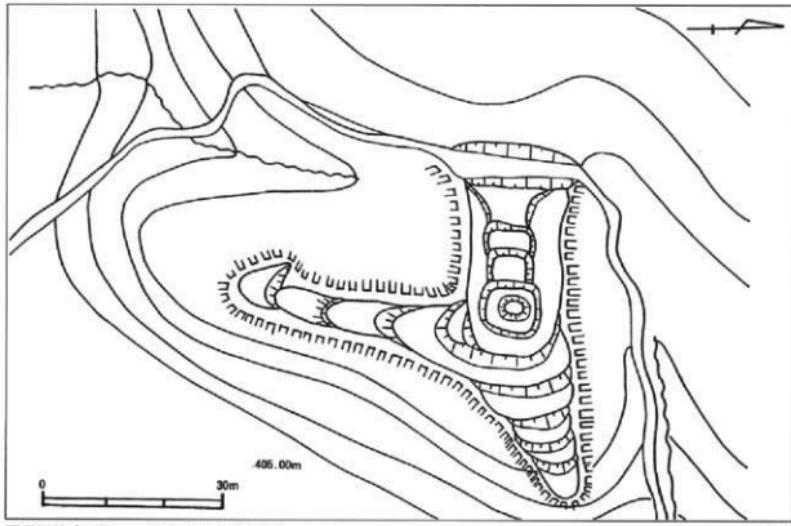
築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

米沢市の北北西約6km、北流する小樽川の西側に起伏する丘陵に位置する。本館跡は、標高492mの通称「寺山」の東斜面に張り出した舌状台地に構築された小規模な山城で、縄張りは東西60m、南北60m、方形のテラスを主郭として東側へ半月形の腰曲輪、南側へ舌状の腰曲輪、西側へは方形の腰曲輪をそれぞれ階段状に設け、西端には掘切を配している。7m~8mの主郭の規模から想定すれば、物見台または烽火台的な性格を示すものとみられるが、主郭の中央に築かれた塚や、その南側の直下に倒伏している板碑などから祭祀的性格も窺われる。東麓には、鎮守の熊野神社、洞松院、中世末の戸長里窯があり、小樽川との間に国道121号線が南北に走り、南麓には、旧国道から分岐した県道、米沢小国線から北西へ向っている。

(橋爪 健)



戸長里館略測図 (作図者 菊地政信)

1992.9

しんやしきだて  
**新屋敷館** 202-125

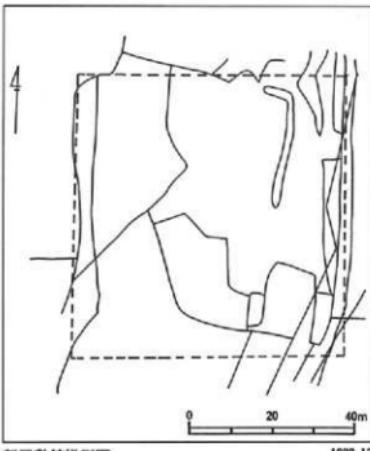
所在地 米沢市大字神原字新屋敷

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

本市街地の西南部に位置する田沢地区にある。国道 121 号線の沿線であり、この道路に沿って構築された館としては最も奥地にある。一辺が約 70m 前後の方形状を呈す館と推測され、現況は宅地及び畠となっており、土塁等の遺構は認められない。南西部には川西町に通じる道路の入口である戸長里の集落がある。伝承等は残っていない。また近くに山城も発見されていないが、前述した集落には戸長里館が確認されている。（菊地政信）



新屋敷館推測図

かんばらええたたて  
**神原前田館** 202-127

所在地 米沢市大字神原字前田

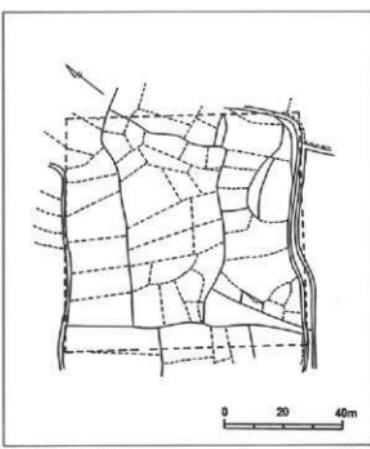
築城者 不明

築城時期 戦国期

史料 米沢里人談

概 要

本市街地の南西方向に位置し、現在は国道 121 号線、大峠街道の沿線にある。大峠街道は米沢と喜多方を結ぶ道路であり、伊達家 14 代宗宗の時に整備された。この時代、当地区の城主は不明であるが、伝承として新田氏が上げられる。現在、館があったと推定される箇所は圍場整備によって、大半は水田となっている。館の規模は 60m 四方と推定されるが、前述した事項から遺構等は残存していない。（菊地政信）



神原前田館推測図

所在地 米沢市館山町字長峯

築城時期 戦国期

史料『米沢地名選』

参考文献「米沢盆地における中世考古学の諸問題」『愼風』17号

#### 概要

大樽川と小樽川の合流する舌状丘陵に位置する。丘陵の先端部には東北館山発電所が存在し、発電所建設によって城郭の一部が破壊されているが、城全体は良好に保存されている。城は、舌状丘陵を利用して東西300mの範囲に構築されている。南側を大樽川、北側を小樽川の自然要害を背景に、さらに急勾配を図る目的で山肌を30m程削平して人工斜面を形成している。全体を土塁と堀切、縦堀で三箇所の曲輪を区画し、東側は南の山麓から大手口をもつ曲輪I、縦堀をへて曲輪IIがある。西面を10m～20m、高さ6mの大規模な土塁と北側に3m前後の小土塁と帶曲輪で区画された南北70m、東西60mの不整形空間は館山城の主郭（本丸）と考えられる。北西の隅には北の土塁が南に折れて虎口を開き、堀底道へ続く大規模な堀切が出現する。堀切は大型土塁の上端から対岸の端までの最大幅は、28mを測り、深さも20mをなしている。堀切を越えると曲輪IIIの空間に入り、南に大規模な物見台が位置する。曲輪IIIは最後の縦堀と物見台の西側に堀切を有し、物見台と曲輪の接点と縦堀一部に土橋による虎口が開口する。

性山公治家記録によれば、元亀元年（1570）伊達輝宗の将中野宗時、牧野久仲親子が謀叛を起し、それが露見するや自分の邸宅に火を放ち城下はすべて廃墟に帰した。但し、お城は「山上にありて恙なし」とある。

また、仙台史の中では伊達晴宗の代に高畠城から米沢城に拠点を移すとの記述があり、これを館山城としている。すなわち、「代十五世晴宗将君、羽州米沢城（松ヶ城より西三十余町館山と称する地）に移る。」とある。

一方、治家記録には輝宗が天正十二年隠居し、政宗に家督を譲り、己は館山に隠居所を造り普請の出来上るまで家臣鍋島重宗に起居し、翌天正十三年に移住したとある。さらに、天正十五年正月十一日には政宗が自ら館山に赴いて地取、二月七日再び同地に赴いて調張りを為し築城計画を開始した旨の記述がある。

その他の資料としては後世に編纂された米沢三名著として知られる「米沢事跡考」元文六年、「米沢鹿ノ子」宝暦頃、「米沢里人談」享和元年、「米沢地名選」文化元年である。館山城に関しては昭和二十年頃から三十年頃にかけて三原良吉、中沢千代、伊佐早謙、石倉惣吉、高橋堅治、中村忠雄各氏の論考がある。近代的な説を挙げれば次の様になる。

(1)館山城→主城（米沢城）とする。(2)米沢城（松ヶ城）を本城とする説。

(3)矢子山城を本城とする説。(4)館山城を「チャシ跡」とする説。

などがある。(4)のチャシ跡は論外であり、割愛すると三の説が残ることになる。ただし、(3)の矢子山城はすでに発掘調査で上杉氏の築城の可能性が濃厚であり、本城とするには問題があり、残るは米沢城と館山城になる。

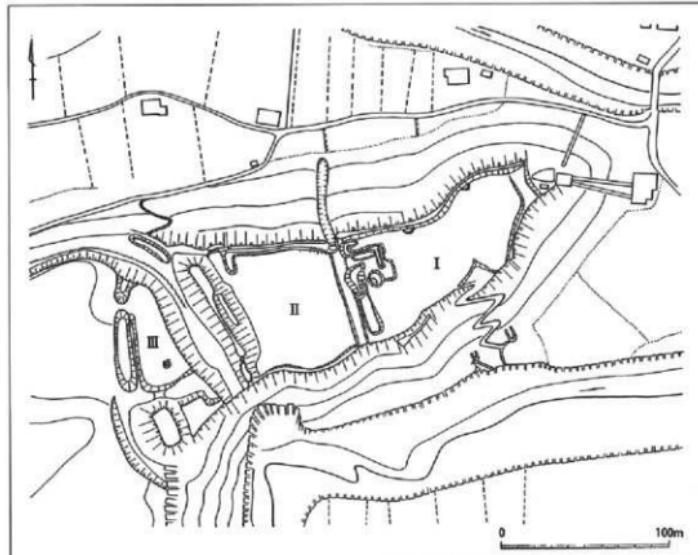
前者の米沢城（松ヶ城）を伊達政宗（政宗・輝宗を含める）と考える説には伊達治家記録を見るに米沢城と館山城を最も明確に区分している点を主張している。つまり、米沢城は主城で館山とは天

正十三年に建立された輝宗の隠居所であり、館山城とは新田景綱の居館とする説もある。さらに天正十五年に政宗自らが網張を為し築城を開始したが天正十九年に玉造郡岩手沢（後に岩手山と改む）に移ることで途中断念した城が現在の館山城であり、館山城が本城の米沢城であるはずは断然あり得ないと考えるのが大方である。

後者の館山城とする説は、晴宗が高畠城から米沢城に拠点を移すのが館山城で、以後政宗まで三代に亘り、居城したと言う。輝宗の日記の中で、元龜年に中野、牧野親子謀叛の記述に関しても山上とは館山城のことであり、現在の米沢城ではありえないとする。政宗の網張は老朽化した館山城を改善するものだと言う。また館山の町全体が城郭地帯で、一ノ坂の東側に残る並松土堤を城の外郭とし、二ノ坂を城の二の丸、三の坂を本丸跡とする説もある。現在は並松土堤は北側ほんの一部しか残存していないが、数十年前までは土壘と堀跡が存在していた。一方、館山町四町目の大樽川に近い畑地内にも幅4m、高さ2m強の石垣が残っているが城に伴うものは判然としない。

さて、この両者の説を残しながら現存する遺構を前提に考え方を述べておこう。館山城の網張り図と遺構をみる限りでは、明らかに機能（利用）したことは疑う余地はない。井戸三基もボーリング調査ではその存在は明確である。置賜全体で確認された城跡を分析した結果では、先の戸塚山と同じ三沢館型山城に類似し、伊達輝宗期に盛行した形態である。だが、三沢型の山城とは曲輪の規模では比較にならない絶大な広さをもつ。主郭の面積だけでも四千平米（1300坪）を下らない。米沢盆地最大の山城である。山城の南側には山城への大手門が存在しているが、その東側の大樽川と小樽川が合流する広大な山麓一帯も曲輪と考えられ、小樽川に接した面に方郭に区画された一町四方の土壁が現存が所謂「伊達輝宗の隠居跡」との可能性が指摘される。

（手塚 孝）



館山城略測図

1988.10

所在地 米沢市矢来

築城者朝 不明

築城時期 不明

参考文献 『米沢市埋蔵文化財調査報告書第19・25集』『米沢地名選』『米沢里人談』

#### 概 要

米沢市街地の南西約4km、JR米沢西に当る2km、国道121号喜多方より、南側の小野川地区、白布方面の分岐点、大樽川と小樽川の合流地点に当る、標高310mに存在する館山城の東側に位置する。

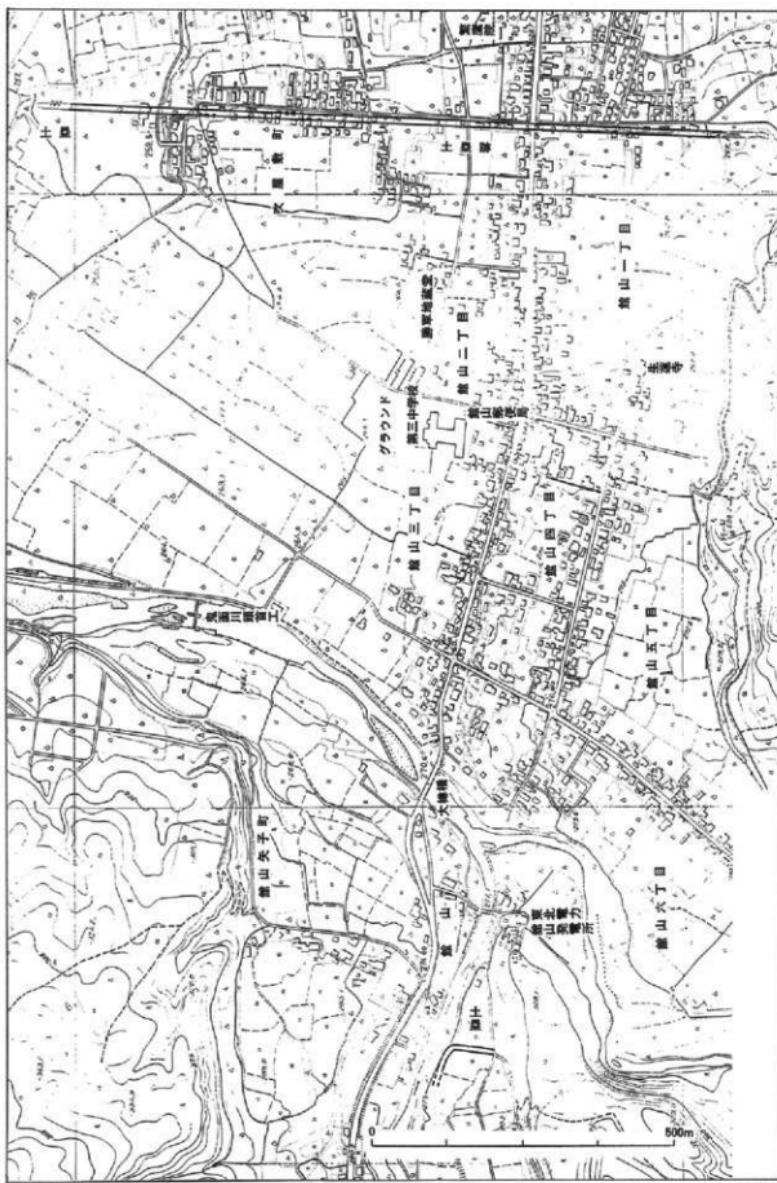
当館跡は標高255m～300mの東側に緩やかな微高地を呈し、現況が宅地、水田、果樹畠になっており、東西約400m、南北約400mの範囲に存在する。

米沢市街地から国道121号を小野川温泉方面に進むと、矢来と館山町の境から一段高い登り坂があり、一ノ坂、二ノ坂、三ノ坂、四ノ坂と称する。その一ノ坂付近には、南北方向に延々と伸びていた松並木、通称「並松土手」と呼ばれていたものが存在していた。市立図書館所有の市街地図（文化年中）によると、一ノ坂下南方280間、北方448間と記されている。現在はほとんどが削平されており現存していないが、最近開通した喜多方と米沢を結ぶ国道287号バイパス、通称「六部館山線」の跨線橋南側に、底部幅約10m、高さ約4mの土壘が若干存在しておりその面影をしのばせている。この土手は館山城の二の丸にあたる部分とされている。亨保年間の城下御絵図にはこの土手も記載されている。

また、現在の米沢市立第三中学校付近には、通称「馬場」と呼ばれる微高地があり、この馬場の呼び名も城跡に関連する地名と考えられる。また、付近の矢来という地名も、矢が飛んで来ると云うようなことからこれらに関連する地名と推測されている。

米沢里人談によると、「大永元年(1521)伊達稙宗によって越後に通ずる新道(現在の国道121号線)を切り開いたことから西側の要所とされていた。また、伊達系図、奥羽永慶軍記、治家記録には天正12年(1584)伊達輝宗、館山城に引退し、伊達政宗が繼いだ。伊達氏十七世、時に十八歳、政宗米沢城に居る。」と記され、この館山町周辺のいざれかに館があったことを物語っている。

米沢市教育委員会では、付近の遺跡の発掘調査によって中世のかわらけや、当市戸長里窯(16～17世紀)の製品を検出しており、中世の館跡を示すものと考えられる。(月山隆弘)



鎌山平城推測図

1994.12

おみやし  
角屋敷

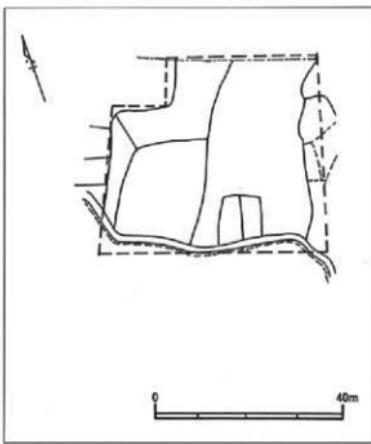
202-133

所在地 米沢市大字篠沢字角屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地 6km南西側の大樽川西岸の山麓に位置し、現状から想定すれば平城跡と推測される。この平城跡は、字切図より推測したもので、東西 45m、南北 42m に及ぶ。本館跡の周辺には、東側 500m に赤芝山城跡、その山麓に根小屋と推測される馬場館跡があり、南側 1km には化物屋敷館跡が位置する。現況は、圍場整備などにより消滅されているが、敷地内には墓地が残っている。  
(佐藤弘則)



角屋敷跡推測図

1992.10

おおたやしき  
太田屋敷

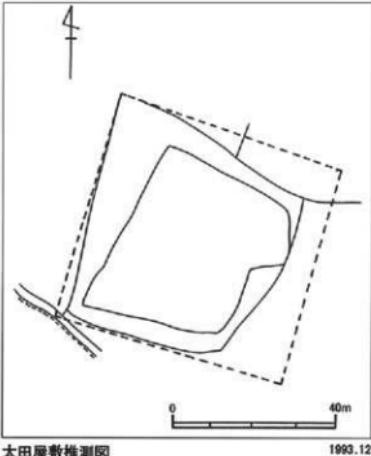
202-134

所在地 米沢市大字赤芝町

築城時期 不明

概 要

大樽川によって形成された河岸段丘の舌状大地に立地するもので、伊達氏の某家臣の居住と伝えられている。現況は不整形の土壌状高まりが一辺 50m の方形に配していることから半町四方の単郭式平城が存在したものと考えられる。  
(手塚 孝)



太田屋敷跡推測図

1993.12

どてうちたて  
**土手内館**

202-136

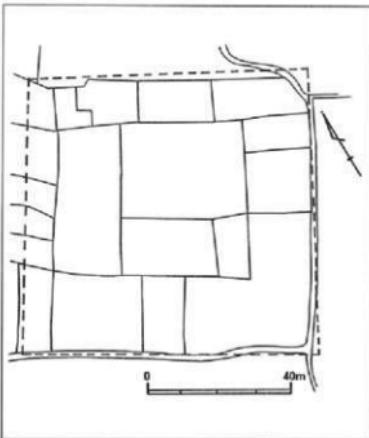
所在地 米沢市大字桑沢字土手内

築城時期 戦国期

**概 要**

小樽川によって形成された舌状大地に立地するもので、標高345mを測る。館跡の存在する一帯は田畠の耕作によってほぼ原形を失っているが、南東部にかけて土壘と空掘の痕跡が僅かに認められる。現況は畠と水田、原野となっており、字切図から推定される大きさは、一辺が約80mを有する単廊式の平城とみられる。記録や伝承は一切認められない。

(手塚 孝)



土手内館推測図

1993.12

ばげだて  
**馬場館**

202-139

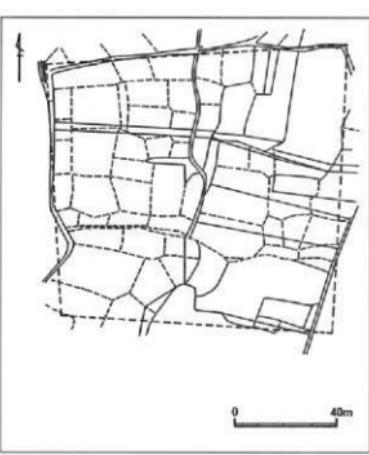
所在地 米沢市大字赤芝字馬場

築城時期 不明

**概 要**

米沢市街地5.7km南西側の大樽川南岸部山麓に位置し、現状より平城跡と推測される。この館跡は、字切図より推測したもので東西80m、南北80mの方形館と考えられる。館跡の東側山頂には大規模な赤芝山城跡が遺しており、この館跡が山城の根小屋の存在と考えられる。西側500mには角屋敷館跡、南側1kmには化物屋敷館跡がある、現在は圃場整備によって水田に変わっており、現状確認は出来ない。

(佐藤弘則)



馬場館推測図

1993.11

あかしづたて  
赤芝館 202-140

所在地 米沢市赤芝町

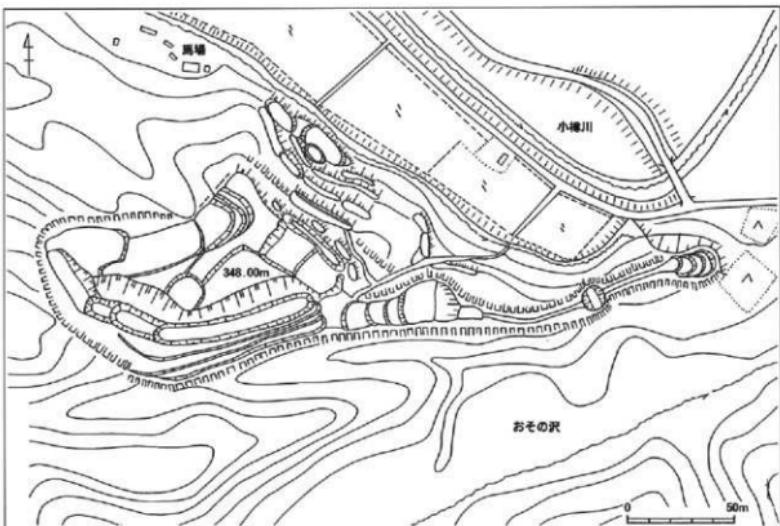
築城者 不明

築城時期 战国期

概 要

本城館跡は、米沢市の北北西約4.5km、北流する大槻川の東岸の山稜に位置し、標高421.5mの通称「馬場山」の中腹から北部にかけ東西270m、南北140mの範囲に分布する。東側には、笛野山から北流する大沢川がおその沢を形成し、西側には、山麓の水田を隔てて県道綱木、小野川、笛山線が南北に走っている。尾根の西側に山腹から下った平坦部にトラス状の曲輪群が構築され、主郭とみられる方形の曲輪の西側に一条の土塁を配し、東角の空間は虎口とみられる。山麓までの西斜面には、断続的な帯曲輪群を配している。東側の急斜面に長短3本の空濠を掘り、三条の帯曲輪を配している。さらに、東へのびる尾根上に4段の腰曲輪を配し、東端を堀切で区切っている。主郭から山麓までの比高差は30mにすぎない。本城館跡の西麓には、本城跡の根子屋の存在と考えられる馬場館跡が位置し、北西370mに太田屋敷跡、同方600mに角屋敷跡、南西750mに土手内館跡、南南西1kmに化物屋敷跡が位置する。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(橋爪 健)



赤芝館略測図 (作図者 菊地政信)

1992.9

ばけものやしき  
化物屋敷

202-141

所在地 米沢市大字塩沢字化物屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の、南西約10km三沢東部小学校すぐ東側、大樽川と網木川の合流地点の河岸段丘上に存在する。西側は県道島川・西米沢停車場線南北に走る。この館跡は、字切図より推測したもので東西約75m、南北約80mに及ぶ平城跡と推測される。館跡の周辺には、北東側700mに川辺館跡、鬼面川を挟んで西側1kmに三月在家館跡、成島館跡、そして南側に隣接する塙野西上屋敷館跡、馬場館跡が存在する。現況は闇場整備等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



化物屋敷推測図

1991.3

まるやまたて  
丸山館

202-144

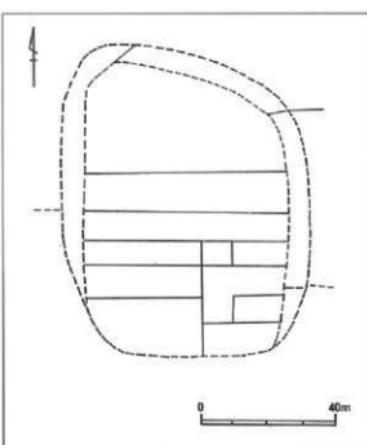
所在地 米沢市古志田町字丸山

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の3km西側にある愛宕山の山麓に位置し、現状より平城跡と推測される。東側には米坂線の線路が走っている。この平城跡は、字切図より推測したもので東西75m、南北90mに及ぶ。この館跡の周辺には、南東側1.5kmに赤坂館跡、古志田館跡が位置している。字切図では平城を囲むように山林の区割りが明確にされているところに注目され、当時の土塁、もしくは、空堀と考えられる。年代を示す伝承や文献等は認められない。

(佐藤弘則)



丸山館推測図

1993.11

よねざわじょう  
**米沢城** 202-148

所在地 米沢市丸の内一丁目

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『米沢市史』『米沢市埋蔵文化財調査報告書第27・32・45集』『絵図で見る城下町よねざわ』

概 要

本城跡は米沢市街地の松が岬公園一帯に位置し、標高約250mを測る。米沢市教育委員会では、中世から近世まで米沢城跡としての遺跡範囲を、本丸・二の丸・三の丸跡の一部を含め東西約600m、南北、560mの336,000m<sup>2</sup>としている。この遺跡範囲は、米沢市街地において唯一の埋蔵文化財包蔵地になっている。現況は、上杉神社、上杉市立博物館などがあり、木立が茂る市民の憩いの場となっている。

米沢城は、「米沢市史」によれば長井氏が築城されたと云い伝えられている。長井氏は、天授6年(1380)伊達宗遠に滅ぼされ、米沢は伊達氏の支配下に算入されたが、実際に伊達氏が米沢に居住し、本拠としたのは天文18年(1549)15代晴宗からと云われているが確証に貧しい。その在城期間も17代伊達政宗(独眼龍政宗)が、天正19年(1591)に豊臣秀吉によって陸奥岩出山に転封されるまでの僅かにすぎなく、城並びに城下の様子を知ることができる、資料はほとんど無いに等しい。ただ政宗が、陸奥岩出山に転封される際に、米沢城下の東町、大町、立町、桐町、南町、柳町の六町の主だった町人をほとんど「伊達御供」として一緒に移っていることから、少なくともこれだけの町並みがあったことは頷ける。要約すれば、米沢城は13世紀の初め、長井時廣によって築城されたと云い伝えられ、その後、伊達・蘿生・上杉各氏の居城として明治維新まで存続した城であると判断されている。

米沢城御絵図に描かれた城の形態は時代によって変遷している。上杉景勝が慶長6年(1601)に二の丸を造り、同9年には門・堀・櫓等の改築拡張、ついで同13年には外曲輪を造営し外濠を掘り、城西に掘立川を穿った。また、本丸と二の丸の小城を三の丸まで拡大し、修復も同時に行なったと推測される。その規模、本丸四方890間、二の丸北方170間、南方180間、東方200間であった。いずれの絵図面をみても本丸と二の丸をつなぐ南門の形態は変わっていない。

米沢城跡の現況は、その外見から東西100m×南北100mの本丸を囲む桜並木の掘りによって、本丸跡しか現存しておらず、城が機能していた頃の二の丸・三の丸の面影は跡形もなくなっている。

米沢市教育委員会では、平成元・2年において松が岬公園整備事業の石垣積替え工事に伴って緊急発掘調査を実施している。調査の結果、本丸堀内(東・西・南・西側)のほぼ全域に杭列群を確認している。これらの杭列群は基本的に、犬走りを挟んで土塁直下に配するものと、堀の直上に配する両者で構成されており、二重に配する土塁側杭列群は、土塁の崩れを防ぐ土止め用であり、掘側の杭列群は先端が尖状を呈していることから、防備用の杭列(亂杭)と考えられている。 (月山隆弘)

所在地 米沢市丸の内

築城時期 不明

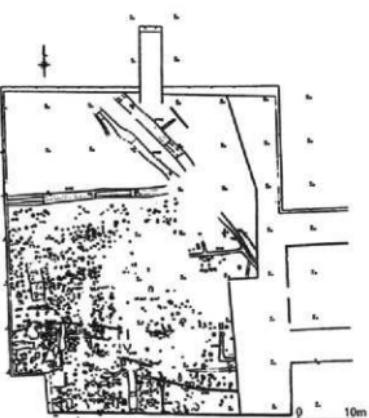
参考文献 『米沢市史』『米沢市埋蔵文化財調査報告書第27・32・45集』『絵図で見る城下町よねざわ』

### 概要

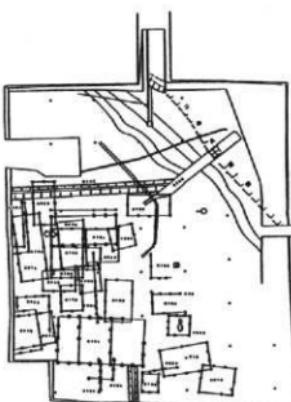
本城跡は米沢市街地の松が岬公園一帯の米沢城東側に位置し、標高約250mを測る。二の丸・三の丸跡は高等学校などの公共施設・観光センター・商店街あるいは住宅が密集して建ち並んでいる所である。米沢城二の丸跡は、宅地・公共施設等に伴う発掘調査を小範囲ではあるが、平成元年度から数回にわたり実施している。特に平成3年度に上杉城史苑（観光センター）の建設に伴って緊急発掘調査を実施した東二の丸跡（米沢城が機能していた亨保10年の御城下絵図によれば二の丸大手門北側に位置する）からは、中世から近世・近代にわたる三時期の遺構・遺物が確認されている。この中で、中世の遺構に限定すれば、掘立建物跡27棟・溝跡十数基・堀跡3基などが検出している。しかし、これらの遺構は後世の建物等に重複または削平されており、建物跡を構成するに至らなかった柱穴が膨大な数で、特に建物跡の数量についてはこのことを念頭に入れなければならない。建物跡は、箱型で区画された南側範囲に、三時期にわたる掘立建物群が確認された。この中世の建物跡のほとんどが、南北方向の桁行きを呈するものが多く、その規模は東西2~3間、南北3~5間の建物跡を占めており、柱間1.8~2.2m(6~7尺)、掘り方の平面形はほぼ円形の40cm前後、深さ20~40cmを測る。掘り方の堆積土の観察によれば、焼土を含むものや炭化物を含むものなどがあり人為的な埋土であることが判明した。

遺物は陶器・陶磁器・木製品・ガラス製品・かわらなど、その他には甲冑などがあり、そのほとんどが陶磁器類である。その中で中世の遺物として、縁起菊文紋・鍋（内耳取手）・香炉・鉢（戸長里窯）・大甕（越前）・瓦器などがある。出土遺物から、年代はⅠ期が14世紀初頭、Ⅱ・Ⅲ時期は14から15世紀頃と判断されている。

（月山隆弘）



米沢城東二の丸跡遺構全体図（中世）



米沢城東二の丸跡建物全体図



米沢城と米沢城東二の丸館跡測図

1994.12

さきのまちあかさかたて  
笹野町赤坂館

202-150

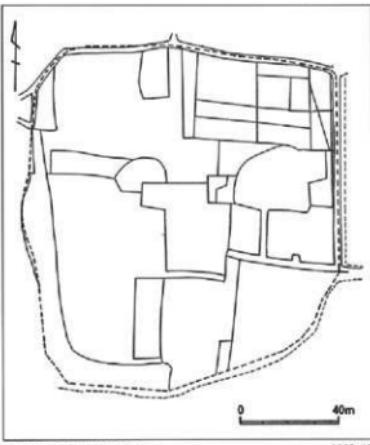
所在地 米沢市大字笹野町字赤坂

築城時期 戦国期

概 要

標高 555m の愛宕山から延びる山麓の緩やかな舌状丘陵に立地している。館跡は、畠地の開墾と宅地によってすでに原形を失っているが、北西から北側にかけて僅かに土壘と推測される高まりが認められる。字切図と現況から南北が約140m、東西が約130mの範囲にかけて分布しているものと予想される。城主に関しては、伊達氏家臣の赤坂某と伝えられているが確証はない。

(手塚 孝)



笹野町赤坂館推測図

はっこうやどうきただて  
八方屋道北館

202-151

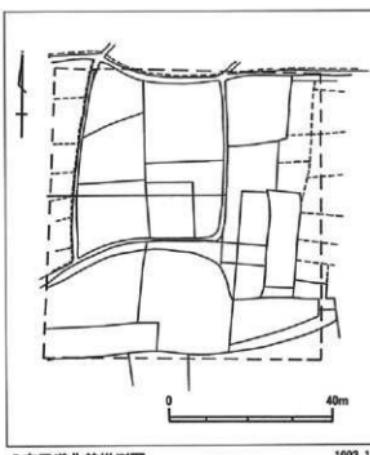
所在地 米沢市古志田町字八方屋道北

築城時期 不明

概 要

笠野丘陵の一角、大森山から張り出した舌状丘陵の末端部に位置するもので、北側に赤坂館、南側に古志田館が隣接している。現況は原野及び畠地となっているが、今日までの開墾等で形状は失われている。字切図による南北約70m、東西65mの範囲を有する方形単館の可能性が高い。伝承等はない。

(手塚 孝)



八方屋道北館推測図

ぎょうさくじやて  
廟葬館

202-152

所在地 米沢市笛野町字廟葬

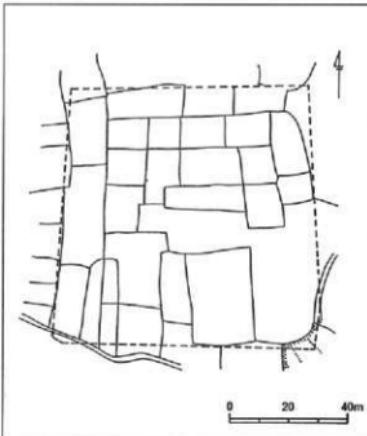
築城者 不明

築城時期 近世期

概 要

本市街地の南方に位置し、上杉薙主の火葬場があった箇所であり、現況は畠となっている。畠の中に5m四方の低い塹があり、火葬場の中心であったと言う。畠の開墾よって、遺構等は消滅したと考えられる。館は64m四方の規模と想定される。

米沢里人談によると、この地区は天文16年(1547)8月8日、芦名、盛氏と伊達家14代宗親が合戦した場所である。この時期に館が存在していたのかは不明である。



墓葬館推測図

(菊地政信)

せきがみやしき  
関上屋敷

202-153

所在地 米沢市関町字上屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の南方約10kmにあり、白布街道の船坂峠を下り終ると右側の立石集落に存在する。この館は平城跡と推測される。館跡の南側に大樽川が流れ、北側は柄庭山の南端部に挟まれた宅地に存在する。

この館跡は字切図より推測したもので東西55m、南北60mに及ぶ。南東側約500mには、屋敷裏館が存在する。現況は宅地造成等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



関上屋敷推測図

ふるしだたて  
古志田館 202-158  
所在地 米沢市笛野町字古志田

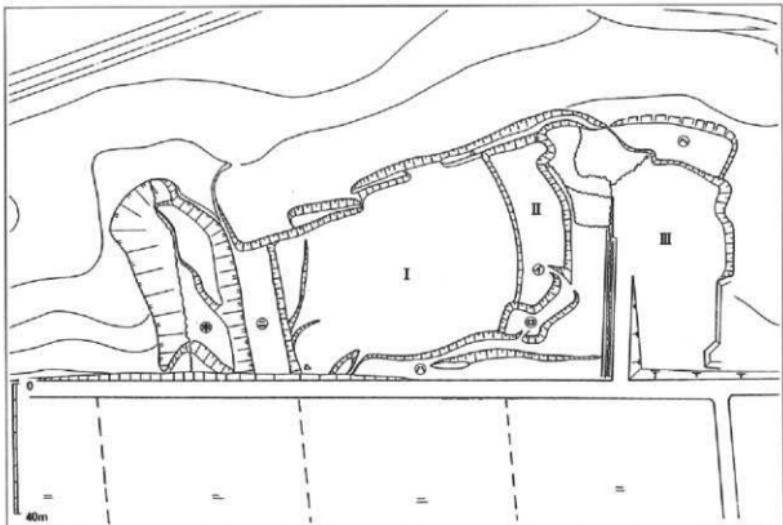
築城時期 戦国期

概 要

斜平丘陵から張り出した山麓の平坦部分を利用したもので、標高 270m～280m に位置している。館跡は、県道遠山笛野線によって東側に面する一部が破壊されているが、ほぼ残存状況は良好で、現状は杉林、雜木林となっている。形状は、南北を主軸長とする複郭式の平城で、南北 180m、東西 80m をなす。

曲輪は、山麓を削平し、テラス状の平坦面を構築するのが特徴であり、主郭となるほぼ方形の曲輪 I は長径 70m、短径 60 を有し、北側に 2m 前後の段差をなして、50m×18m の曲輪 II、さらに 1.5m の段差を有した 70m×50m の曲輪 III の 3 曲輪で構成している。曲輪 I の南側には南からの敵の侵入を防衛する幅 18m、高さ 4m の土塁と幅 28m、深さ 5m 前後の堀切が付随し、北側は自然の尾根を整形し土塁と同じ効果を加えている。

虎口は、曲輪 I の南に延びる腰曲輪（ハ）から楔形（ロ）に入り、（イ）の虎口より曲輪 I に通じている。全体的な構造は、館山城型に類似している。記録及び伝承等はない。  
(手塚 孝)



古志田館略測図

1994.12

まきのだてのうちたて  
笹野館ノ内館A 202-159

所在地 米沢市笹野本町字館ノ内

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『米沢市埋蔵文化財調査報告書第32集』『遺跡詳細分布調査報告書第5集』

概 要

米沢市街地の南西約3km 笹野観音南側、標高600mの笹野丘陵及び笹野丘陵から張り出した舌状台地周辺一帯に位置する。今回の調査で遺構として確認された館跡は、かつての最上川(旧松川)によって形成された河岸段丘と笹野丘陵から張り出した舌状台地周辺に分布する。

当館跡は、その名称の由来において館跡として残っている所である。しかし、戦後の開拓や、簡易スキーフィールド及び、宅地などの開発において削平されている所もあるが、帯曲輪や土塁等が比較的良好に存在している。

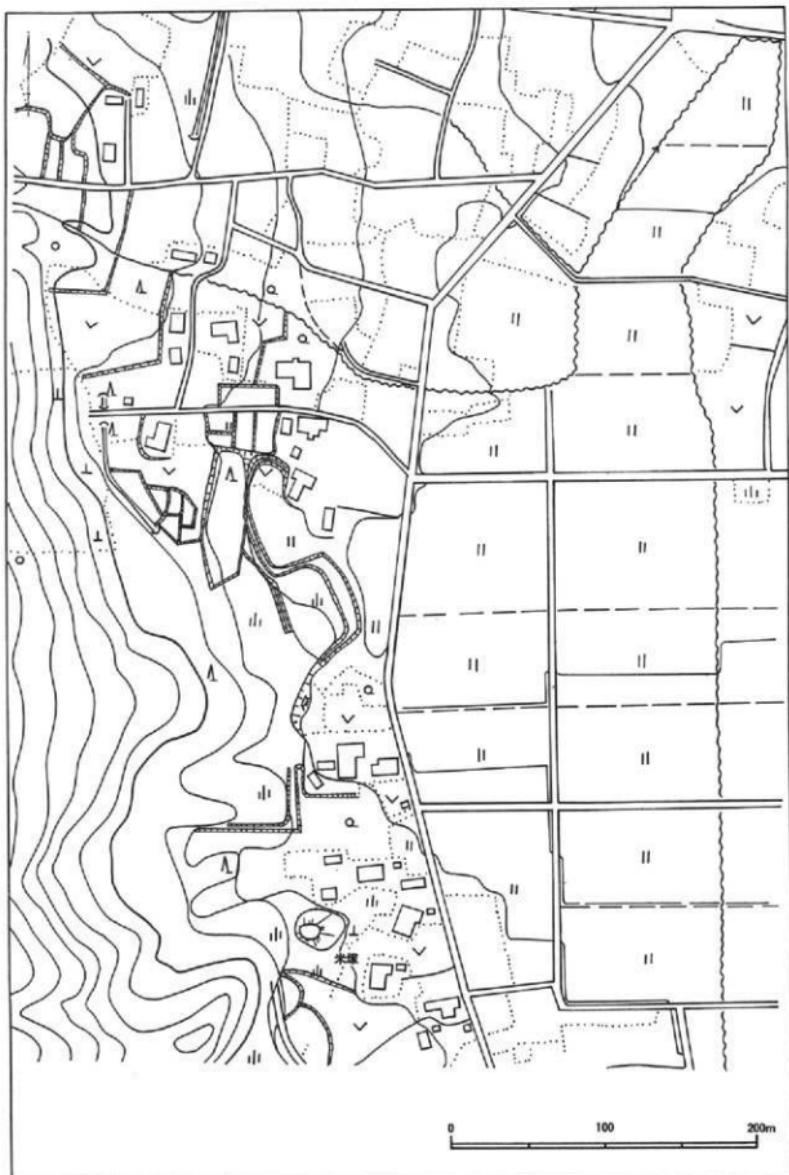
当館跡付近一帯北西500mの山腹には笹野山型を代表する笹野山館が存在し今回の調査で確認された館跡も笹野丘陵上から張り出した舌状台地周辺一帯に位置するものである。現況は山林、水田、畑、宅地になっており、東西約100m、南北約600mの広範囲に存在する。

切図によれば、館跡範囲内の北側と中央部及び南側には曲線を有する帯曲輪群が2ないし3条確認され、また、中央部の北側と南側には、「L」字状または「コ」の字状帶曲輪群が2条認められる。中央部に確認されたテラスは2条の帯曲輪からなり、幅約60m、長さ約30mの舌状を呈している。

館跡の西側には大規模な笹野丘陵が南北に連なっており、ここに存在する館跡が山城の根小屋的存在と考えられる。

館跡内南側には、通称「米塚」と呼ばれている塚が存在する。この塚は、長軸が東西方向を示し、東西約35m、南北約25mを測る。平面形がほぼ隅丸方形を呈し、塚の高まりである。館跡に関連する物見台的なものと考えられるが確証はない。

(月山隆弘)



新野館ノ内館 A 略測図

1992

せんじつけいたて  
先達在家館 202-163

所在地 米沢市猪苗代町字先達在家

築城者 不明

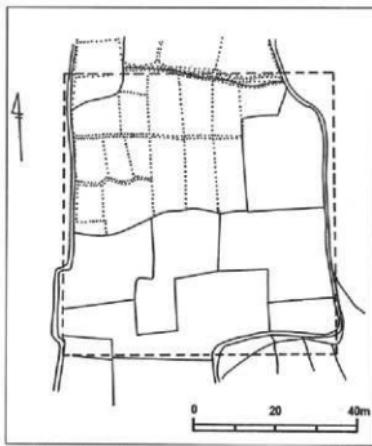
築城時期 戦国期

概 要

本市街地の南部にある南原地区に位置し、周辺には、夏屋敷館や十郎古屋敷、丘城の高橋館等がある。本館の現況は宅地及び畠となっており、堀や土塁は確認されていない。

館の規模は南北70m、東西67mの方形を呈する形態と想定される。前述した高橋館の北方部、平地に位置することから判断して、高橋館との関連が注目され、高橋館の家臣団の居住地の可能性が強いと考えたい。伝承等は残っていない。

(菊地政信)



先達在家館推測図

1989.10

なつやしき  
夏屋敷 202-164

所在地 米沢市猪苗代町

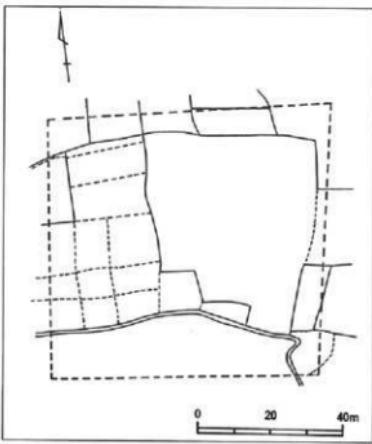
築城時期 戦国期

概 要

米沢市街地の南方約8kmにある。市街地から白布街道を南に行くと県道間根停車場・南原線(海老ヶ沢大橋)に左折する角地の宅地・畠地に存在する。この館は平城跡と推測される。

この館跡は字切図より推測したもので東西78m、南北75mに及ぶ。現況は宅地造成等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



夏屋敷推測図

1989.10

じゅうろうざいけたて  
**十郎在家館**

202-165

所在地 米沢市篠野町字十郎在家

築城者 不明

築城時期 不明

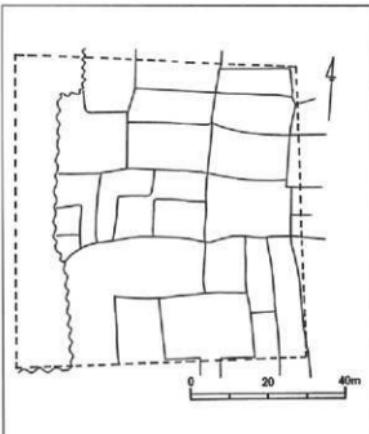
概 要

本市街地の南方、南原地区にあり北方には夏屋敷、南方には上道弓館、さらに当方には丘城の高橋館がある。現況の大半は水田となつておらず、遺構は残存していない。水田は圃場整備されており、その際に遺構は消滅したものであろう。

館の規模は南北 75m、東西 70m の方形状を呈すものと推定される。字切図でみると、館に関連する水路が認められる。伝承等は残っていないが、高橋館との関連が推測され

る。

(菊地政信)



十郎在家館推測図

1989.11

かみどうきょうたて  
**上道弓館**

202-168

所在地 米沢市猪苗代町字上道弓

築城者 不明

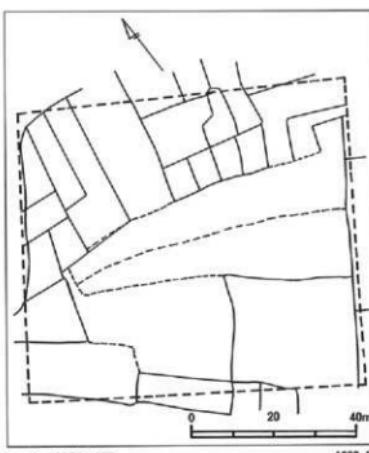
築城時期 戦国期

概 要

本市街地の南方、南原地区に位置し東方に高橋館がある。本館の現況は果樹園及び畠となっており、遺構等は残存していない。館があった場所はゆるやかな傾斜を呈する地形であり、山麓から張りだす平地に築城した館である。東西 81m、南北 74m のやや台形状を呈す形態が想定される。

南東方向には、前述した館の他に前ノ在家館、中ノ在家館が山頂にあり、これらの館の西方の入口に位置する箇所に本館はある。関連性は言えないが、隣接地に高橋館が存在する。

(菊地政信)



上道弓館推測図

1989.11

あさらやまなて  
笹野山館 202-170

所在地 米沢市笹野町本町

築城時期 戦国期

史料 『米沢地名通』

参考文献 「伊達氏と置賜」『置賜文化 28号』

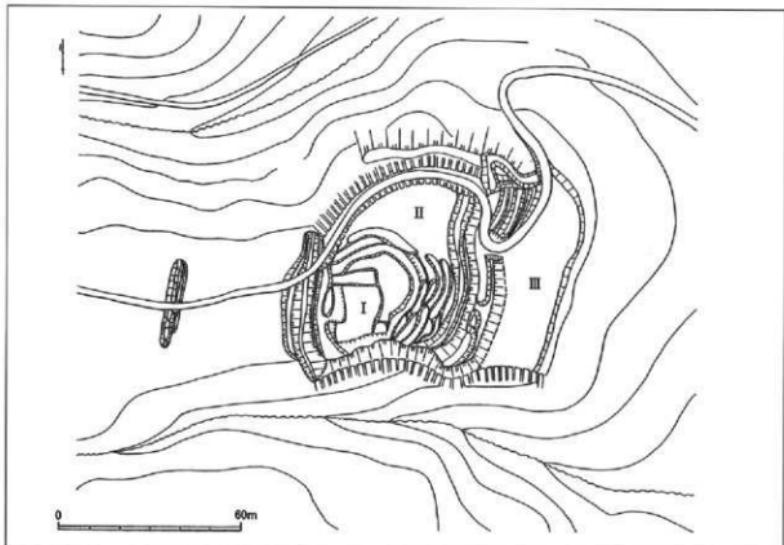
概要

斜平丘陵の一角、標高 457.6m の大森山から張り出した独立丘陵上に立地するもので、笹野觀音堂の裏山に当たる事から通称 笹野山と呼ばれている。館跡は一部、林道によって破壊されているが遺構の残存状況は良好で、大森山に面した尾根の一端に堀切一条を配し、標高 390m を有する丘陵の頂上を中心円形状に曲輪群を構成するのが特徴である。館跡の規模は東西 170m、南北 100m、山麓までの比高差は 70m を測る。

遺構群は、南側を約 20m の人工斜面、北側は幅 5m 前後の帯曲輪を二重に配し、左右の沢合を防御している。一方、東側は北東部に「S」字形に掘りを廻した変形の樹形と南に隣接する二重堀、さらに幅約 30m、長さ約 80m の平坦なテラス状の曲輪Ⅲを置き、主郭の要となる西側には中央に虎口を有する空堀と土塁を配した縦堀で主郭遺構群を構成している。

主郭は、西側の堀切と東の縦堀で区画した範囲に位置し、北側に三角形状を有する曲輪Ⅱを置き、東側から連続したテラス状の帯曲輪を階段状に配し、さらに半円形状のテラスを連続させ、最顶部付近で不整形方の平坦面を構築した所謂「重餅型」の曲輪Ⅰ（主郭）を構成している。城主は、伊達家臣達藤兵庫の伝承があるが明確にできない。

（手塚 孝）



笹野山館略測図

1968.11

くわえしだて (たかはしだて なで やまと) 緑返館 (高橋館、館の山) 202-171

所在地 米沢市大字李山字長峯巣山 10792-4

築城者 高橋筑前守秀行

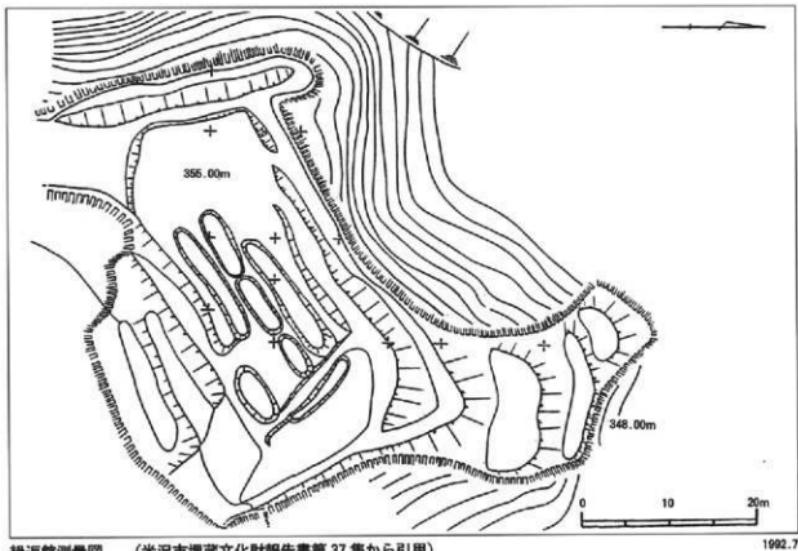
築城時期 戦国期

参考文献 『伊達氏と置賜』『高橋堅沼先生遺稿集』『緑返館跡 発掘調査報告書』

概要

米沢市の南方約7km、南原地区の坂下、市布間に張り出した丘陵地帯に位置し、南北約600mに及ぶ舌状台地には所謂、伊達「四十八館」の一つである『高橋館』が存在するといわれ、文献にも明記されているが、近年の急速な土砂採取のため、未調査のまま大半が失われた。平成4年6月、米沢市教育委員会の緊急調査により、最南端の残存部に位置する物見台が調査されている。この物見台は、尾根上に方形に整地された平坦面で、標高355m、平地との比高差は約38mある。この地は米沢盆地を一望できる所で、東側に三段の帯曲輪、西側に二段の曲輪、さらに北側にも一段の曲輪を構築し、北東に延びる尾根にも腰曲輪群を配置している。すでに、消滅した舌状台地は東西両面共に急崖状で、その最北端に約2m巾の空濠を廻らし、腰曲輪状の段のついた小丘（標高330m）が存在したという。この館跡の西方には、県道米沢・猪苗代線が南北に走り、東方800mに中ノ在家館跡、同900mに前、在家館跡、北東約1kmに栗訪館跡、南後方約1kmの山腹に杉ノ下館が位置する。

（橋爪 健）



緑返館測量図 (米沢市埋蔵文化財報告書第37集から引用)

1992.7

やくしやまなで  
薬師山館 202-175

所在地 米沢市大字李山字薬師下

築城時期 戦国期

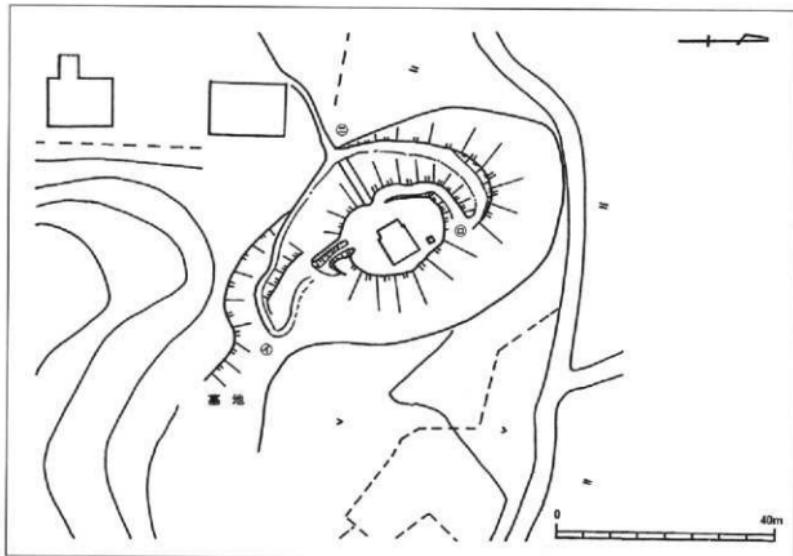
概 要

山頂と尾根を利用して構築された前ノ在家館、中ノ在家館の大規模な山城が存在する山頂の尾根から北側に延びる丘陵の最北端に位置するもので、頂上部分には薬師如来を祭る一布神社が存在し、館跡全体が神社の境内となっている。館跡は、西側からの大手(=)から北に廻る(○)の道路と逆に南に回遊する(イ)の道路の二通りがあり、なかでも(ロ)の道路は折れながら主郭の虎口に向かうことから主要道路と推測される。一方(イ)は山麓に沿って館南端の尾根に延び、堀切の堀底道から迂回して主郭の西虎口に接続しているものと考えられる。

西側の堀切は墓地によって破壊され、形状は明確がないが、(イ)の堀底道に統くものとみる。

主郭は、神社を中心とした丘陵先端の頂上付近であり、長径20m、短径15mの橢円形を呈し、南北2箇所の虎口を伴うを特徴としている。居館は西側の平坦地とみられるが、現在は正慶庵の境内となっている。伝承はなく明確にできないが、前ノ在家館、中ノ在家館に関連する物見台もしくは烽台などの施設の一部と推測したい。

(手塚 孝)



薬師山館略測図

1994.12

所在地 米沢市大字李山字前ノ在家

築城者 不明

築城時期 室町期

史 料 『伊達御殿せん帳』中、上長井御殿せん帳

『伊達種宗安緒状案』

参考文献 『南原のあゆみ』

#### 概 要

米沢市の南方約 6.5km、松川上流の西側に連なる李山々後の北端に位置し、標高 430m の山頂を中心に三方の尾根に沿って南北 310m、東西 420m の範囲に分布している。山頂から山麓までの比高差は 60m で、造構は曲輪群の構成から東曲輪群と西曲輪群にそれぞれ大別される。

東の曲輪群は、山頂の階段状テラスを主郭とするもので、東斜面には 4 条の帯曲輪を階段状に配列、西側には一条の帯曲輪を配し、西曲輪群へ通じる尾根を掘切で切断している。

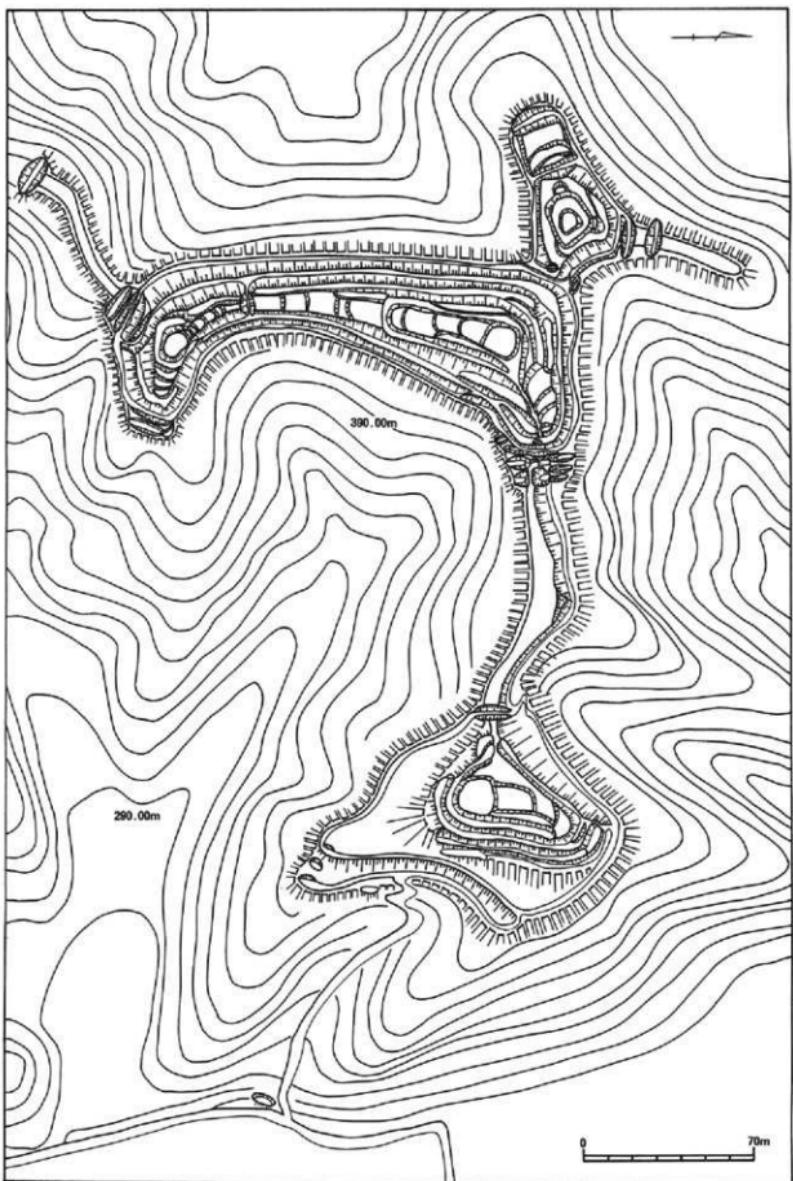
西の曲輪群は、南北の尾根を利用したテラス状の連続腰曲輪を主体とし、主郭とみられる北端の方形テラスから東へ弯曲する尾根上に不整の腰曲輪を配し、一方、南の弯曲部には、隋円形のテラスを中心にして東へ 4 段、西へ 5 段の小刻みの連続腰曲輪が構成され、北への尾根続きを掘切で区画している。また、西の曲輪群の外周には 2 条～3 条の帯曲輪群を配し、東へ続く尾根に 6 本の短い堀切を配列、南東の張り出し部に堀切 1 本、南西へのびる尾根に 2 本の堀切を配し、さらに 60m 隔てた尾根統きを一本の堀切で区切っている。北端から西へ張り出した二段の尾根には、それぞれ 2 本の堀切を配し、その中央部に塹が認められる。

塹は方形状を呈す中央部に位置する。このような形態は、当市田沢地区の戸長里館に類似するものであり、信仰的な要素の強い造構と考えられる。塹等を有す山城は、この他にも認められ、館山城、李山館が代表として上げられる。

この館跡の周辺には、南方 350m に中ノ在家館跡、同方 650m に大洞館跡、北方 1km に糠山館跡、並北西 500m に諏訪館跡、西方 500m に薬師山館跡、同方 900m に織返館跡、松川を隔てた東方 1.2km に赤崩山館跡が位置する。前ノ在家館跡の東曲輪（通称水走山）の東麓に 1 基の龜腹式家形板碑が存在し、前ノ在家の旧家安部氏が代々供養しているが必ずしも館主の供養碑とは断定し難い。

伊達文書に散見する安部源兵衛は本館跡の西麓の市布とあり、むしろ薬師山館に該当する。伝承には、北麓に居館跡を残した卯の花対馬や、和地和泉守などを館主に結びつける説もあるが、何れも信憑性に乏しい。

（橋爪 健）



前の在城跡測図 (作図者 菊地政信)

1990.9

なか ざいがだて  
**中ノ在家館**

202-177

所在地 米沢市大字李山字中ノ在家

築城者 不明

築城時期 室町期

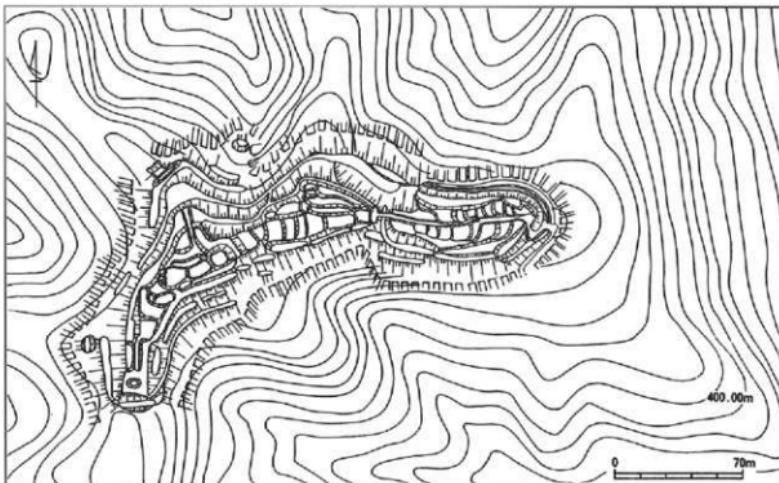
史 料 『晴宗公采地賜録』『伊達世臣家譜録』

参考文献 『南原のあゆみ』

**概 要**

米沢市の南方約7km、松川上流の西側に連なる李山の山腹に位置し、標高450mの山頂を中心にして方の尾根を利用し、東西280m、南北160mの範囲に分布している。山頂から山麓までの比高差は90m、東西の尾根を利用した階段状の連続腰曲輪を主体とし、東端に虎口を有し、北側の東よりの斜面に一条の土塁と、横堀と、帯曲輪を配し、西よりの急斜面には二条の帯曲輪を配している。南へ延びる尾根に沿って多様な腰曲輪を配し、南端を一条の掘切で区切っている。山頂から北へ張り出した斜面には二段のテラス状腰曲輪を配し、一条の土塁を設け、空堀で区画している。この館跡の周辺には、北方350mに前ノ在家館、同方1.5kmに難山館、北北西1kmに諏訪館、北西700mに薬師山館跡、同方1kmに織返館跡が、松川を隔て東方1.2kmに赤崩山館跡位置する。本館跡に関わる文献、資料等は皆無に等しいが、山麓の松川河岸段丘上には前ノ在家、中ノ在家、銭子屋敷、丹南屋敷など中世聚落の地名が多く、南南東300mに伊達家の家臣、但木左馬助の居館といわれる大洞館跡があり、現在、曹洞宗宝善寺境内の裏山には左馬助の供養碑といわれる南原地区最大の板碑が現存している。左馬助は、伊達文書で大洞と丹南を公采されており、晩年、伊達政宗が岩手山へ移封の際に供従することなく大洞館で没したと伝えられている。左馬助の城跡が確認されていないだけに中ノ在家館との関連を推測することは困難である。

(鶴爪 健)



中ノ在家館略測図

(作図者 菊地政信)

1990.8

## さじせんたて 佐氏泉館

202-178

所在地 米沢市駅前三丁目字佐氏泉

築城時期 不明

### 概 要

米沢市の北西300mに位置し、西側600mに松川、東側1kmには羽黒川が流れている。年代を示す伝承としては、八木橋館同様に、奥州藤原の軍勢として源頼朝の率いる鎌倉勢と戦った佐藤元治の弟、佐藤政信が米沢の八木橋に館を構え、南へ1.5kmに佐藤一族の別邸で「佐藤泉水」と称される館があったと言い伝えられている。佐藤泉水から佐藤氏の泉ということで、「佐氏泉」と言われるようになり、現在は「佐氏泉公園」となって市民に親しまれている。

(佐藤弘則)



1994.12

## かみやちだて 上谷地館（安部館）

202-179

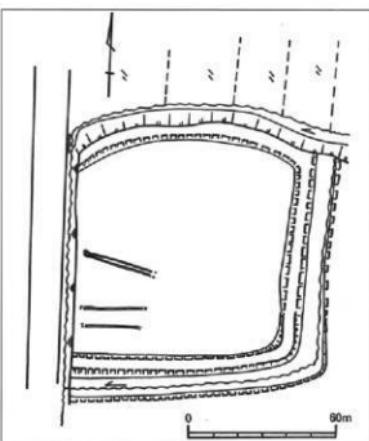
所在地 米沢市大字川井字上谷地 535他

築城者（安倍頼母）

参考文献『上郷郷土史』

### 概 要

館は本市の東方約3km、上郷地区に位置し、西側を県道、川井、金谷線が南北に走る。この県道により、館の西方部が若干、削平を受けている。土塁、堀等も煙の開墾によって破壊され東南隅の一部だけが現存している。土塁は消滅しているが、字切図や現況の地形、伝承等から館の規模を復元することは可能であり図示すると土塁は、上場で5m、掘の幅は10mを測る。平成7年の南西部の発掘調査によると、道路と溝を確認している。遺物は陶器片が数十点だけである。出土した遺物は中世陶器に類するものであり、本館の築城年代と考えられる。館は前述した事項から推測して、一町四方（約100m前後）の単郭方形館であろう。なお西側の土塁の有無については不明であり、「コ」の字形の形状も推測される。伝承としては、二つある。藤原秀郷の一族の子孫説と茂庭周辺の領主安部頼母説である。遺物からすれば安部頼母説の伊達時代が妥当であろう。父子が別々に住む伊達家の習わしに従い、父は川井館に住んでいたと伝えられている。川井館の場所は川井山（山城）の周辺と想定される。



上谷地館（安部館）略測図

1994.10

(菊地政信)

所在地 米沢市大字長手字馬ノ越

築城時期 室町期

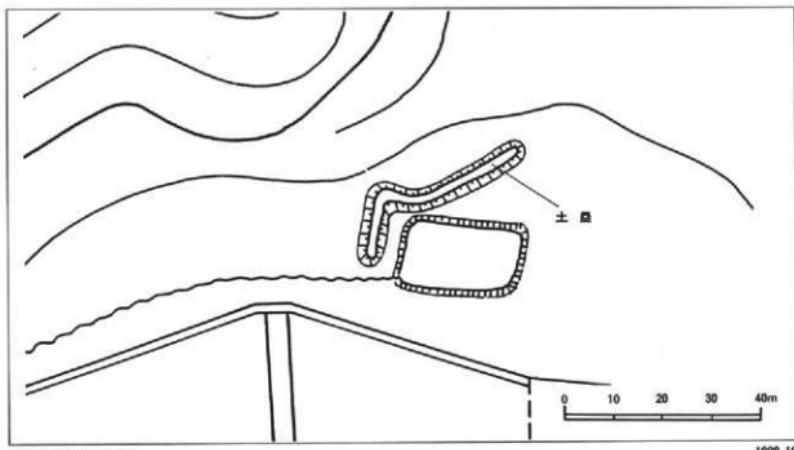
## 概 要

米沢市街地東方 4.5km の奥羽山脈から延びた山麓に位置し、標高 414m の通称「木和田山」の西部に存在している平城跡と推測される。東側の小山には祠が建っており、西側には天王川が南北に流れている。館跡の規模は、東西 30m、南北 35m の土塁が「く」字状に配されている。

土塁の大きさは、長さ約 45m、幅約 5m で、土塁に隣接して、縱の長さ 25m、横の長さ 16m を有する長方形の池が存在する。土塁は池の一角を巻くようにして L 字形に曲がり、端部は池より離れるよう延伸している。平城の周辺には、約 300m 離れた西山麓に木和田館跡、北側 1.5km に長手館跡、北側 1km に古峰神社館跡が位置している。

これらの館跡と、同館跡の位置関係については不明であり、山麓に位地する平城からすると、山城との因果関係が考えられるが、山城の構造は確認出来なかった。また、館跡に関する年代を示す伝承や文献等は認められないが、木和田館跡の存在や同様の形態を示す万世地区的稻荷山館等から推測すれば室町時代に位置するものと見られる。

(佐藤弘則)



馬ノ越道館略測図

1988.10

所在地 米沢市大字木和田字中曾根

築城時期 平安期

史料 米沢市埋蔵文化財調査報告書 第20号「木和田館跡」(1987)

参考文献 「米沢盆地における中世考古学の諸問題」『猿風』17号

### 概要

米沢市の東部、奥羽山脈から延びる山麓で、標高270m～290mの横山から盛興院の裏山にかけて「コ」の字状にのびる丘陵の接点に当り、西に梓川(天王川)が流れている。館跡は、横山山頂から北方向に突出した尾根と尾根の谷間(山麓間)を利用して構築しているもので、所謂「山奇式」の形態をなす。

この城跡は、米沢市が昭和61年に発掘調査を実地して確認している。これによれば、主軸長をほぼ南北方向に置く館は、土塁と濠跡からなるもので、東土塁の一端にブリッヂ(虎口)を有する他は土塁、濠跡とも全周し、所謂「単郭」式形態をなす。現地形をそのまま利用している関係上、西に面した土塁は尾根に沿って斜位に進行することで、平面の形状は台形プランを示している。館跡の保存状況は良好であり、北に面した土塁の一部が最近の杉伐採・運搬の際に削平した以外は明確に残っている。

木和田地区の南丘陵となる横山の北斜面から山麓にかけての緩斜面を整地して土塁を方形に巡らして構築しており、土塁の幅は西面では最も広く、5.2m～7.5m、次いで南面の5.2m～6.9m、北面が3.9m～5.2m、東面が3.8m～5.8m、土塁の高さは西面で0.9m～2.2m、南面で0.6m～1.2m、東面で0.9m～1.4mとなっている。濠跡は土塁の外部に付随してめぐり、西面と東面の濠は丘陵山麓に沿って掘り込まれていることもあるて底面が狭い「V」字状を有する薬研堀。南面及び北面の濠は底面が広い箱堀で、ことに南面に関しては一部を深く掘り下げた小規模な泡状を呈するところもある。館全体が南から北、西から東に傾斜していることもあって濠の深さは、北面22cm～51cm、南面21cm～110cm、西面110cm～125cm、東面43cm～95cmで、濠幅は北面が3.1m～4.2m、南面4.1m～5.5m、西面2.9m～6.9m、東面2.5m～3.5mとなっており、深さ、濠幅とも西面と南面が明確である。

平城の周辺には、北側1kmに小峰神社館跡、同じく1.8kmに長手館跡、北西側2kmに川井館跡、熊野山館跡、上郷東屋敷館跡があり、南西側1.5kmに堂森山館跡がある。

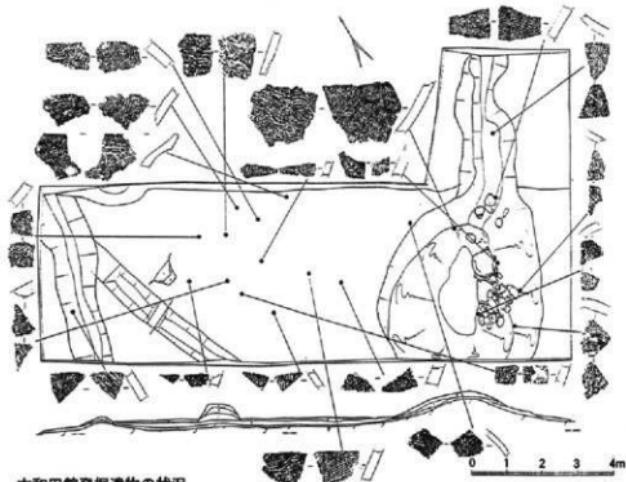
発掘調査により検出された遺物としては甕形を主体とした須恵器系土器と珠州系土器、土塙が併せて認められ、12世紀後半から末期に位置付けられる。また、館主として半町四方の館跡を考えれば、数町程度の所領と僅かな郎党を従えた小地主である名主的武士層の館跡と推測出来る。同じ様な館跡は川西町吉田の津島家屋敷、同じく下奥田飛尻坂館らがある。

(佐藤弘則)



木和田館略測図

0 5 10 15 20m



木和田館発掘遺物の状況

1986.10

どうもりやまたて  
堂森山館 202-182

所在地 米沢市万世町堂森

築城時期 鎌倉期

概 要

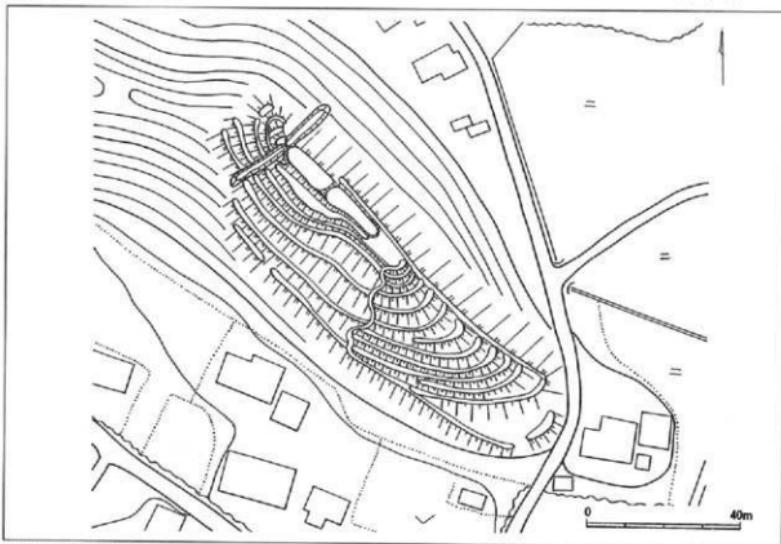
標高 311.2m の堂森山から東側に伸びた舌状丘陵の先端部に位置するもので、通称「御月見山」の尾根全体に分布している。館跡は、東西 110m、南北 40m を測り、南の緩やかな斜面に 2m~3m 前後の帯曲輪を 2m~5m の間隔で山麓から尾根に沿って階段状に多様し、左右の尾根付近で湾曲する所を特徴とし、西側に一条の堀切と縄掘を併用している。北側は一条の帯曲輪を尾根に沿って配し、下方は急勾配の人工斜面で整形している。主郭は、尾根の頂上部で長径 15m、短径 5m を有する不整の橢円形状のテラスと考えられ、左右に同様なテラスを配する所を特徴としている。

こういった帯曲輪を多様する山城の形態は、本館跡から南方約 2km の早坂山館に類似し、平地式の平城から山城に以降した段階の初期的な山城形態と考えられる。

堂森山の南山麓には長井時広が創建したと伝えられる出羽善光寺が存在しており、尼寺跡や中世の修法壇に係りを有する地名が堂森山周辺に多数存在している。本堂内には県の重要文化財である見返阿弥陀仏と長井時広夫婦の座象が安置されている。また、山寺立石寺には建久 2 年の普光寺での写経した経文が残っており、当時の出羽善光寺の隆盛が窺われるものである。

こういった背景から想定すれば、堂森山館跡と善光寺は密接な関係をなしていた可能性も指摘される。山城に係る伝承はないが、付近には我妻館、原田館、金谷館が隣接し、万世地区での中世文化的中心的な地域であったものとみられる。

(手塚 孝)



堂森山館略測図

1994.12

所在地 米沢市万世町桑山字早坂山

築城者 不明

築城時期 南北朝期

史料 『米沢地名選』

参考文献 「米沢盆地における中世考古学の諸問題」『懐風17号』

## 概要

本市街地の東部に位置する万世町桑山、及び南方地区関根の両地区にまたがる、標高502mの早坂山頂に所在する。館の西方直下には鷺城があり、本館と鷺城をセットで考える意見もある。従って概要（解説文）も早坂山館と鷺城をセットで述べる。

館は早坂山山頂一帯と西に延びる尾根と谷間にかけての広範囲に立地している。（鷺城の略測図を参照）山頂の早坂山館遺構は帶曲輪群と階段状テラスで構成する。虎口は尾根の西側に配置し東端部に細切を設置、この細切を境として、遺構群は終わる。

本城館に係わる、文化元年（1804）の米沢地名選によれば次の様に書かれている。

○土肥館、東山上村にあり、伊達氏の土肥備中守。

○戸板山館、伊達政宗（貞山）家臣、大津土佐守居る。

○土肥單館、東山上村にあり、土肥多中守住す。鷺ヶ城と伝う。

○鷺ヶ城、鷺ヶ峰の麓にあり、住民詳ならず。

○上長井東山上村、戸ノ内鷺館は小栗川泥藩の壇なり。

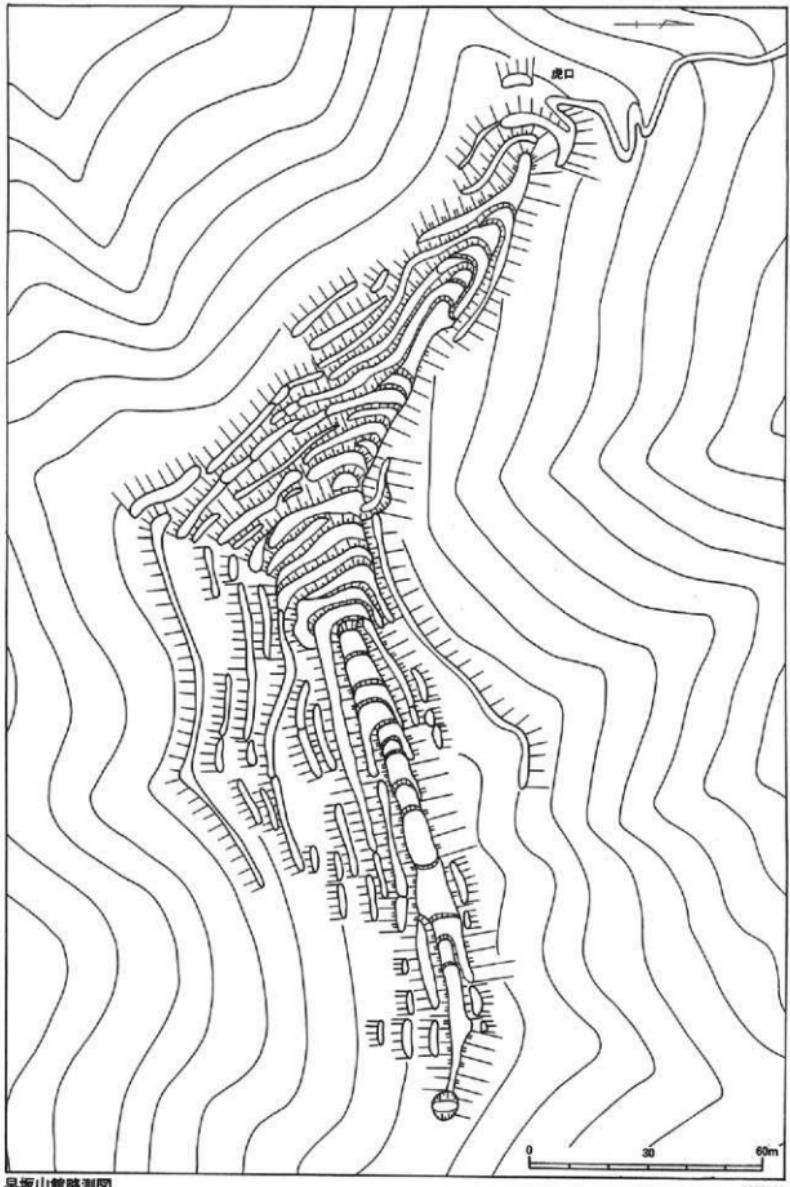
○白旗館、東山上村にあり、小栗川泥藩居る。是より鷺館に移ると伝う。

この様に早坂山館を含む鷺城は、(1)戸板山館、(2)土肥館、(3)大津土佐守、(4)鷺ヶ城、(5)鷺館の五通りの名称がある。城主は、(1)土肥備中守、(2)土肥單多備中守、(3)大津土佐守、(4)小栗川泥藩の4名が記されている。この中で土肥館と土肥單館、鷺ヶ城と鷺館は同じ名称と理解され、同じく城主の土肥備中守と土肥多備中守も同一を意味するものと考えられる。従って、城の名称を年代順に列挙すれば、(1)戸板山館→(2)土肥單館→鷺ヶ城が成立する。調査委員の手塚氏はこの変容を遺構グループと密接に係わりを有するものと推測し、初期の城郭は山頂の早坂山を山城として根小屋を谷間の一角に置いたと考え、これが戸板山館と城主大津土佐守であり、初期の山城は著しく高い山頂を選定することとも共通すると述べている。次に山城が中間層に掛る時期が土肥及び土肥單館で、標高380mの尾根に山城を配し、南側に大規模の根小屋を形成した。これが土肥及び土肥多備中守の時期に当たる。

そして最後に鷺ヶ城であると説明している。土肥多の時代に北側の根小屋の一部を構築していたものを小栗川泥藩によって、山城の改良と左右対称の根小屋として確立したものと考え、全体の形態から早坂山館を中心とした山城を鷺の頭部、下方の山城が胴部、左右の根小屋を羽とみなし、鷺ヶ城の名称が命名されたものと思われる。と委員は述べている。

問題点として、鷺城なるものが、時代的変遷の中で成立したものか、ある程度の廃城期間が存在したものかは、今後の課題としている。意見としては後者の可能性が高いものとしている。私も同感である。早坂山館は本市において、早い時期に位置す、山城のひとつであろう。

(菊地政信)



早坂山館路測図

1989.11

所在地 米沢市万世町堂森字野中

築城者 不明

築城時期 不明

#### 概要

米沢市街地の北東約5km八幡原工業団地西側、標高311.2m堂森山南東200mに位置する。主軸方向をやや東に傾いた方形館跡である。この館跡付近一帯は、米沢市内でも縄文時代を含む有数の遺跡密集地であり、館跡の東100mには原田館、西北200mには堂森山館などの中世の遺跡が隣接して分布している。館跡は昭和60年に確認されたもので、我妻氏の宅地内に存在するところから我妻館と命名している。大部分は市道や田畠の耕作によって破壊されているが、我妻家の宅地及び田畠を囲むように、土塁と堀が長方形に巡っており、南側と南西側の一帯が良好に残存している。

米沢市教育委員会では、平成6年度に宅地造成に係る緊急発掘調査を実施している。調査は館跡の約3分の1を対象とし、調査の結果館跡の形状は長方形を有する複郭式の平城であった。主軸方向を東西に呈した東西115m、南北85mの長方形を有し、中心に主郭、左右に副郭を配した特異な平城で、堀と土塁によって構成している。主郭は、南北73m、東西50mの長方形を呈し、各東西の長方形の曲輪は二の丸に相当する空間と考えられる。

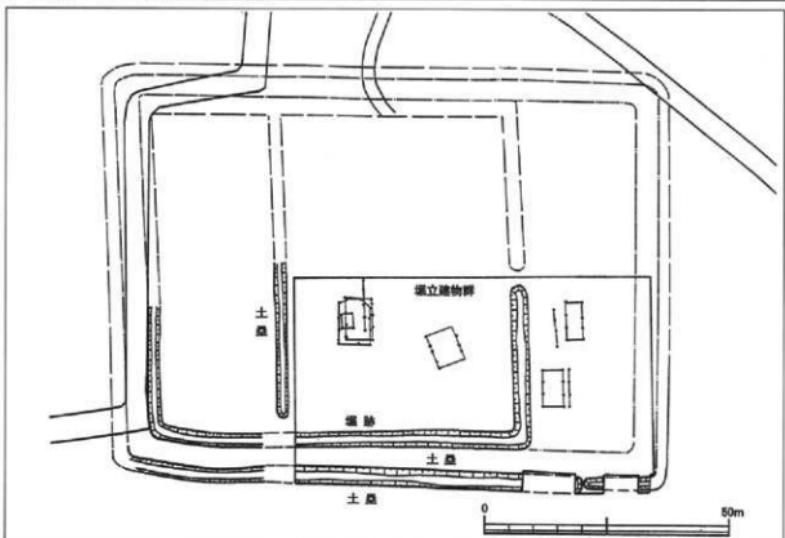
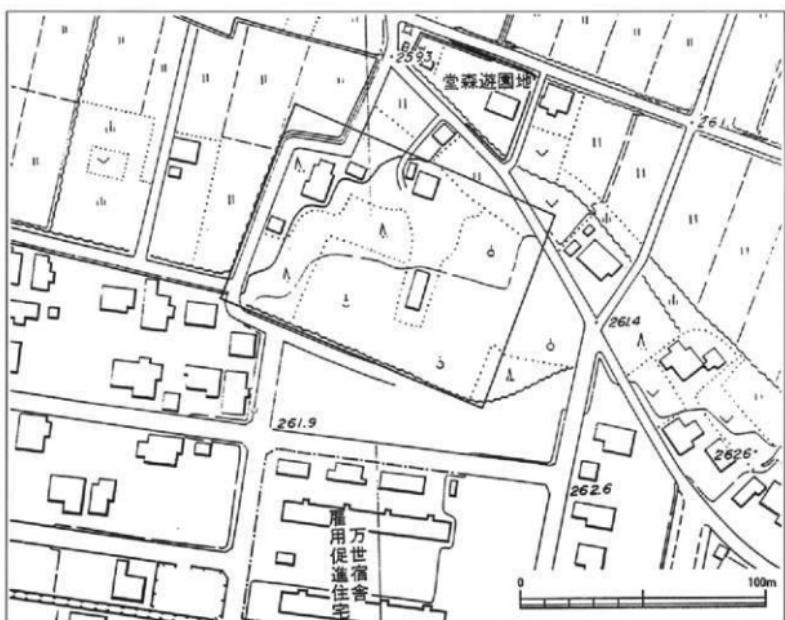
検出された遺構は、出土した遺構の切り合い関係から、三時期に大別される。第一に中世の館跡に伴うもので、土塁、堀跡をはじめとする掘立建物跡7棟を含む柱穴群百数基、土壙2基がある。第二に旧我妻家等に関連する江戸時代の遺構群で、流し場状遺構をはじめ、土壙十数基、溝状遺構8基と井戸跡などがある。第三には、明治以降から現代にかけての遺構でゴミ捨て穴、暗渠跡、ホップの支柱痕等が検出されている。ここでは、中世の遺構についてのみ述べる。

土塁は、内堀と外堀の間に配置されているもので、現況での幅2.8~3.0m、高さ1.5m前後を有している。現存している状況から判断すれば、幅約3.6m(2間)、高さ1.8m(1間)前後を有していたものと推測される。堀の深さは、50~70cm、2~3mの幅を保ち、土層の分析から水堀であったものと予測される。土塁に伴う堀跡内には、一定の間隔に沿って堀を分断する障子堀の痕跡が確認された。掘立建物跡は、後世の耕作などによって破壊されているが7棟は確認された。他は建物として構成できない柱穴のみである。長軸平行は南北方向を呈するものがほとんどで、東西1・3間(7~14尺)、南北1・3~5間(7~10尺)を測る。

出土した遺物には、陶磁器・土器・木製品・昆虫遺体等がある。この中で注目される遺物には、土鍋片(内耳取手)がある。この土鍋は、口縁部内側付近に3箇の耳状の取手が成形されたもので、現在のところ置縣地方のみの出土であり、本館跡は15世紀前後の範疇と判断される。

隣接する堂森山館と原田館との年代は、その形態からそれぞれ15・16世紀に位置するものと考えられており、堂森山館は我妻館(居跡)に伴う山城と推測され、密接な関連を有していたものと指摘される。

(月山隆弘)



我妻館平面図

1988

所在地 米沢市万世町堂森字原田

築城時期 戦国期

### 概 要

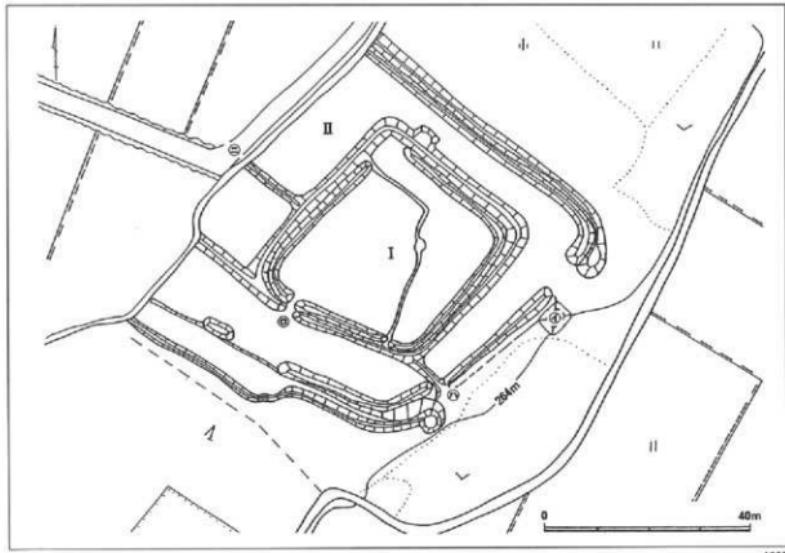
堂森山の南東方向300mの平地に存在する。現状は杉林で、地元では伊達家臣の原田甲斐の居館と伝えられている。館跡は、堀と土塁で構築された本丸と二の丸で構成されており、南北60m、東西62mの規模をもつ。主郭となる本丸は、幅1.8m~3mの空堀と幅2m、高さ1m前後の低い土塁で方形に配され、南北40m、東西35mを有し、南西に土橋を伴った虎口をもつ。

二の丸に当る空堀は、北東部の大手から内側に土塁を配置するもので、北側から6m、南側が8m~10m、東側が6m、西に面した空間を11mとして本丸を周囲して囲っている。西側に関しては、開田によって堀の一部が消滅しているが、現在の道路部分が堀に相当するものとみられる。

さらに、西側の二の丸(ニ)と東側の二の丸(ヘ)には本丸に接続する1.5mの溝が付随しており、排水溝的な施設と考えられる。大手口は北東部に当り、幅4m×5m、高さ2mの土壇状の高まりは物見台と推測する。

当地、米沢周辺で本丸と二の丸が明確に区画されている城としては、米沢城跡、我妻館、中川原館の3箇所が発見されている。原田館も小規模ではあるが、構造的には所謂「戦国末期」の二重構造の平城に分類されるものである。また、本館の南東約300mには、初期二重構造となる我妻館も存在していることから関連性が指摘される。時期的には戦国末期と推測されるが、伝承の原田甲斐氏とのつながりは文献的にも乏しく実証するには至らない。

(手塚 孝)



原田館略測図

1968

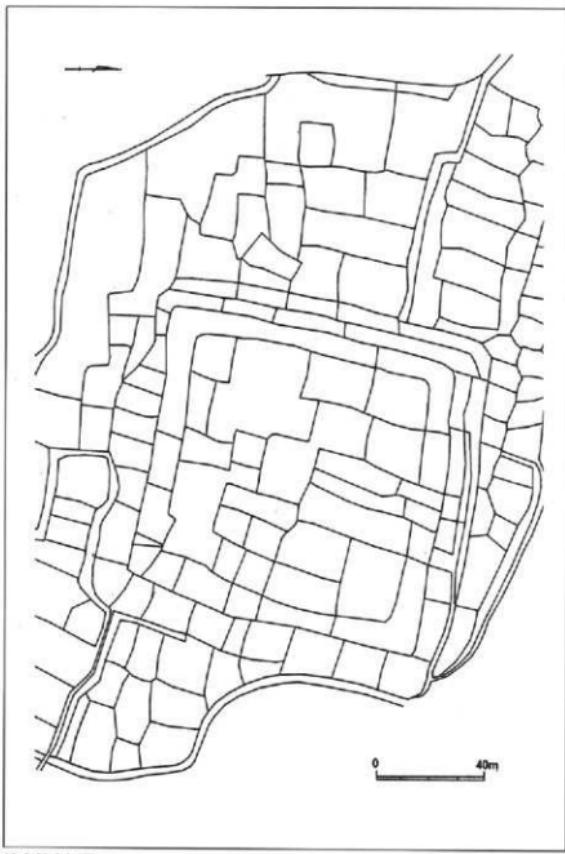
所在地 米沢市万世町堂森

築城時期 鎌倉期

#### 概 要

県指定無形文化財の「桙山獅子躰り」の奉納神社である桙神社の北方60mの水田地内に存在する。昭和40年頃の圃場整備によって消滅しているが、字切図には土塁と堀が明確に把握することが可能であり、南北130m、東西135mと推測することができる。堀幅は12m、土塁幅は10mと算定され、地元の情報とも一致する。従って、堀を除く土塁内の長さは一町四方と推測され、単郭式の平城としては米沢市内で最大となる。伝承はなく、年代的には明確にできないが、館の北側には門前、東方約100mには14世紀頃に位置する10m~20mの方形土塁が10基存在しており、館との関連性が考慮される。

(手塚 孝)



桙山館字切図

1986.7

所在地 米沢市万世町桙山字福荷山

築城者 長井氏の家臣 熊板利衛門（伝承）

築城時期 鎌倉期

#### 概 要

本市街地の東南約5.5km、万世地区に位置する。館がある場所は国道13号線の工事及び改良工事によって破壊され館の中心部は道路であり、工事の際に大形状の自然石が出土したと言う。これらの自然石は建物の礎石と推測される。

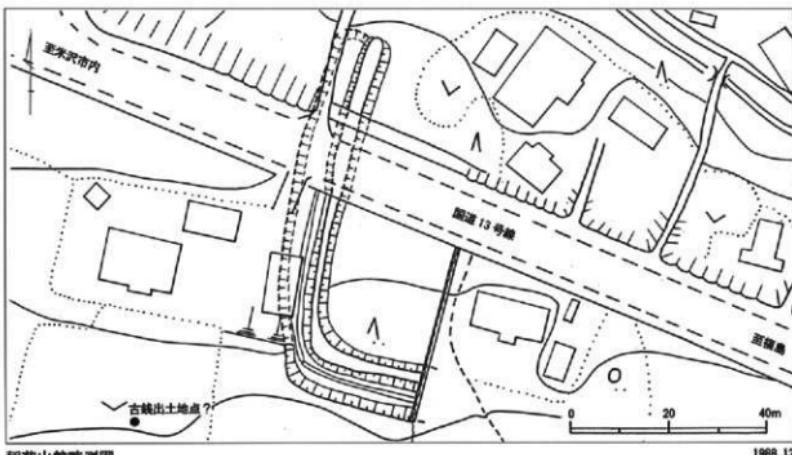
館は土塁が片直角に現存し、土塁の外側には堀が付随しているとみられる。堀は今も水が流れている。北西端部に現存する土塁から復元することが可能であり、図に示した。

館の規模は一辺70mの片直角形の形態と想定したい。

注目したいのは本館の南西、約10m地点で埋銭造構が偶然に発見された。明治44年のことで、箕に一杯ぐらいと聞く。遺物の大半は戦時中の金物提出令により消滅したが数十枚残っており、宋銭が多い。

発見者は館の地主である我妻清一氏の祖母で、桑の根を掘っている最中にであり、容器等（たとえば、陶器の器）はおぼえていないときいている。伝承では伊達氏の置賜侵入の際に最後まで戦かったが敗れ、廃城になってしまったとのことである。

（菊地政信）



福荷山館略測図

ばんせいいたでやまじょう  
万世館山城 202-188

所在地 米沢市万世町梓山字館山

築城者 不明

築城時期 南北朝期

概 要

本市街地約 6km の東南部に位置する。万世町に所在し山城の北側直下を国道 13 号線が東西に走る。

また西方部の山麓には稻荷山館がある。

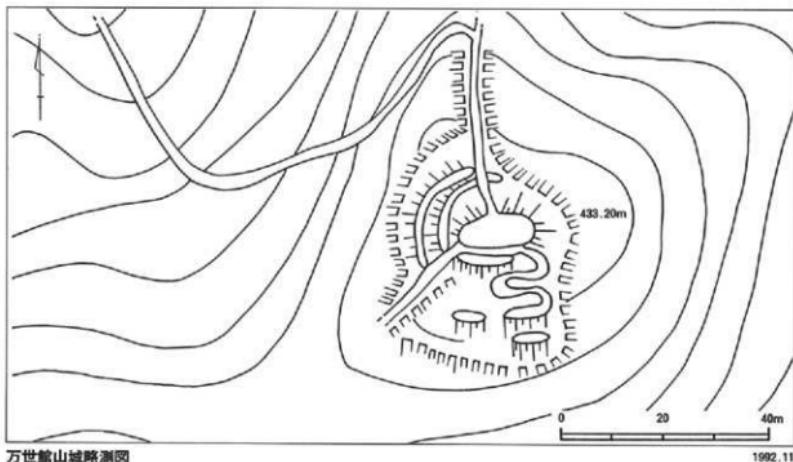
山城の形態は、標高 433.20m の山頂部に橢円形状の曲輪を配し、北西部面に 2 条の帯曲輪、南方斜面にも 3 箇所の帯曲輪を配置しただけに簡素な山城である。平地から沢合を通過して登る道路と尾根を利用した道路を配する。

山頂部の曲輪は東西 15m、南北 7m を測り平坦である。山頂からは万世北東地区を一望できる。北方部に配した二重の帯曲輪は幅が約 2m で、2 箇所の道路を接続するように配置されている。

南方斜面に配置した「S」字状の道路を途中で切れており、どういう意味で構築されたのか理解に苦しむ遺構である。この遺構の直下にも、帯曲輪を持つ。

前述した稻荷山館や、北方直下に位置する梓山との、関係が深い山城と考えられるが、伝承等は残っていない。字名には、「館山」と記されている。

(菊地政信)



万世館山城略測図

1992.11

所在地 米沢市大字三沢字三沢

築城者 富沢飛驒守

築城時期 戦国期

史料 米沢古誌類纂

参考文献 『山上郷土史』『置賜文化第2号』

#### 概要

館が所在する山上三沢地区は、市街地東南方向7kmに位置し館が存在する西方には羽黒川が北流し、対岸の南西には蛇ノ館がある。さらに三沢館と同じ山稜にある鷹城が北西方向の下流に位置している。この地区に城館跡が点在するのは、板谷街道や明神峠街道の出入り口であり、歴代の城主が要所として認識していたものと考えたい。

館は南方に突き出す舌状の山頂部に構築している。現在、この山城の南斜面一帯が蘿王権現の境内になっている。この神社の建立により、この箇所の山城を構成する遺構の一部が削平を受けている。

また、最近（平成元年）では木材運搬用道路造成により、無渡にも山肌が削られ館の約3分の1が消滅した現況である。略測図は削平以前に作成したものである。

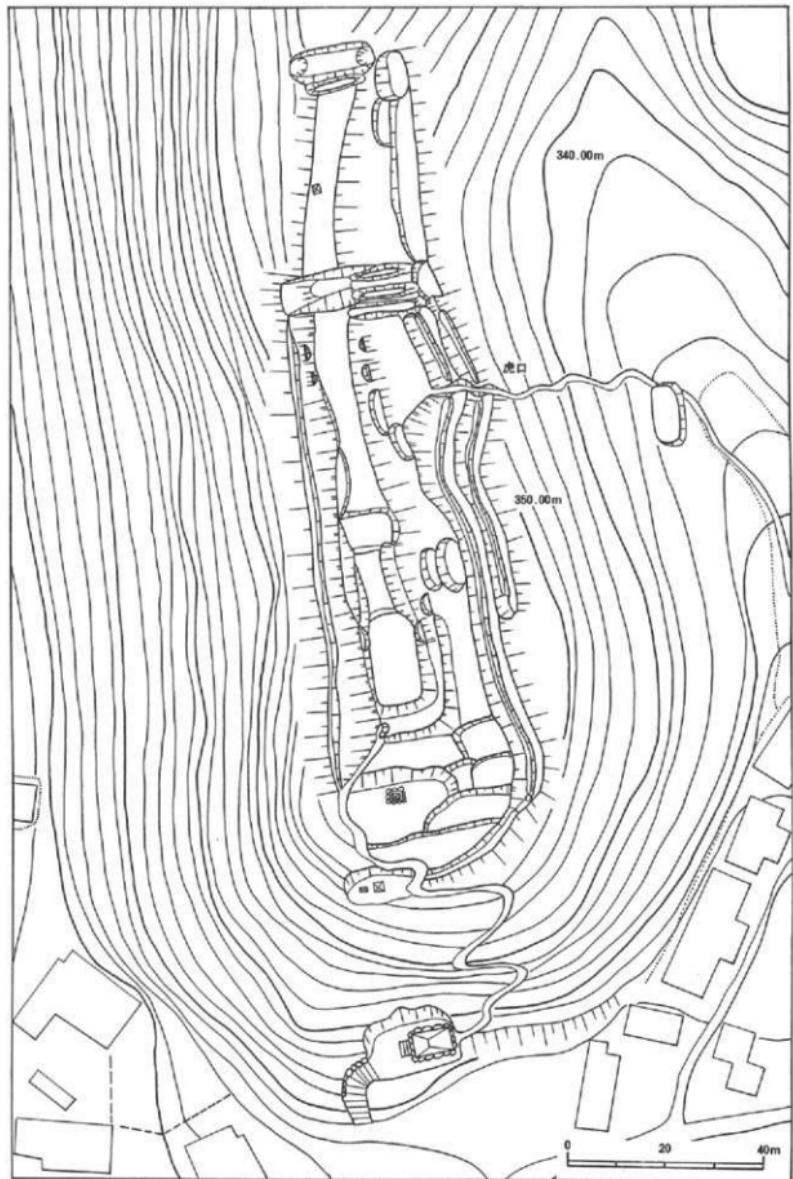
三沢館の構成は、山頂の平坦面を利用して構築し、北側の掘切によって尾根を遮断して独立丘陵を作りだしている。虎口は東方の沢合を登り詰めた箇所から斜面へと通じる道路が二条の畝状横堀と交差する地点に配置している。

曲輪は、山頂の平坦面に3箇所及び南斜面に8箇所認められる。主曲輪は最南端の箇所と想定され南北17m、東西10mの広さを有す。西斜面には、一条の帶曲輪があり、通路として利用したものであろう。この館がある山頂直下には、現在でも民家が点在している。伝承によると、我彦藤左エ門の門前に城門があって、内側に家来達が住み大将は「戸の入」と言う小高い台地に住館を構えていたと言う。現地を踏査したが、この場所を特定することはできなかった。また、虎口直下の沢合、平坦面な箇所には根小屋があったと言う。現在も方形形状に区画された平坦面があり、これらの箇所が根小屋に相当するものと考えられる。本市の北東部、上郷地区にある戸塚山館と同様な築城形態を呈す、本館は「三沢型」形態として置賜地方の山城形態の分類の標準になっている。特徴は尾根を堀切で分断して、斜面には多条の畝状横堀を配する。規模も最長で100m前後で、ほぼ同様である。年代的には、天正10年前後、伊達輝宗期が盛行と推定される。

本館が所在する地区は米沢盆地の最南端にあたり、この地区を境として、現在のところ山城は発見されていない。前述した様に、この地区で街道が二通りに別れる。板谷街道と明神峠街道である。前者は上杉時代の主要街道として利用されてきた。現在の真羽本線に沿って開かれた街道で、宿場や関所が配されていた。後者は、現在、水産ダムの湖底に沈んだ街道であり、刈安川に沿って開かれた街道である。明神峠に至る街道筋には、堀切、金カクシ、政宗清水、等の地名がある。堀切は地元では、「ホッキリ」と発音し現地には、横堀が現存する。

三沢館の廃城は豊臣秀吉による真羽仕置（天正19年）が上げられる。城主、伊達政宗が岩手山へ移転させられた事により、家臣の富沢氏も同行したものと考えられる。

（菊地政信）



三沢館略測図

1989.8

鷺城（とよたて・といたらやまとて・どひたんたて）202-190

所在地 米沢市大字三沢字根戸屋

築城時期 戦国期

史料 『米沢地名選』文化元年（1804）

参考文献 「米沢盆地における中世考古学の諸問題」『懐風』17号

概要

本館跡は、標高 502m の早坂山山頂一帯と西に延びる舌状の尾根、さらにはその尾根の左右の谷間にかけての南北 1km、東西 0.83km の範囲に分布している。

造構は、曲輪群の構成から 4 のグループに大別される。第 1 の曲輪群は、山頂を中心とした階段状テラスを主要曲輪とし、南側の緩斜面を尾根に沿って階段状帶曲輪を多様しているのが特徴で、第 1 山城とした。

大手口は第 2 山城から延びており、西端には樹形虎口、東端には 1 条の堀切を有し、全長が 280m、山頂付近の最大幅で 110m を測る。山頂から山麓までの比高差は 221m を示している。

第 2 の曲輪群は、第 2 山城と分類したものであり、第 1 山城から西側に張出した尾根を利用して山城を構築するもので、1 条の緩堀で区画し、西先端の 3 方の稜線から山頂付近を中心にして腰曲輪とテラスで構成する重郭型の山城である。主郭は山頂の長軸 70m、短径 30m を有する菱形に整形した平坦面であり、南北 320m、東西 220m の規模をなす。

第 3 の曲輪群は、第 2 山城の北側の谷間に沿って構築された第 1 居館で、30m 前後の方形テラスを段々畠状に配置するのを特徴としている。主軸長は東西にあり、約 400m をなし、最大幅 120m を有した南端から山城に通ずる道路がみられ、西端に大手口が存在する。

第 4 の曲輪群（第 2 居館）は、第 2 山城の南谷間に配置された居館跡で、第 1 居館と同様に方形状のテラスを多様している。主軸長は 430m、最大幅が 150m を測る。

文化元年の米沢地名選によれば、1. 土肥館（土肥備中守）、2. 戸板山館（大津土佐守）、3. 土肥單館（土肥多喜中守）、4. 鶴ヶ城（不詳）、5. 内鷺城（子柴川泥幡）となるが、明確にできない。この鷺城は、曲輪群の形態から想定すると初期形態として、第 1 山城の単独機能。第 1 山城と第 1 居館の組合せ機能。同じく第 2 居館との組合せ機能。

次に第 1 山城を放棄した段階の形態として第 2 山城と第 1 居館との組合せ機能。同じく第 2 居館との組合せ機能。

最終形態として第 2 山城と第 1、2 居館の並立機能。もしくは、第 1、2 居館のいずれかを廃棄した機能。さらには、第 1、2 の山城と第 1、2 居館の共存機能などが想定される。ただし、鷺城なるものが時代的変遷のなかで成立したものか、ある程度の廃城期間を繰り返した中において成立したものかの二通りが推測されるが断定はできない。

（菊地政信）



董城略測圖

1990.11

所在地 米沢市万世町金谷

築城時期 南北朝期

#### 概 要

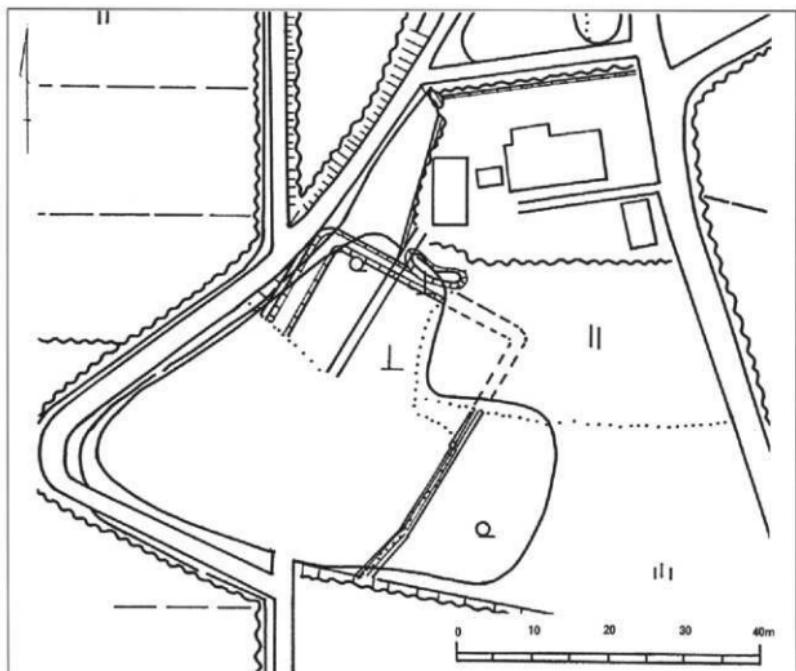
米沢市街地 4km南東側の羽黒川東部に存在するもので、館跡の両側及び西側斜面を河岸段丘を利用して構築されている。

城館規模としては南北 60m、東西 70m に及ぶ。遺構の大半は遊園地や、宅地によって破壊されており、土塁の一部が残っているにすぎない。存在する土塁は北側に L 字状をなし、幅 3.5m、長さ 30m を測る。東側に幅 1m で長さ 25m の土塁が存在することから、40m × 30m の長方形の曲輪が存在したと推測される。また、この曲輪の北側に土塁の一部とみられる段さ状の部分があることから、この場所にも曲輪が存在したと思われる。

本館の周辺には、北側 700m に堂森山館、隣接して我妻館、南側 1.5km には早坂山館が位置している。

また、年代を示す伝承や、文献等は認められない。

(佐藤弘則)



金谷館推測図

1989.10

みさわまえだしまむだて  
**三沢前田下館**

202-192

所在地 米沢市大字三沢字前田下

築城者 富沢飛驒守

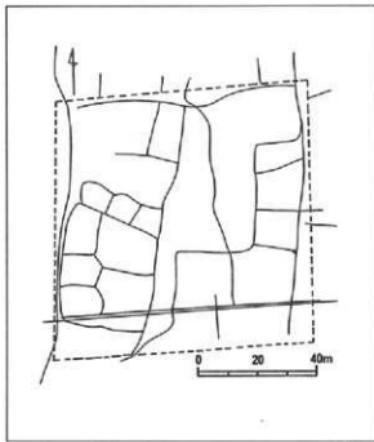
築城時期 戦国期

参考文献 『山上郷土史』

概 要

市街地の南東、山上地区三沢に位置し、三沢山城の南西直下に広がる羽黒川の河岸段丘に館を構築している。現在は水田、畑、宅地、道路であり、当地区的入り口にあたる箇所でもあり、東西、南北の道路が交差する地点でもある。

三沢館と密接な関係を有する館と推測され、東西 88m、南北 90m の方形を呈す形態である。堀や土塁は確認されていない。伝承



三沢前田下館推測図

1989.12

としては三沢館の城主家臣団の居住地であったと言う。

(菊地政信)

せきねなかやしき  
**関根中屋敷（西館）**

202-193

所在地 米沢市大字関根字中屋敷

築城者 不明

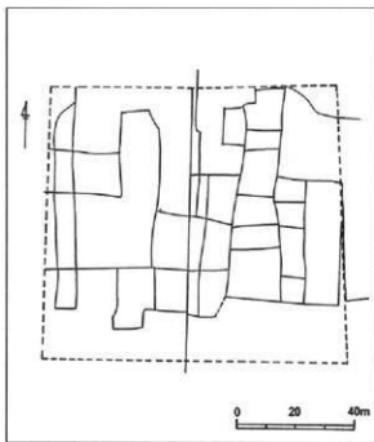
築城時期 室町期

参考文献 『山上郷土史』

概 要

本市街地の南方部関根地区にあり、当方約300mの地点に土塁が残る北館がある。本館にも土塁が最近まであったと言うが、現在は消滅している。現況は畠で占められる。館は一町四方と推測され、北方は堤前の字名が残る。字名が示すように、堤の一部と思われる池が残存しており、本館と関連する遺構と考えられる。通称「西館」と呼ばれているが、北館のように城主についての伝承等は残っていない。

(菊地政信)



関根中屋敷推測図

1989.11

北館 (喜多館) 202-194

所在地 米沢市大字関根字北館

築城者 喜多伯耆守

築城時期 室町期

参考文献 『山上郷土史』

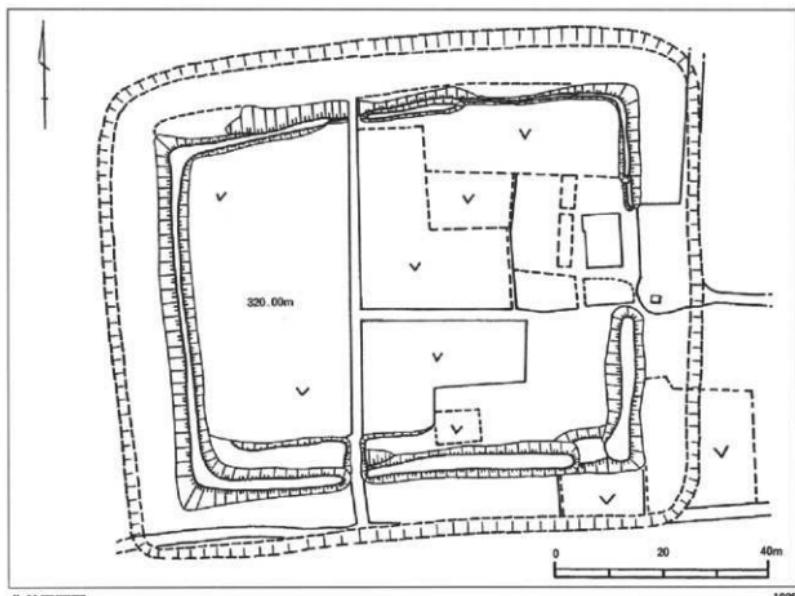
概要

米沢市街地の南東部に位置する関根地区に所在し、近くには普門寺があり、さらに本館に隣接するかのように西館があったと言うが、開墾によって消滅してしまった。

館は南北 93m、東西 109.8m を測る。方形形状を呈し、土塁、堀が全周する形態である。虎口は東方及び南方 2 箇所に認められる。東方の虎口が幅広く、16.8m、南方部はやや西方よりの箇所にあり、2.4m と狭い。

現況は図で示すように、土塁だけが現存するが、堀があった事は現地踏査で明確に確認できることから、破線で示した。また、開墾した人の話によると、館内部の中央部に井戸があり、井戸の付近には、鉢をとかした炉の跡があったと言う。さらに、礫石と推測される礫も出土したとのことである。

堀には橋があったらしく、痕跡が認められた。現在は館北縁に数戸の家がたっており、この現況からも、本館の広大さが伺える。館主の喜多伯耆守は、あくまで伝承であり、文献等の史料にはみられない人物である。  
(菊地政信)



北館平面図

1988

坊中前館 202-195

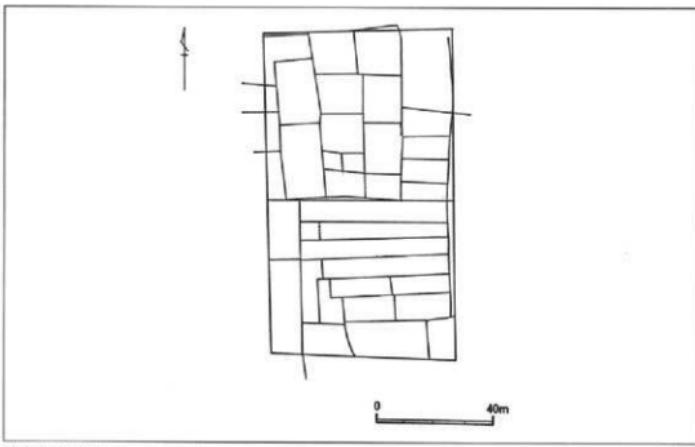
所在地 米沢市大字関根字坊中前

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の南東約15kmにあり、JR奥羽本線関根駅南側150mに位置する。近くには、上杉鷹山公が篤とする細井平州を迎へにいったとされる名刹の普門院がある。この館は平城跡と推測される。この館跡は字切図より推測したもので東西65m、南北110mに及ぶ。現況は造成等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



坊中前館推測図

1989.11

所在地 米沢市大字岡根字坊住上

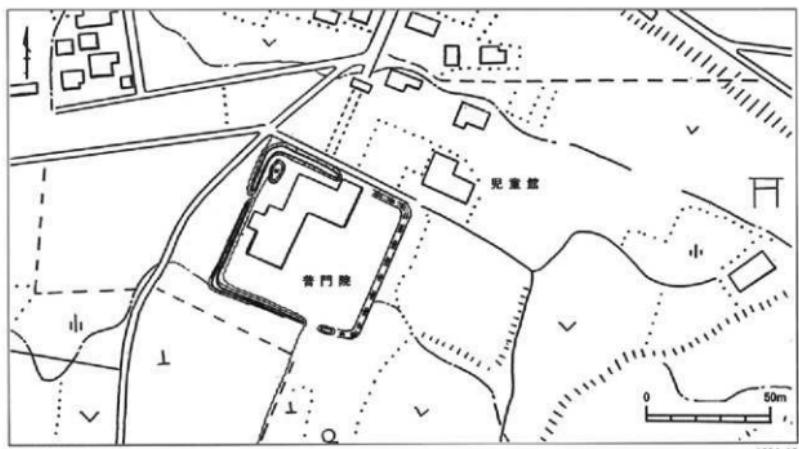
参考文献 『山上郷土史（昭和62年発行）』

## 概要

米沢市街地の南側 6.5km、標高 632.4m の赤崩山北面に広がる山麓で、普門院境内に存在する。城館規模としては南北 60m、東西 60m の範囲にあって土塁や池、小川が残っている。土塁は最大幅で 5m に及び高さは 3m に達している、土塁は北面の一部及び西側、南面が残っている。東面の土塁に関しては現況の確認は出来ないが、過去に土塁を造設したときに土塁が破壊されたものと推測されることから土塁が方形に廻っていたと思われる。また、土塁は西面と南面の一部が途切れている箇所が認められるので、その部分が虎口と推測される。

現在寺の門前が、本館の北側にあることからすると、土塁の西と南側に虎口があると言うことは、本館は現在の寺より早い時期にあったと考えられる。普門院の創建は仁寿三年と言われるが、寺を何處に創建したのかわからない。

慶長四年に中興第一生靈詠法印が再興した事になっているので荒廃した寺院をこの館址に再建築したとみるのが妥当と考える。館の周辺には、北西側 200m に北館、西側 1km の山間に海老ヶ沢館、北東側 100m に坊中前館が位置している。  
(佐藤弘則)



普門院館略測図

久慈さわにて  
海老ヶ沢館 202-197

所在地 米沢市大字赤崩字海ヶ沢

築城者 不明

築城時期 戦国期

概 要

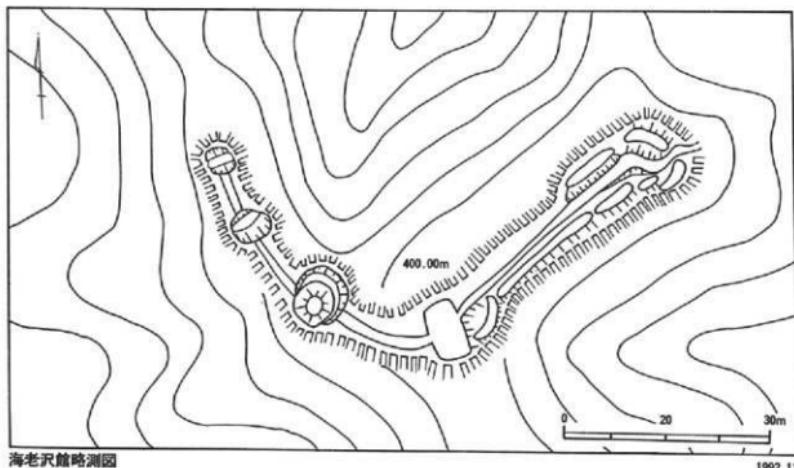
本市街地の南方に位置する。標高400mの山頂に沿って構築したものであり、「く」の字状に曲がった尾根を利用して東西約100mに分布し、東側に虎口が認められる。

山城の遺構は、堀切、曲輪によって構成され、これらの遺構に道路が付随する。堀切は西側に連続して、2箇所構築してある。

曲輪は中央部にあり、方形形状を呈す。帯曲輪は南側斜面に5基配してある。幅は平均2.5mを測る。これらの遺構群の他に、この山城には塹が構築されている。塹は直径6mの円形状であり、北東部にだけ、反円形状の周溝を有する。高さは約2mである。

塹を構築している山城は、本市においては、館山城、戸長里山城、中ノ在家山城等など數例認められ、平面形状はいずれも円形状を呈す。

山城についての伝承等はない。また、この山城と関連する平地の館も不明である。 (菊地政信)



海老沢館略測図

あかくずねたて  
赤崩館 202-198  
所在地 米沢市大字赤崩字赤崩

築城時期 戦国期

概 要

山城が所在する赤崩地区は、本市街地の南に位置す。標高 380m を有する山麓に 2箇所の曲輪と 1箇所の帯曲輪で構成する小規模で簡素な館跡である。

曲輪と曲輪の間に浅い堀が設置されている。西方部の突端部曲輪には数基の石塔が散乱した状況であった。本館の直下に赤崩館があったと伝うが、確認されていない。この館の登り口には今も多くの石塔が有り、信仰と関連が深い館跡と想定される。（菊地政信）



ひぐちたて 〔ふゆたて〕  
樋口館 (冬館) 202-199

所在地 米沢市大字閑根字樋口

築城者 須藤備中守

築城時期 南北朝期

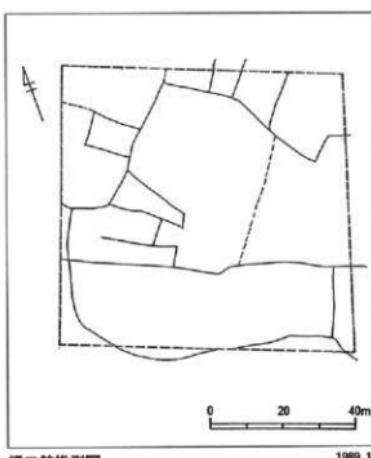
参考文献 『山上郷土史』

概 要

本市街地の南東地区に位置する。大字閑根地内にあり、蛇ノ口館の山城とセット関係にある館と推測され、現況は宅地、水田、原野、畑の地目である。城主は須藤備中守との伝承が残っており、館があった場所には石碑が建立されている。一辺 70m の方形状を呈す館と推測される。

館の直下には泥田と呼ばれる箇所があり、水田が広がる。的場の地名も残っており、伝

承を裏づける状況が当地からうかがえる。この館が位置す台地の西方約 500m には北館がある。



（菊地政信）

やしきうちだて  
屋敷裏館 202-200

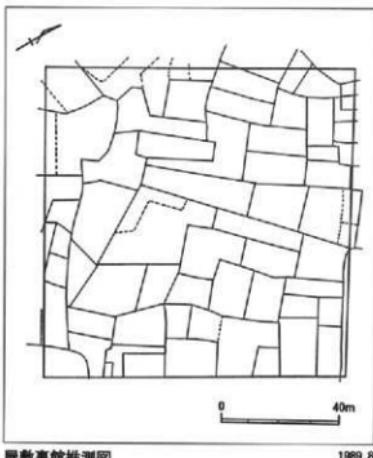
所在地 米沢市大字小白布字屋敷裏

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の南方約20kmにあり、東側の沢合い、旧板谷街道南側の集落に存在する。この館は平城跡と推測される。この館跡は字切図より推測したもので東西55m、南北60mに及ぶ。この館跡の北西側約500mには、関上屋敷館が存在する。現況は造成等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



屋敷裏館推測図

1989.8

おおさなみえやしきたて  
大沢前屋敷館 202-201

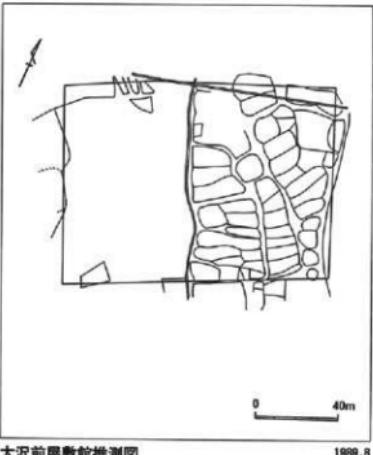
所在地 米沢市大字大沢字前屋敷

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の南東約25kmにあり、JR奥羽本線大沢駅北側150mに位置する。この館は平城跡と推測される。この館跡は字切図より推測したもので東西110m、南北90mに及ぶ。現況は700m級の山に囲まれた沢合いにある。畠地・水田等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。

(月山隆弘)



大沢前屋敷館推測図

1989.8

はやまたて  
**羽山館** 202-202

所在地 米沢市万世町桟山

築城時期 戦国期

概 要

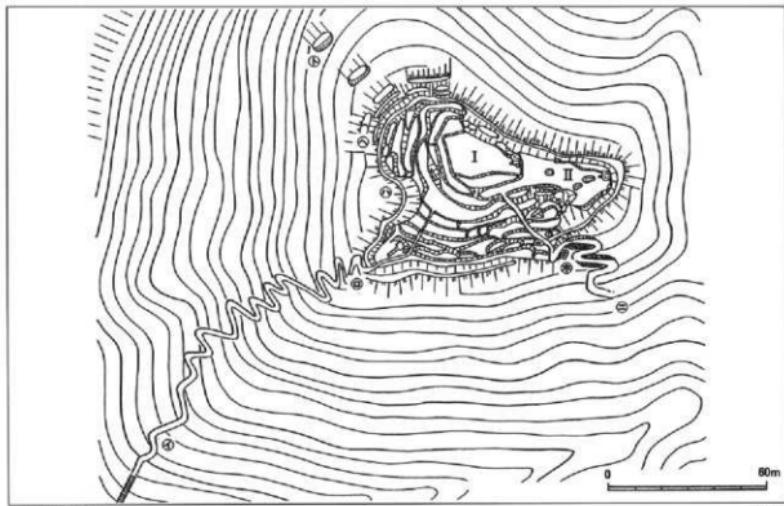
通称「羽山」と称される独立丘陵で、山頂付近に羽山神社が祭られている。主郭付近の標高は 510m で、山麓までの標高差は 190m を測る。館跡は、山頂を整形して構築したものであり、東西 130m、南北 80m の規模をなす。遺構は、主要区画となる帯曲輪を 3m 前後の幅で山頂を八巻き状に配し、西斜面から南斜面にかけて幅 3m~6m の歛状横堀と階段状のテラス群を連続多様するのが特徴で、笠野山館、長手館の山城と共に通している。

主郭は、最頂部の曲輪 I とみられ、不整方形の長径 30m、短径 15m のテラス状に整形している。さらに南側にも不整舌状を呈した 30m×10m の曲輪 II がある。帯曲輪は、北方向を二重で構成しているが、西側はさらに短い帯曲輪と腰曲輪を山腹まで配されている。帯曲輪の下方斜面はいずれも 5m~10m を削平して人工斜面を施している。

道路は、北西の参道（イ）と北側の（ニ）の 2 箇所が存在するが、前者の帯曲輪に接続する（ロ）に樹形が付随することから館跡の道路を後世に利用したものとみられる。後者の（ニ）は羽山と北に面した丘陵の谷間を道路としたもので、館内に侵入する箇所には石垣を配した 4m 前後の道路が開き樹形を形成していることから、大手からの主要道路と推測される。従って、（イ）の道路は握手と考えられる。また、曲輪 II 内には巨石を囲んだ石窟や岩陰、座禅石が数箇所みられることから山岳信仰（羽山信仰）の遺構も共存するものとみられる。城との係りについては明確にできない。

時期的には所謂「重餅型」を主郭とすることから約 16 世紀中葉前後とみたい。伝承や文献等の資料は存在しない。

（手塚 孝）



羽山館略図

1988.6

所在地 米沢市大字関根字大滝沢

築城者 須藤備中守

築城時期 室町～戦国期

参考文献 『山上郷土史』

### 概 要

本市街地の東南部、関根地区に位置する。館は関根字蛇ノ口屋敷の南方に聳える標高490mの山頂に所在する。平地との比高差は163mを有する。山頂は、東西240m、南北100mの「く」の字状の平坦面を中心に造構を構築している。

館がある頂上からは、遠方の高富町、川西町が展望でき、東方直下には、羽黒川が北流し、西へ大きく曲がるこの河川は、天然の掘の役目をはたしている地形である。北側の斜面は急勾配で、登るのは極めて困難である。館に行くためには、沢合の道を通過して登るのが楽である。このルートが館への道路であるが、この道路の一部は最近の林道工事によって、壊されてしまった。

館は図で示すように、テラス状の曲輪群と帶曲輪（通路）を多用して構築した山城である。東側突端に位置する造構群は「廻館」と呼ばれた地域で、調査以前はこの場所だけを山城と認識していたようである。

その後の調査によって、あらたに確認された造構群と廻館を含めて、蛇ノ口館と呼ぶことにした。造構は、堀切、曲輪群、帶曲輪群、腰曲輪群、縦堀、歛状横堀、物見台、虎口、道路等で構成され造構群の大半は良好に現存している。

堀切は南側の尾根に一条認められる。東西部の突端に構築していないのは、両端部とも急勾配であることから、構築する必要がなかったものと考えられる。唯一の堀切には北側に小規模な土塁が付随する。曲輪群は、尾根の平坦面を中心として構築され、最大で15m×10m、最小で4m×2mの大方形状を呈す。帶曲輪は、北側斜面の沢に面した箇所を主体として構築している。

腰曲輪は西側山頂及び沢筋に認められ、階段状に配している。縦堀は2箇所に構築され、北方と南方の崖斜面に配している。北側の縦堀は幅8m、長さ28m、南側は幅6m、長さは7mと短い縦堀である。二条の歛状横堀のある南側斜面に虎口がある。歛状横堀は地形に沿って構築していることから蛇行している。長さは70mを測る。虎口はこの造構の西側端部にあり、虎口形態だけ見れば、上郷地区の戸塚山館、同地区三沢館に類似する。

物見台は、前述した「廻館」の箇所と推測される。この箇所は15m×10mの平坦面を有し、下場は幅2mの道路が全周している。現在石塔が建立してある。石塔の参道によって若干削られているが、ほぼ現形を保っているものと推測される。

道路は一部図に示したが前述したように、沢合を上ってくるのがある。虎口の位置から判断してこのルートでまちがいないものと考える。

伝承として、須藤備中守の夏館と言われる蛇ノ口館の虎口を通り、沢合に下ると平地の景観が広がる。そこから東に曲がった所に、須藤備中守冬館と伝えられる場所に着く。冬館は沼田といわれる深い水田があり、左右には空堀があった。さらに前方は「的場が原」の地名が残る。これらの伝承を裏づけるような地形が残存しており、石碑も建立されている。

（菊地政信）



蛇ノ口館略測図

1990.10

ますがたて  
**樹形館** 202-211

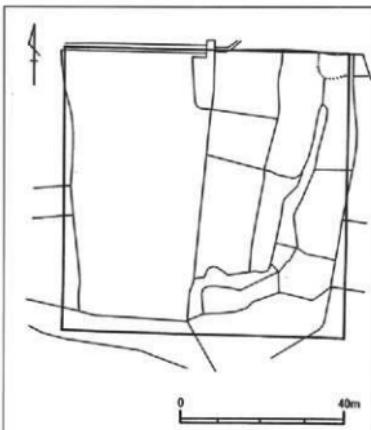
所在地 米沢市大字板谷字樹形

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の南東方約20kmにある、JR奥羽本線板谷駅東側の沢合い、旧板谷街道南側に集落に存在する。この館は平城跡と推測される。

この館跡は字切図より推測したもので東西55m、南北60mに及ぶ。現況は造成等によって破壊されており、年代を示す伝承や文献等は認められない。  
(月山隆弘)



樹形館推測図

しおのなかやしき  
**塙野中屋敷** 202-061

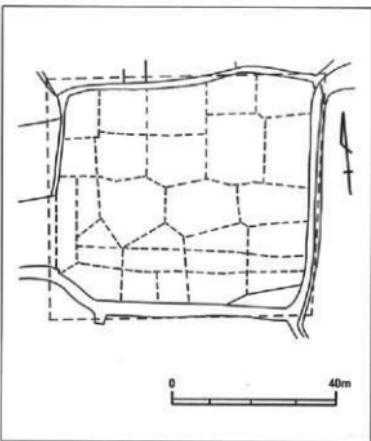
所在地 米沢市塙井町塙野字中屋敷

築城時期 不明

概 要

鬼面川の右岸に位置するもので、塙野館、塙野上屋敷東館等9基の館跡が2km以内に集中している箇所である。本館は、園場整備によって既に破壊を受けており、現況で確認することは不可能であるが、字切図で分析すれば、南北約65m、東西70mの範囲を有した方形単館の可能性が高い。伝承等はない。

(手塚 孝)



塙野中屋敷推測図

こすげたてのうちだて  
**小菅館ノ内館B** 202-013

所在地 米沢市広幡町字館ノ内

築城時期 不明

概 要

米沢市街地の5.5km北東側の誕生川南部に位置するもので、緩やかな丘陵地に構築した平城跡と推測される。近くには米坂線の路線が南北に通なっている。この館跡は、字切図より推測すると、東西65m、南北74mに及ぶ。館跡の周辺には、隣接して小菅館ノ内館、南側2.5kmには三月在家館跡と鎌倉時代を代表する丘城の成島館跡が位置する。現況は、耕地整理によって破壊されているが、現在の道路の地形や、水路の位置から台形状を示す館跡と考えられる。

(佐藤弘則)



小菅館ノ内館 B 推測図

1992.9

所在地 南陽市梨郷字上館

築城者 増田承津守興隆

築城時期 戦国期

参考文献 『山形史別編』『東置賜郡史（下）』『南陽市史（上）』『梨郷村史』

## 概 要

本館跡は、梨郷駅近く北の山並み、経塚山東に接している。南は置賜平野に最上川上流水のうるおす水田地帯が眺望される地である。目前には本館とかかわり深いと伝える梨郷南館・小館が近く、山の背後は龍樹山館へと続いている。

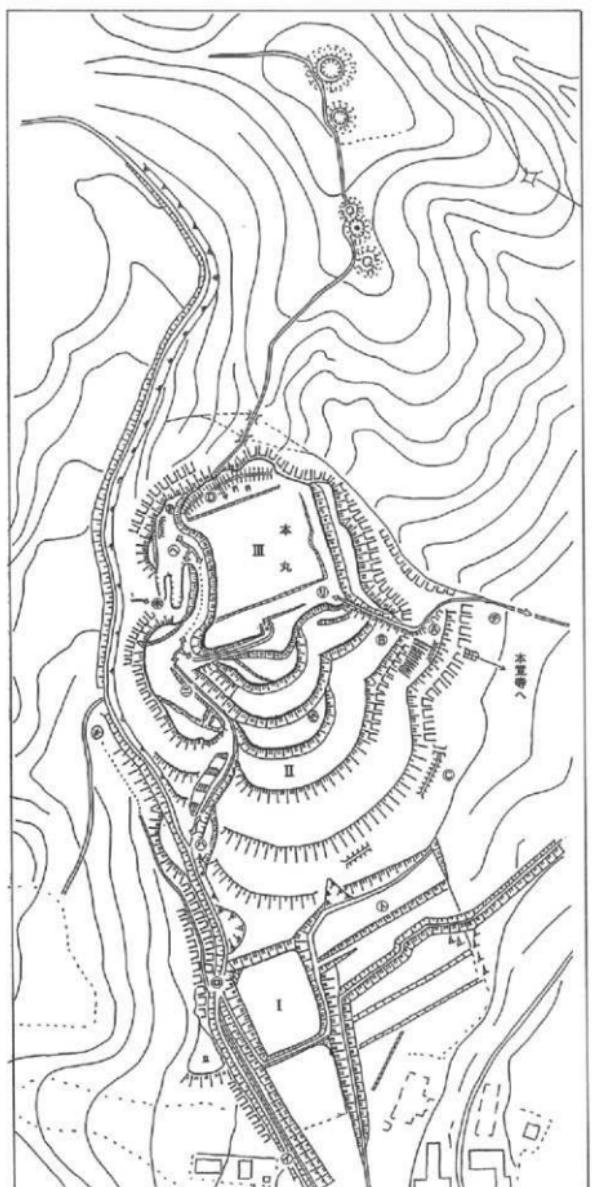
館跡の山は、一部開拓されているが、まだ多くの遺構もあり、全貌をつかむことができる。館の西側を、当地伊達氏の時代（1380～1591）に金山開発したと伝える坑口があり、そこから湧き出る水は今も絶えず、地元の生活用水としてつかわれている。館は、この谷を境にし東側に築かれている。標高323m、龍と差高は113mある。山の南側斜面と尾根を巧みに利用して、層状に拡げ、階段状曲輪で構成したのが特徴である。城域は龍の根小屋とみられる大手虎口から、山頂主郭の奥櫻手elmanまで長軸は500m、短軸は200mの山城である。館跡の曲輪群は、第Ⅰ～Ⅳまで分類できる。

第Ⅰの位置は、根小屋とみえるところで、ここから第Ⅱまでの標高差は30mとあり、ここが階段状曲輪で固めている。第Ⅲは主郭というべきもの、平坦で不整四角形50m四方ある。その中で、南北に各1m程の段差がある。その奥に三社の石祠、中央が春日神社、右側山神、左側が鶴岡八幡宮、館の東山麓本覚寺境内八幡神社の奥の院と伝える。この寺は明応元年（1492）、日戒入人の開基、寺の八幡神社は正八幡で、いま梨郷神社に合祀されている。第Ⅳの曲輪群は、奥櫻手である。

大手虎口は、第Ⅱハの位置、ここに折形が見られ、更に進むとニの位置にも折形で固めている。この付近は道巾も広く、馬出しであろう。また、道路は根小屋から東へも進めたろうが、途中潰れてしまった。本覚寺から奥の院への通路とも見えるが、途中はきびしい。Aの位置に敵状縄掘が並び、長さ4m深さ30cmある。その下に曲輪と西側にCの位置に土堀もある。Bの位置にも土堀あり、ここをつたって主郭に行けるが、リに折形がある。

主郭の奥（北）に長さ40mの掘切があって、ヌ・ルが櫓手となる。ヌの位置には、万一に備えてか、土橋が今も残されている。この奥へ100m程進むと、尾根伝いの高所に、径10m・高さ1m程の土盛りが大小5ヶ所ある。物見台か、狼火台に使用されたかは不詳。この通路を尾根伝いに進むと龍樹山館に辿りつく。館の西側斜面は急勾配で登れないが、ホの位置は、予想したように厳しい折形を設けている。館主増田承津守は伊達家臣、本覚寺檀家で墓も建立されている。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



御郷上館略測図

0 50 100m  
1988.11

りゅうじゅさんだて  
龍樹山館

213-002

所在地 南陽市梨郷字龍樹山

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『南陽市史（上）』『梨郷村史』

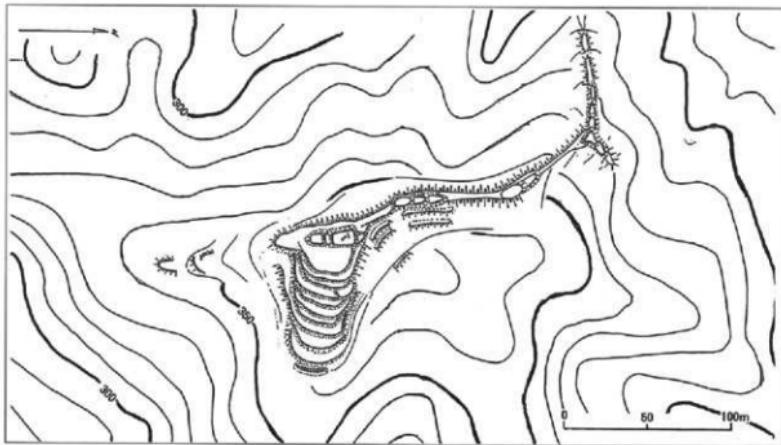
概要

龍雲院の裏山である。龍樹はインドに生まれ、第二の釈迦といわれた菩薩という。館跡の主郭標高376.6mを示す二等三角点がある。北側は、さらに山が続き、南は置賜平野の水田地帯で眺めもよい。仏教でいう「座して動ぜず」の場所かも知れない。龍の龍雲院は標高240mで、差高136mある。

館跡の遺構は、名のとおり龍の形になっている。大手虎口は、龍雲院の西裏の山裾から入り、七曲りの通路を経、そのまま進むと現南陽市総合運動公園に至る。この七曲りに、長さ10m程の土塁が2本、道沿いにある。曲輪等の配置は、龍の頭頂を主郭とし、顔面に当たる部分を階段状腰曲輪で固め、口部は長さ10m、高さ1mの土塁を備えている。南西の小曲輪は、龍の右前脚部にあたり、左部をさがしたが見当たらぬ。

さらに胸・尾の部となるが、尾根を利用して小曲輪が散在する。尾部は握手にあたり、山を降る。城域は南北の長軸300m、単軸100mある。各テラスの段差は場所によって差はあるものの、それぞれ2m以上あって直進することは困難である。龍の右脚部先の曲輪を西南の方向へ尾根伝いに500m進むと、梨郷上館に迫れる。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 明）



龍樹山館略測図

1991.10

りんごうこだて  
梨郷小館 213-003

所在地 南陽市梨郷字桐町前

築城者 不明

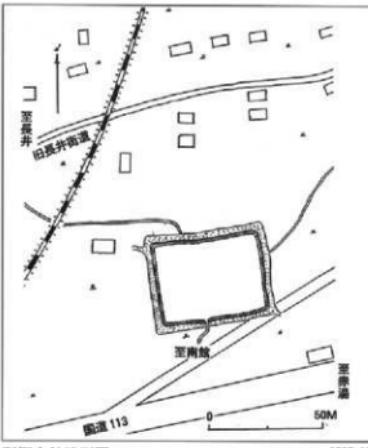
築城時期 戦国期

参考文献 『南陽市史（上）』『梨郷村史』

概要

ここは梨郷南館に対しての呼び名かも知れず、梨郷城という人もある。旧長井街道の道沿いで、館の遺構をかすめるように国道113号線が通っている。北に龍樹山館、西北は上館、国道をへだてて南館が近い。標高220m、周りを水堀で囲む平城である。今は遺構が全く消滅、字限図と現場および地元の協力で、図面に再現した。東西60mの長四角、内側は土塁を築き、道は南館に通する。館主は南館・上館とかかわるというも確かでない。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



梨郷小館略測図

1993.10

わっただて  
割田館 213-004

所在地 南陽市竹原字原割田

築城者 不明

築城時期 戦国期

参考文献 『梨郷村史』

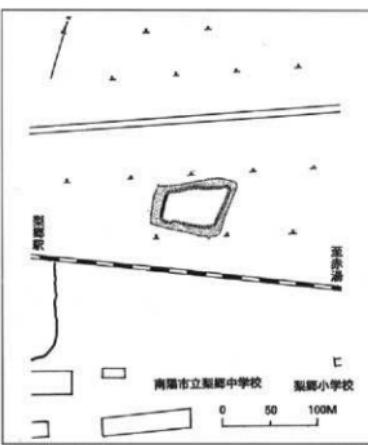
概要

館跡は、昭和40年頃の耕地開拓整備事業で、一帯はほとんど整地の上区画整理した。遺構はすべて消滅したが、西側の畦道が一部40cm程隣地より高い。明治8年字限図と照合、整地前の畦道で、館の曲輪のようだ。

こうして字限図・現地および地元の協力で図面を書く。標高は、南隣り水田と比べ僅か高く、標高220m、不台形の平城である。周りを広い水堀、内側は土塁を築き、経50～

100mある。館主小関兵庫介と伝えるも不詳。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



割田館略測図

1993.10

所在地 南陽市梨郷字館の畠

築城者 増田損津守興隆

築城時期 戦国期

参考文献 『東置賜郡史』(下)『南陽市史』(上)『梨郷村史』

#### 概要

国道 113 号線の南側、最上川沿いに築かれた平城である。梨郷小館は国道をへだて、300m しか離れていない。館南の近くを最上川が流れ、おまけにこの付近の標高は、集落が 209m に対し、205m となっている。そのために春の雪どけ、梅雨時の洪水には悩まされていた。

昭和初期・昭和 44 年の 2 回にわたって、河川改修と圃場整備で干拓と耕地整理が行なわれた。いま館跡は一変、遺構は全く消滅してしまったのである。明治 8 年の字限図や古資料・現場の状況と、地元古老的協力で縄張図を作成した。形は円味を帯びた四角形で、東西は 85~110m、南北は、約 105m と広い平城(館)である。水堀は北側が稍狭く 8m、ほかは 10~15m と広い。堀の外側は稍高く土を盛り、内側は土塁を築いている。その上郭も高く土を盛って、洪水に備えていた。こうした様式は、この館の特徴といえる。

この場所への築城理由は不詳だが、最上川と旧長井街道の守備と推測される。

南陽市史(上)は、天正 12(1584)3 年ごろ、伊達家臣増田損津守興隆・宗繁父子が築城、とまで記しているが、その後竣工、城主については推定のみで確証がない。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



梨郷南館略図

1993.10

かたぎじだて  
片岸館 213-006

所在地 南陽市和田字片岸

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『梨郷村史』

概 要

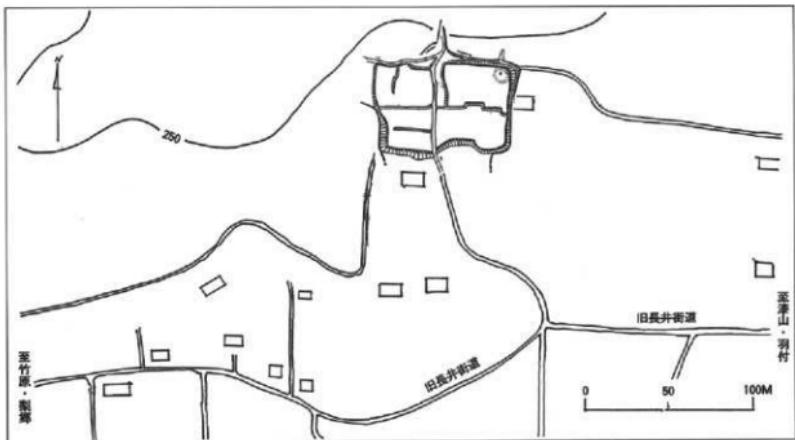
旧長井街道を西へ進むと、漆山羽付に続く西脇が和田である。道の北側が片岸、南側を少し離れて新館がある。ここ片岸は標高 240m で北は山に接し、南は平野が開け眺めもよい。東北側は 3m 程下に谷からの湧き水がながれる。館跡の形は東西にのびた四角形で、長軸 105m 単軸 75m ある。

館は周りを区切り、いま西側も小川が流れおり、当時はこの水を用水としたものと思える。通路は、旧長井街道から入り、小径となって大手・虎口に使われたであろう。この通路は館の真中を通り山の方へ握手となる。曲輪は北側が稍高く、七つに区分されている。東側の曲輪は広く、ここへ居住していたのであろうか。

東北の鬼門に当る方向に屋敷神がある。梨郷村史によると、当地長井時代（1115～1380）地頭大江時広の臣片岸右京が、館を築いて当社を再建、鬼門鎮後に充てたという。いま、この社は元村社梨郷神社に合祀されている。

ここ片岸は、新館をはじめ近くに多くの館跡がある。北の山地に赤松山館、南は割田館、東に漆山（古館）・新山館などはその一つ。しかし、同年代かは不詳。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



所在地 南陽市和田字館の山

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『南陽市史（上）』『南陽市史編集資料（17）』

### 概要

本館跡は、和田片岸から北へ 500m 程の山中にある。主郭の最も高い所の標高は 390m、麓は 230m で差高 130m。通路は山の南から山道を登ると、すぐに七曲りで大手虎口独特の道となる。図面には書かないが道の左（西）側に 5 段階の曲輪があり、住居地（根小屋）とわかる。更に七曲りの坂が続き、図面の虎口に迫り着く。南が開けて眺めもよく、西の近くに小高く虚空藏山がある。

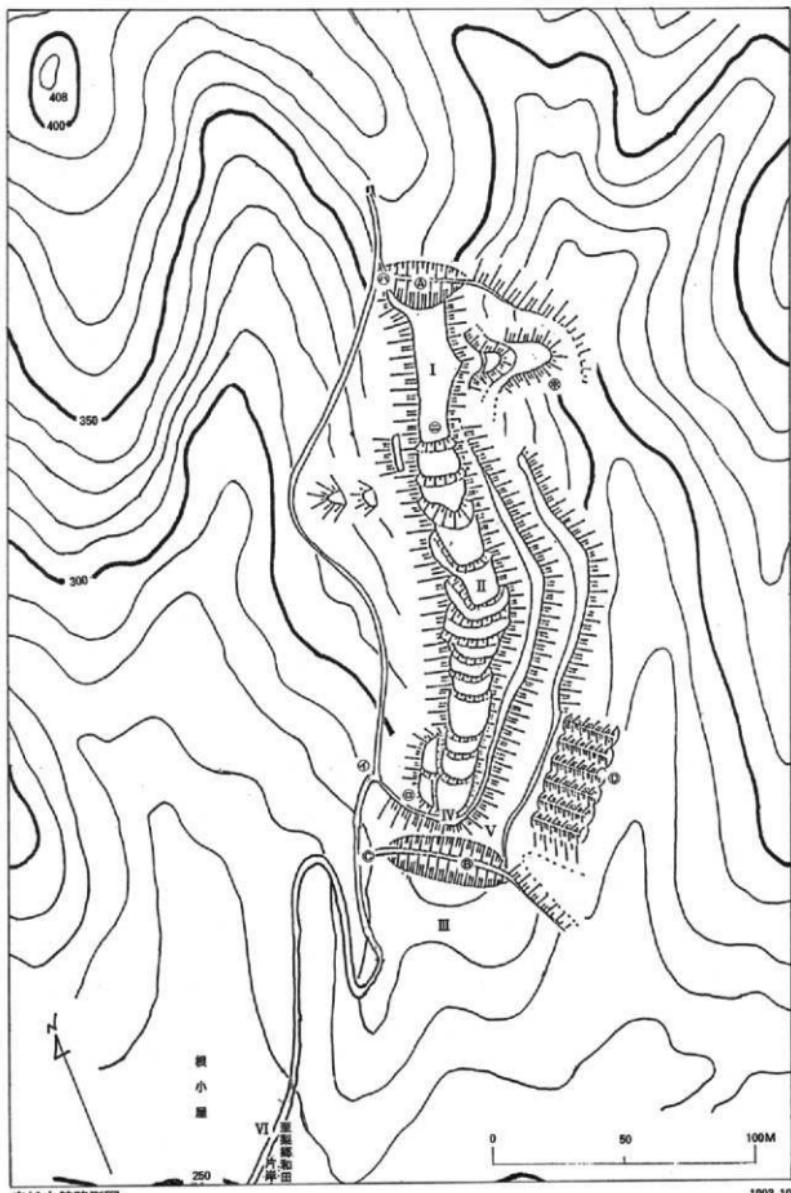
館の遺構はまだ多く残されている。

館の形を図面でみると、伊勢エビ状のようでもあり、背中付近にあたる曲輪が目立つ。城域は長軸 220m、単軸 80m ある。館の遺構曲輪群を区分すると第 I ~ VI の 6 つになる。第 I の位置は頂上の主郭にあたるところ。第 II はエビの胸部で館にとっては側面、第 III は館南端で図面に記入されてない箇所のようす、第 IV はエビの頭部、第 V はその側面、第 VI は根小屋とした。先ず イ、ロは大手・虎口である。ロの稍東の曲輪は、現場の状況からみて舟形と見たいし、ここで侵入を防げる。第 IV にある曲輪は、虎口からの侵入に対し第一の防御であろう。前面は通行できるよう開かれているものの、東方へいくにしたがい段差は 2~3m と大きくなっている。以下 頂上へ曲輪が段差が大きいので、前方を確認できないまま進まねばならず、攻撃は不利になる。第 V の位置は、東側の深い谷からの攻撃に対する防備である。

北に延びる 2 本の帯曲輪は、守備兵の移動に効果があり、谷底の防備に力を発揮されよう。特に D の位置にある畝状縱堀は、堀切 B からの侵入に対する備えであろう。この縱堀は、高く見通しもよく、十分力の發揮ができるものと見られる。この縱堀から谷底までは 30m 以上はあるろう。

V と堀切の段差は 5m で到底登れないし、真中の通路 C は途中、行き止まりとなる。また、堀切の向う III は、館の備えはないが、ここを乗り越えて攻めることは困難である。第 II の位置は斜面、その西の通路、更に急斜面と西へ続く。ここは曲輪との段差は 5m 以上、イの虎口から通っても曲輪、陣地は見えない備えである。第 I のニは 1m 程高く物見か、指揮所に使われたろうか。A は、ここも深堀切、ハは搦手で尾根を伝って塹の沢へ行ける。ホは東の谷の攻めに対する備えであろう。

館名「赤松」について参考資料は、片岸に住む旧家の文書をあげ、嘉吉の変（1441）で足利義教を誅した播磨守護赤松満祐父子の行方をあげ、子の一人教康がここへ下り、住みついたのでは、と記している。その子は行者となり羽黒山に住んだあと、子孫は、現神職。この館の特徴は、対敵想定が南方で、それにかなう自然地形利用の防備であろう。  
(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



赤松山麓路測図

1993.10

所在地 南陽市和田字新館

築城者 不明

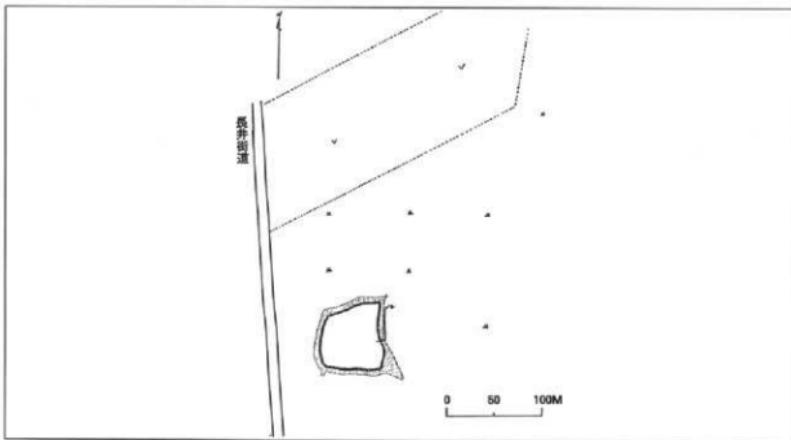
築城時期 不明

参考文献 『梨郷村史』

## 概 要

片岸館の南にあり、旧長井街道と現長井街道の間、水田地帯にある。標高 230m、南方は低く水田地帯が続く。付近一帯は昭和 40 年耕地の圃場整備で地均し、道路・水路の整理を行う。僅かに残る曲輪の一部をもとに、明治 8 年字限図と現場を照合、図面化した。巾 5m~12m の水堀と、内側は土壁で固めていた。郭も高く、60~70m の台形に築かれている。梨郷村史に、当地長井時代に臣片岸右京がおったが確証ない、とある。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



梨郷新館推測図

1993.10

所在地 南陽市津山須刈田字備後館

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『南陽市史 (上)』

#### 概要

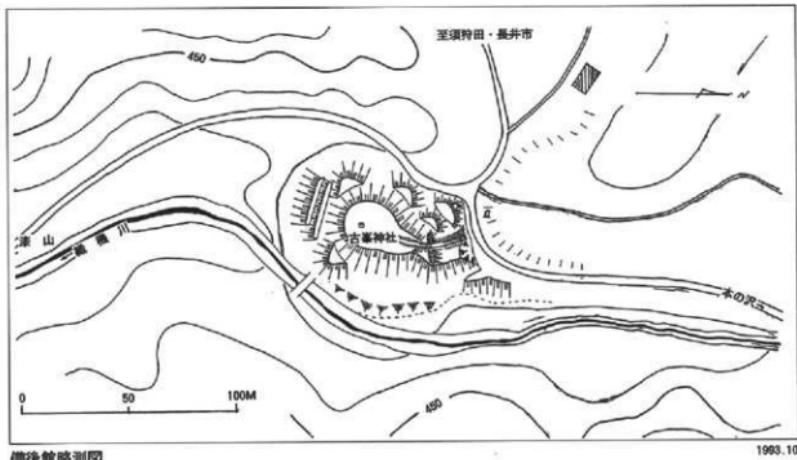
長井街道、池黒から北の山峠を約6軒、塗の沢・須刈田の三叉路丘地にある。塗の沢は北東1軒須刈田は西500mと近いが、長井市伊佐沢までは6軒と遠い山間地である。館の東麓を織機川上流が流れ、南麓は須刈田からの流れで合流する。

東側は崩れやすく、いま高さ3mの砂防ダムがある。館の頂上標高450m、麓440mで、差高10mの丘城である。地形からみて、北の通路が掘切とも見えるが不詳。この通りから御坂が虎口だろう。途中掘切があり、この近くに柵形があったかも知れない。主郭は洋梨状橢円形、南北長軸90m、東西50mで、いま古峯神社を祀り塗の沢・須刈田の鎮守社である。

西の2本の帯曲輪は30mあり上の曲輪の段差1m余、他の腰曲輪は急斜面にある。他の斜面は急で登れない地形を選び、川を利用したのが特徴だろう。

館の由緒は西北の台地に石碑建立、刻まれている。文治元年(1185)塙の浦の戦に敗れた備後の武士が、ここへ落ちのび自活、しばらくかくれて、ここに館を構えた、とある。そのかくれがは大石ともいうも、大岩とも確定できない。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



備後館略測図

1993.10

所在地 南陽市関根字館の内

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『沖郷村史』『南陽市史（上）』

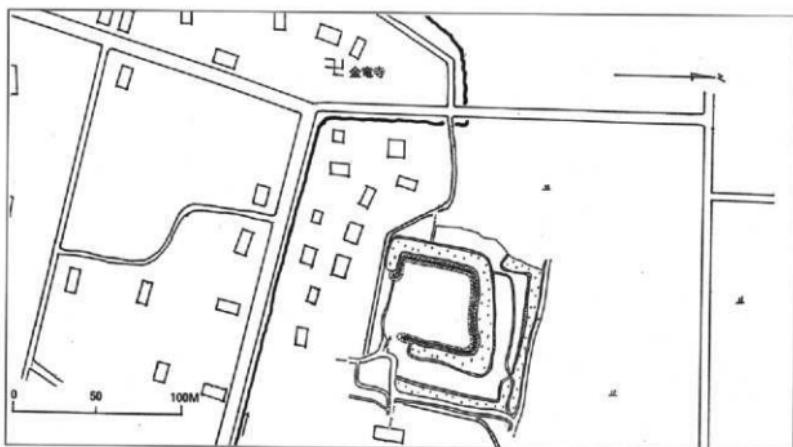
#### 概要

館跡は、川西小松街道沿い、下田橋近くにある。露橋館・宮崎館は1杆程しか離れていない。水田地帯のどまん中で、最上川が800m程先で、南から西に曲がって流れる。標高212mの平城である。寛政年中（1789～1801）米沢藩が施工した「黒井堰水路」の絵図に、この館跡跡が描かれている。

このあたりは、享保年間（1716～1736）と昭和7年・昭和45年に、それぞれ開拓や圃場整備が行なわれ、いま遺構はほとんど見当たらない。よって明治8年字限図をもとに、現場を黑白、更に地元の協力で図面にした。

標高212m、みなみがわの一部を除いて回りを二重に水堀で囲んでいる。堀巾は10m そこそことある。本丸は更に土塁をまわしている。館の南側を水堀などを築かないのは、南は根小屋で、人々が住ついていたためであろう。いま、ここを屋敷と呼んでいる。館の形は一辺50mの四角形で、郭内の広さ2,500平方米程か。沖郷村史は広さ約6反歩（6,000平方米）とあるが水堀を入れた広さであろう。虎口は、この根小屋からとなっており、ここからは他の曲輪へも行けるしくみになっている。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗）



関根館略測図

1993.10

みやざきだて  
宮崎館 213-013

所在地 南陽市宮崎字町屋敷

築城者 不明

築城時期 戦国期

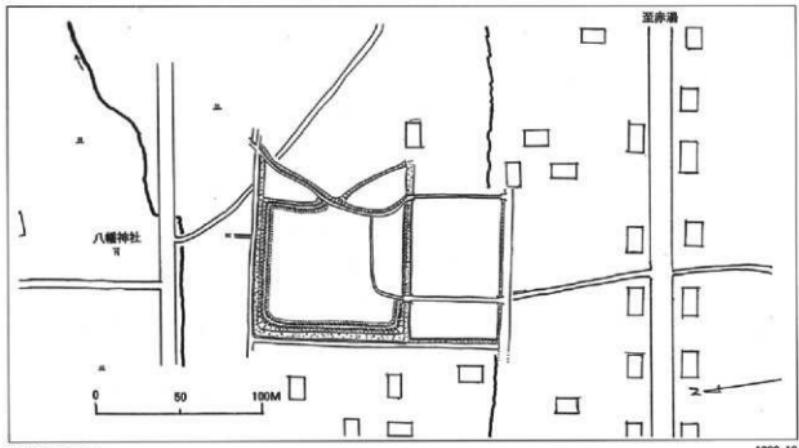
参考文献 『沖郷村史』『南陽市史（上）』

概要

川西小松街道沿い宮崎町屋敷内にある。北西に關根館、露橋館は近くにある。南を流れる最上川までは、700m しか離れていない。ここのが耕地地図は、大正 15 年（1926）頃から行なわれ、更に戦後昭和 40 年に圃場整備が行なわれているために、館の造構はほとんど消滅した。明治 8 年字限図をもとに、現場と照合、土地の古の協力で図面化した。

館の標高は 211m、館の周りを巾 5m 程の水堀をめぐらしている。曲輪は南北二つ。あわせると南北と長い四角形で長軸 120m、東西の単軸 80m、広さ約 9 反 6 尺程である。ここはいま、宅地をはじめ畠地になっている。水堀の水は、形はかわっても、同じ方向から流れている。およその形は四角形と、周りの水堀・土塁などは、この館の特徴であろう。土塁は本丸と思われるところを巻にしている。南丸は居住地らしく、その南を道路とし、ここが虎口でもある。この通路は本丸へ直進、東へ出られる。東北の出入口は、握手であろう。北の方位に、八幡神社を祀っているが、館との関係は不明。この館は別名を御殿と呼ばれているが、その後、米沢藩主の鷹狩り休憩所として使われたといふ。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



宮崎館略測図

うるしやまだて 〈うるだて じいやまだて〉 漆山館（古館・新山館） 213-014

所在地 南陽市漆山字古館

築城者 不明

築城時期 不明

参考文献 『南陽市史（上）』

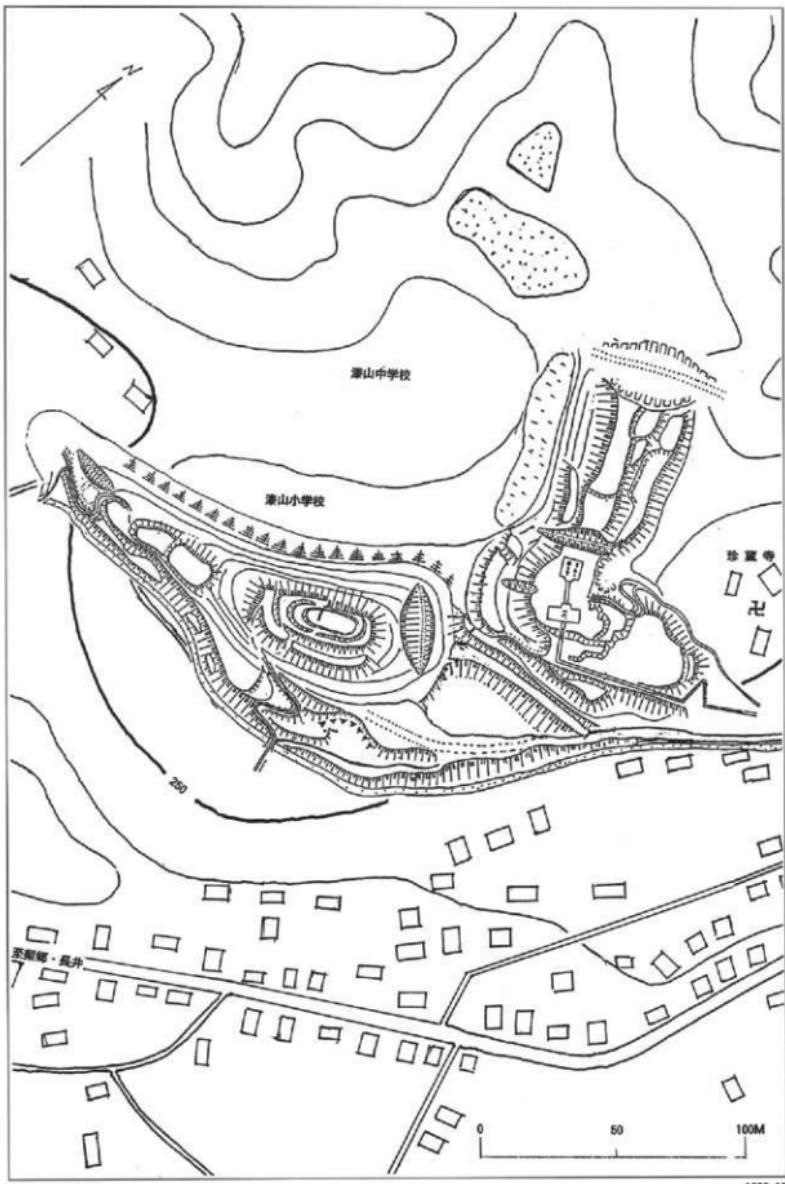
概要

宮内の西隣に、池黒・漆山と続き、高台に市立漆山小学校がある。当地では、ここを「古館」と呼んでいる。置賜地方が一望できる、眺めのよいところ。一方近くの平地からみあける漆山小学校は、いかにも館跡らしい。古館に続いて、東側に新山観音堂の建つ「新山館」がある。さらに地続き、観音堂の別当鶴布山珍藏寺がある。いずれも高台である。

もともと、この古館・新山館は一館の関係であったことから、その名を「漆山館」とした。地元の伝えるところによると、古館山はもとの本丸があって、新山の方は館の物見だったという。その後、時代の変遷から、物見を館に造り変えたという。やがて館は廃城、古館は開拓して畠地・新山館は観音堂を祀ったという。昭和8年漆山小学校建設にあたり、この古館山頂を削して地均し、敷地造成したといい、山の高さは古館が高かったという。古館はこの工事のために、館の遺構は多く消滅しており、明治8年字限図をもとに、地元古老的の協力をえながら、城館縄張り図面を作成した。

いま古館にある漆山小学校敷地の標高は255m、新山館は270mで15m高い。麓の集落の標高は226mである。縄張図による大きさは南北100~200m、東西は400mと広い山城で、しかも全面的に南面に防御を固めたのが、本館の特徴だろう。館の南から西にかけてを西屋敷といい、根小屋と伝える。虎口は、この屋敷の南・西2ヶ所がある。南虎口は、児童の登校道の一つで「ちくちく道」の名がある。名の通り七曲り坂で、西虎口はいまも桥形の遺構が残っている。新山館の北へ通ずる道が握手ともられ、土地の人はこれを、夜泣き坂と呼んでいる。館の麓を流れる川は、鐵機川から分水した用水で、当地の水利は不詳。古館の北部はその後削りとられ、土砂崩にあって遺構は消滅した。古館の主郭は椿円形・頂上は長軸30m、半軸10mほどで、階段状腰曲輪で固めていた。新山館は、東側の虎口でいまの観音堂へ登り、東側曲輪の段差は1~1.5m程ある。南側に井戸曲輪もみえ、観音堂北の堀切は目立ち、土橋もある。観音堂南にも堀切、外に北側と古館に堀切があって築城規模の大きさを示している。古跡鶴布山珍藏寺は、鶴女房伝説を語り、永正2年（1506）宗山和尚開基、観音堂は置賜三十三観音十八番札所で、本尊は正觀音で珍藏寺に安置という。この漆山新山館との関連は不明だが、近くは東北に別所館、西は和田の片岸・新館・赤松山館とあるも、何れも年代等についても不詳である。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗）



泰山站略測圖

1963.10

長瀬館（よそうちやくらわんぐわん） 213-015

所在地 南陽市長瀬字館の内

築城者 不明

築城時期 戦国期

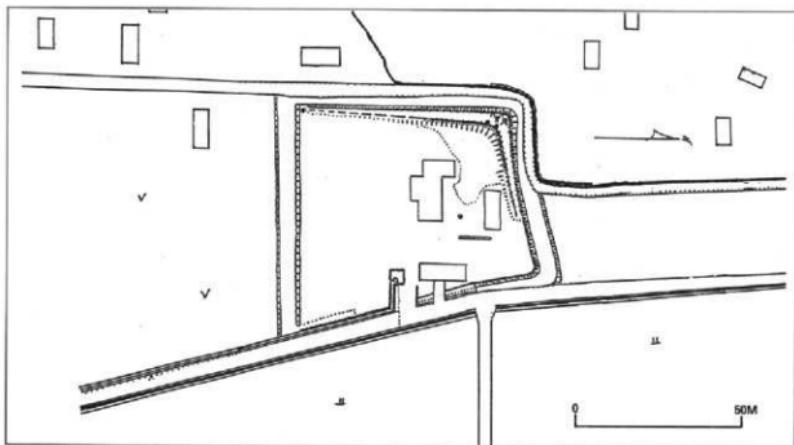
参考文献 「沖郷村史」

概要

赤湯から梨郷停車場線の通路を西へ進むと、北側の集落西落合・長瀬・法師柳と統いて見える。館跡は北へ向かう道沿いで、松の古木が高く目立つ。いま、この屋敷沿いに大きな門構えの土蔵が建ち、通用口はその横を使っている。その昔にはこの土蔵がなく、ここを通用門として使っていたという。このあたりは道路改修で水路を埋めて改修したといい、水堀は裏側にしか見当たらない。明治8年の字限図をもとに、現場や子孫家族の協力で図面をつくった。標高 220m。

東は上無川・西は織機川にはさまれた扇状地に築かれたものである。その綱張りは、長軸 80m 単軸 60m ある長四角の館。周りを巾 6m 程の水堀でかこみ、その土を内側に積んで土壁にしていた。うち西北に、この土壁や水堀が残っている。いまここを坪庭に使い屋敷神・池・古木・穀蔵が昔をしのばせる。この堀の横、平地をたどると、堀跡・通路がわかる。他の水堀はすべて消滅したという。いま、道端の土蔵横に土壁が残され、目立つ。通用門・虎口からの樹形の役目を果たした。いま通用門横に、流れる池の水は昔からの用水といい、沖郷村史は伊達時代の佐藤與惣左衛門屋敷と記している。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗）



長瀬館略測図

1988.12

所在地 南陽市池黒字上の平

築城者 不明

築城時期 不明

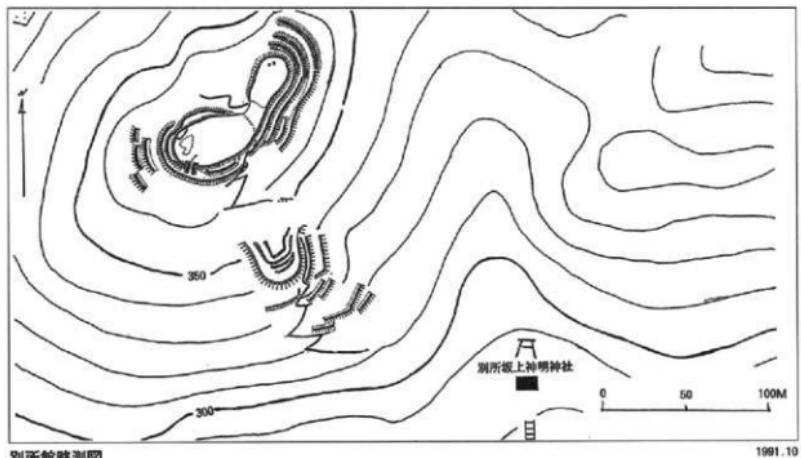
参考文献 『東置賜郡史』『南陽市史(上)』『宮内町の文化財』

#### 概要

宮内の西隣池黒、北の山並みで、東から別所山・天朝山・上の平と並ぶ。別所山は、保延6年(1140)3月9日の鉢出銘ある青銅経筒が出土した山である。ここ上の平に登って他の二山を眺めるところ、正三角形の頂点と思える位置にある。鉢跡の標高367.8m、麓集落との差高は128mと高い。

陣地と思われる箇所が二つあり、仮に前の郭を南丸、奥を本丸と分けられる。大手虎口は、現板上明神橋から登る。七曲がりで途中多くの曲輪があり、段差も2~3mと高い。樹形もある。南側の馬蹄形曲輪は、段階式である。南丸の標高330mに対し、本丸との標高差は38mもある。虎口は再び七曲がりと樹形で守る。この本丸は山頂で、瓢箪形に築かれ、その櫻張りは長軸230m、短軸45mある。館の特徴は離地を南・北に分けたことであろうが、理由は不明。山麓から本丸までの距離は320mもあり、急斜面を利用している。本丸北は畦状構堀で囲め。本丸は平坦だが、南側の曲輪は戦争中に実弾射撃場として使用、溝が掘られた。北側に高さ1m・径5mの石垣土盛り羽黒・湯殿山を祀る。山麓の坂上神社は、源義家東征時、坂上田村磨の屯地、築城守護明神を祀ったという。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



別所館略測図

1991.10

なかおちあいだて  
**大野原館** 213-018

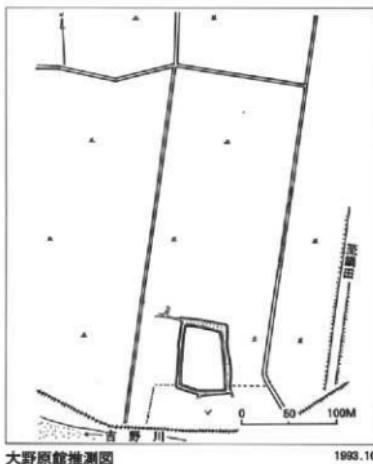
所在地 南陽市鍋田字宝藏田・蔵田

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

大橋から、吉野川を下り、最上川と合流の手前700m程の右岸、鍋田地区川沿いにある。標高212mと低く、洪水にあう地。寛政(1789~1800)絵地図にあり、木々も見える。舟運監視の館か。昭和40年頃河川の大改修と水田圃場整備事業で、遺構消滅した。字限図、現場状況と記憶により図面にした。その結果、長軸70m単軸40mの長四角、周囲巾5mの水堀を館の内外に土塁が築かれていることがわかる。



1993.10

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)

なかおちあいだて  
**中落合館** 213-020

所在地 南陽市中落合字宅地

築城者 落合堂伊賀守好盛

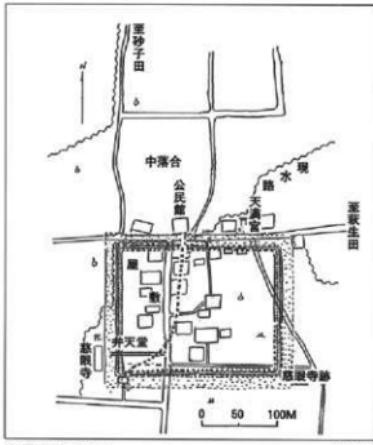
築城時期 慶国期

参考文献 『東置賜郡史』(下)

『沖郷村史』『南陽市史』(上)

概 要

国道113号線若狭郷屋から長瀬への道沿いで、水田平野のどまんなか。沖郷村に、天正年間(1573~1592)落合堂伊賀守好盛が、伊達政宗を慕い家来5人と僧侶1人をつれ、ここへ住み館をつくる。内館1町8反、外館4町5反歩、内館は周り濠、内に土塁四間の門(入口)。文禄3(1594)年間放(廃城)とある。昭和40年耕地整理で遺構消滅、字限図と現場で図面作成、標高224m長四角の館とわかる。(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木朗)



1993.10

中落合館略測図

けいあいざんданて  
慶海山館

213-021

所在地 南陽市宮内字高日向山外

築城者 不明

築城時期 不明

概 要

館跡は、宮内の北、双松公園で町並みが一望できる。標高 320m、差高 70m と高い。東尻無沢、西菖蒲沢にはさまれた高台。頂上付近は瓢箪形で、地形を利用した曲輪の構えが特徴。主郭に、明治 33 年分塁創設の、琴平神社を祀る。南側公園造成、バラ園・菊祭会場、西側宅地造成で遺構消失が多い。長軸 380m、単軸 100m。館跡の北、東側に帶曲輪等の遺構が残る。また主郭の北側 2 段ほどの下がりに、井戸郭あり水神の小祠を祀る。西・西北に宮沢城、北館が近く東に平館、丸山館がある。

(丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 朗)



慶海山館略測図

1994.12

所在地 南陽市宮内字白山堂・館の上ほか

築城者 遠藤因幡守盛房

築城時期 室町期

参考文献 『東置賜郡史（下）』『南陽市史（上）』『東北の熊野』（黒江太郎著）

#### 概 要

宮内熊野神社の奥、菖蒲沢を北へ進むと宮沢城、続く西側の丘と山岳地帯が館跡。櫛張りは、400m四方におよび、小字名も白山堂・鍋石・武道作・寺山・館の上にまたがる。善曲輪の配置は、地形を巧みに利用、しかも同じ構造に築かれているのが、この館の特徴である。その形状は、図面に見るとおりであるが、左手を広げて北西部の山頂に置くとわかる。指はそれぞれ郭群（砦）におく。仮に南の郭群に親指を置くと、これを第Ⅰ、次の人はし指が第Ⅱ、以下ⅢⅣと置きⅤは長谷觀音となる。この觀音堂は置賜三十三觀音、30番札所、最初の本尊は慈観大師作と伝え焼失、後上杉藩再興現本堂は行基作という。館は、地形を巧みに利用して、同じ形の郭群（砦）を4ヶ所と並べ、しかも各群を曲輪で結び、山頂で指揮できるつくりが特徴といえる。

頂上の標高は420m、東側通路は290mで差高は130mとある。この間直線距離約200mと傾斜は急勾配である。各郭群で築いているテラスの段差は、3~4mと大きいところも多い。各郭群には、稍同じような位置に虎口を置いている。第Ⅰはロ、第Ⅱはニ、第Ⅲはホ、第Ⅳはヘをそれぞれの虎口であろう。第Ⅰ群の南の広い曲輪は、根小屋だったろう。このあたりは南面で日当たりもよく、水利にも恵まれている。先ず、第Ⅰ群の虎口の位置から入ってみると、通路は曲がっているが、樹形は見当たらない。ここを登りに行くと差高3m 差高の曲輪2ヶ所、樹形も2ヶ所ある。40m北へ進むとルも樹形がある。トーチの小径は、かくれ道か連絡道と思われる。更に山頂の曲輪を通ってVIにも行ける。第Ⅱ群は、ハーオーリを経て、ここの本丸へ達せられるが、3ヶ所の樹形と曲輪間の段差が大きいので、ここは最も攻撃しにくいくらいである。また又の位置や、ニからも本丸へ登れるが、途中の道すじが複雑である。第ⅡからⅢ群へ通ずる曲輪、その他にもあるが、兵員の移動に役立つだろう。第Ⅱと第Ⅲ群間の広場、巾50m、長さ100mとある。ここは兵員の集合訓練か、作戦のためのものか不明。次に第Ⅲ群を見る。東端は舌状に張り出した段状腰（帯）曲輪と、ホの付近は連続樹形を思わせる。また、この帶曲輪が狭いうえ段差が大きいため、迷ってしまいそうだ。

第Ⅳ郭群は、より細長く、テラスが複雑、東端の段状腰曲輪は直線のため乗りこえにくい。この北斜面の谷は深く急斜面で、ここは登れない。次に北西の高台ワへ行くと、3m四方の土壠、尾根を30m西へ小さな掘切一本ある。この館は、伊達家臣遠藤因幡守盛房が応永8年（1401）～延徳2年（1490）4代にわたり、羽州南方奉行人として住み、刈田郡内親城へ移った、という。

（丹野虎次郎・加藤次郎右衛門・鈴木 順）